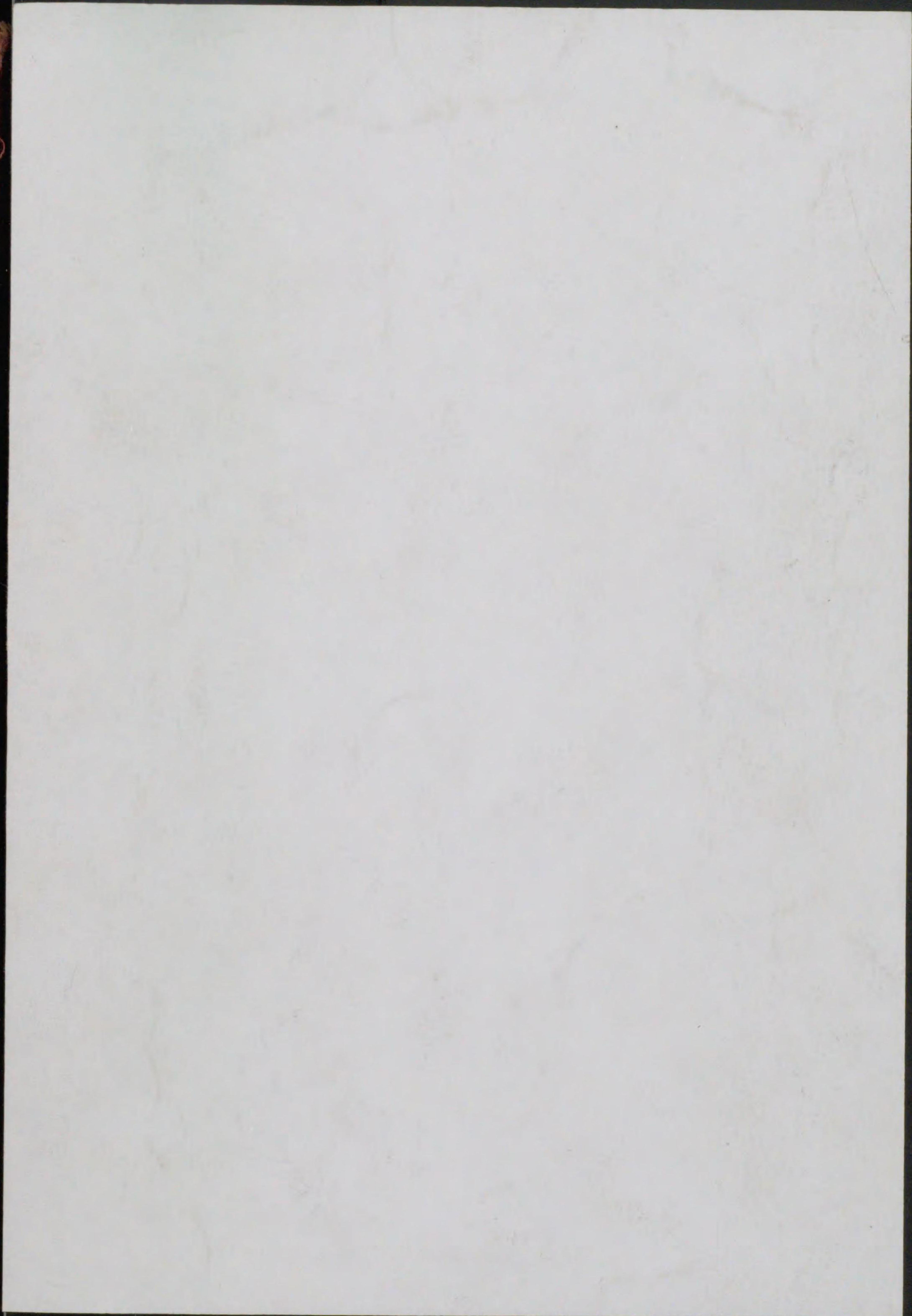


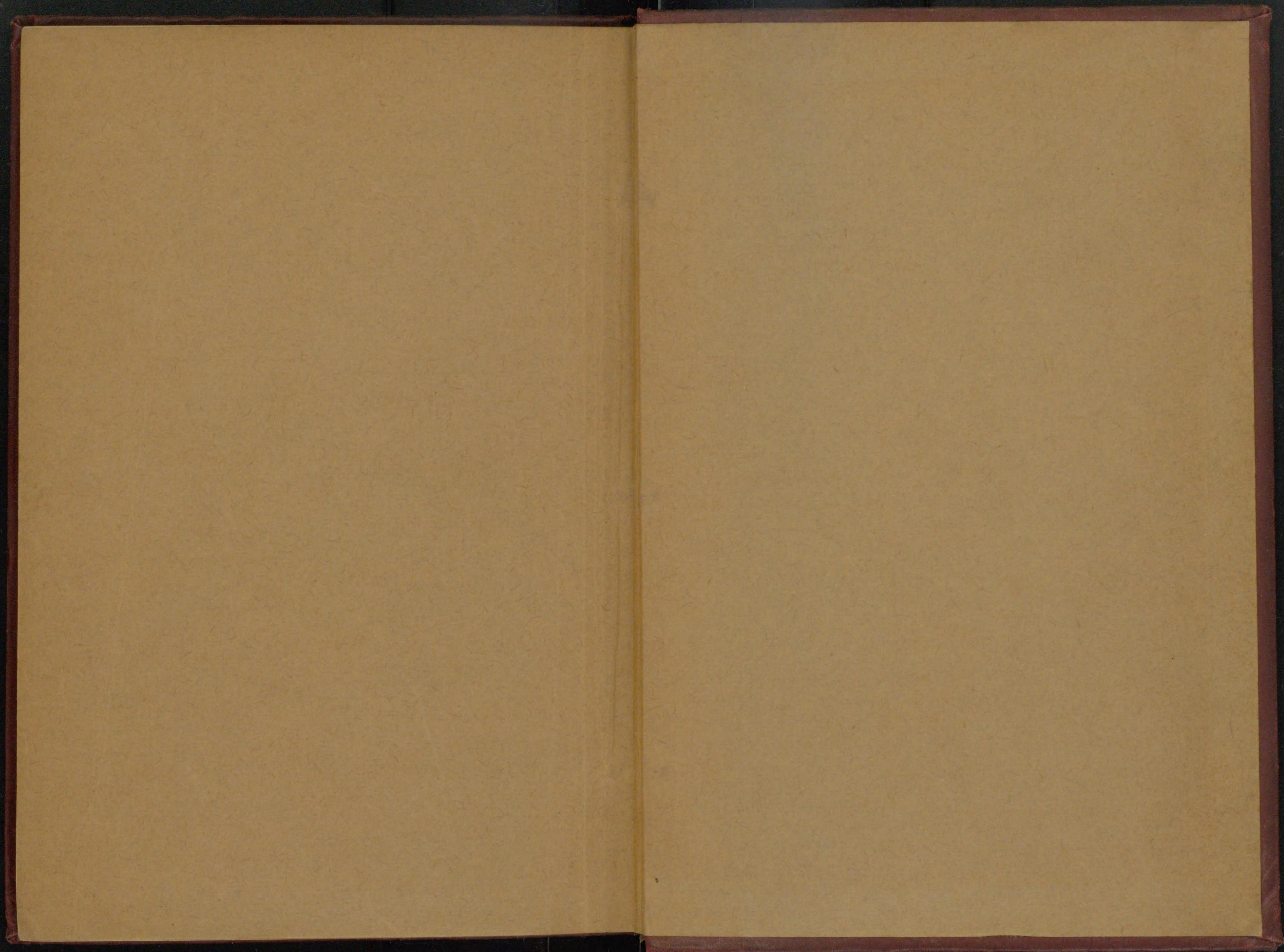
704

704-134



1200501583188





212

性女の遠水

尼月蓮

704
134

尼月蓮き如の月明む澄に空
る語物をと歌と涯生と人の



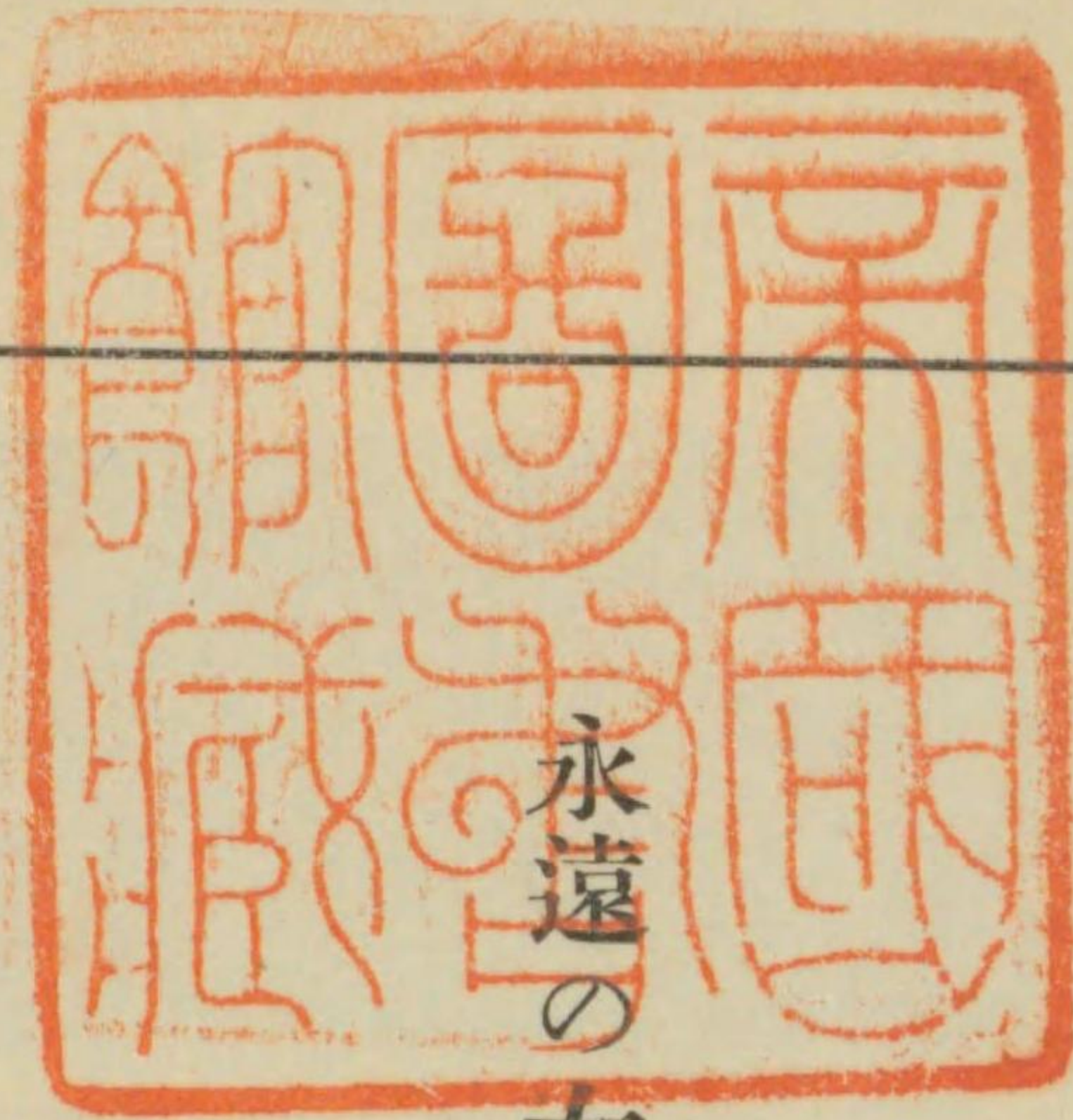
處の棲陰尼・院光神茂加西

著 範 文 沼 蓮

東亞文苑

卷之四

大東出版社



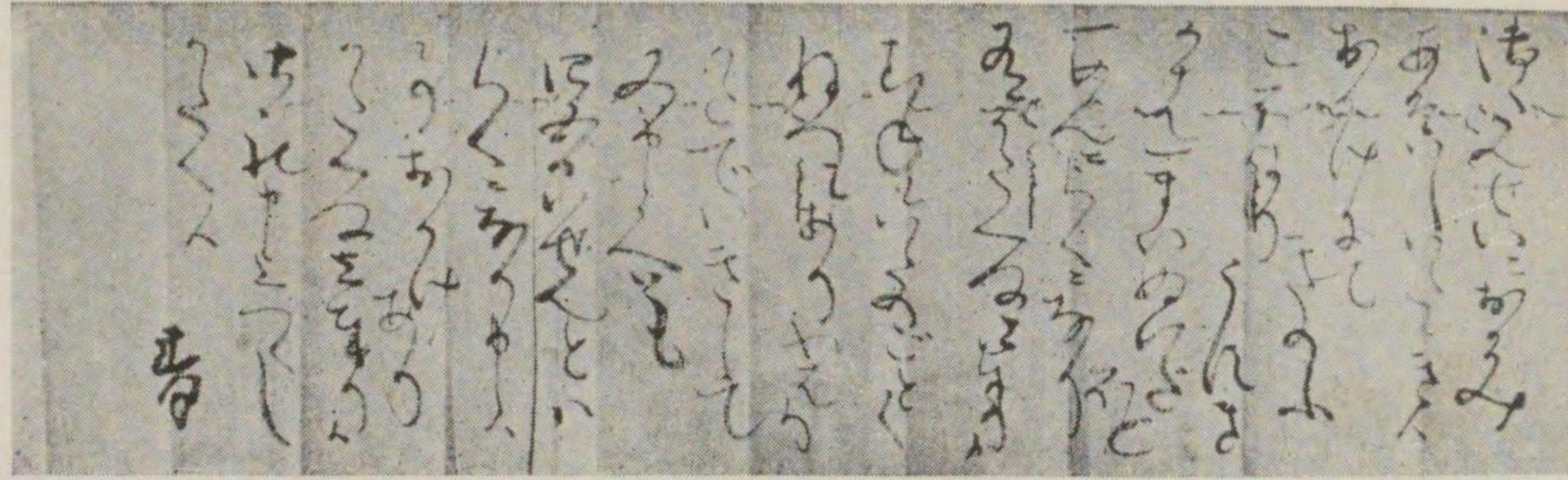
蓮沼文範著

永遠の女性

蓮月尼

大東出版社



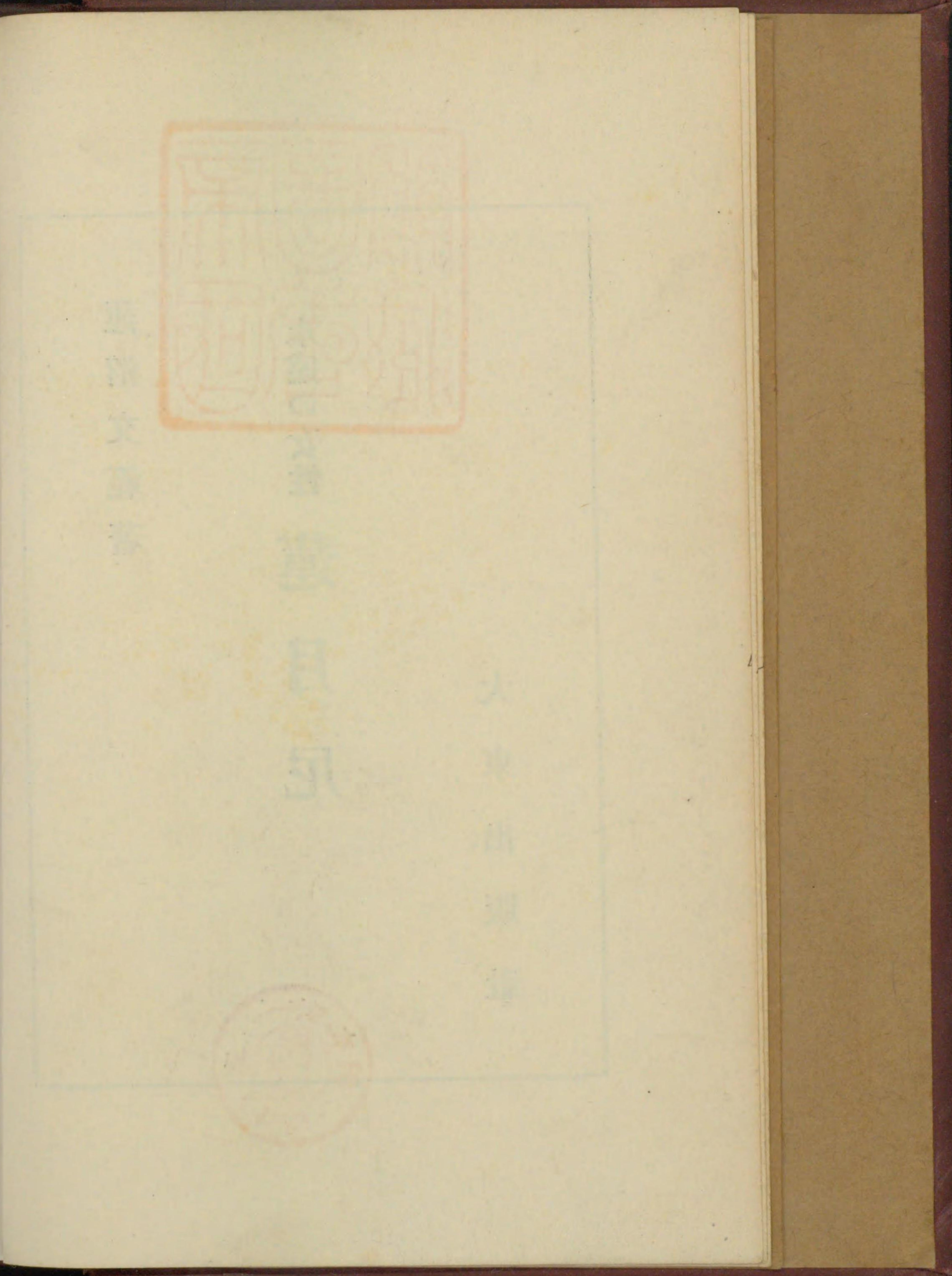
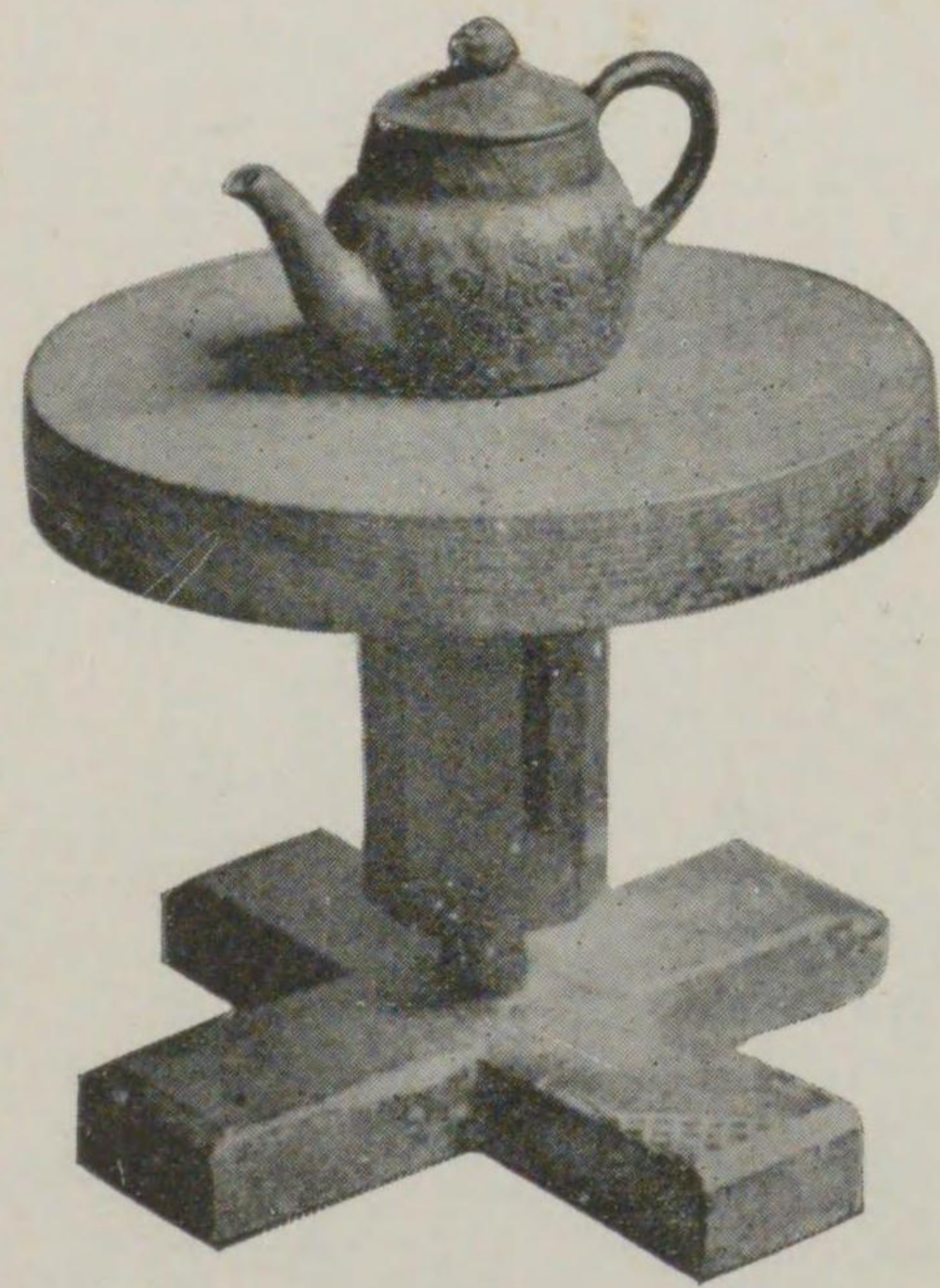


(藏院光神・都京・書の中病尼) 筆 絶

轆

轆

(尼生涯の使用・京都神光院藏)



704-134

序

願れば二十年の歲月が流れてしまつてゐる。今では其の追憶さへともすれば薄れてゆきさうであるが、時々回想をすることに甘かりし過去として懐しい學生時代が眼の前に浮んで來る。其頃洛北鞍馬口の學窓にあつて幾年かの學生々活を送つてゐた。紫野のほとり遠く東と北に展けた洛北の平野の四時の景象と、其れにつれてゆく四季の生活は自分には堪へられぬ悦ばしいものであつた。學校の古典的な講義には興味を持たなかつた自分は、唯だ四時の風物と自然の心を求めるために常に散歩に日を暮してゐた。比叡の穏やかな山容と加茂川の靜かな流れと、前に明滅する京の町の火とは今でも忘れがたいものである。

學校の講義が終るとすぐあてもなく野に足を運ぶのであつた。京の火を慕うて南に向ふこともあれば、下賀茂の糺森に心ひかれて東に行くこともあり、紫野大徳寺の森影をぬけて船岡から北野の方へと西へ辿ることもあつたが、一番よく歩いたのは上賀茂への堤であつた。

松並木がとどく堤防を磧を見下しながら北へ進むと大きな川のカーブがあつて、稍遠く上賀茂神苑の橋が覗いて来る。やつと橋を渡つて神苑に逍遙するのが何よりの嬉しきであつた。橋の袂の名物菓子餅を嗜んだり、楢の小川に見入つたり、時には清らかな廣い磧に腰を下して日の暮れを待つこともあつた。

洛北の四時の交替は京都がもつ四季の特徴をよく素朴に示すものであつた。比叡にかすむ霞、北山の時雨、洛北の野邊の野火、紫野の春の草々、そこらの森や林の新緑。そうしたものが靜かに穩やかにほつきりと移變つて行くのである。その中であつて比叡の山に大乘止觀の面影を眺め、紫野に悲願一乗の草を摘む生活は、青年の感傷的な涙多い心に夢幻的な感興を興へずにはおかなかつた。

蓮月尼に心引かれるやうになつたのは、この生活がこの女性に近づけしめたことは云ふ迄もないが、上賀茂への愛が程近い尼の隱栖地の神光院にも時々訪れしめ、尼の墓所へも詣する機会を興へるやうになつてからであつた。尼の歌集海士の荊藻を懐ろにして屢々賀茂の堤防を往復したことは、それも二十年の昔となつてしまつた。京の地を去つて武藏野の村に放浪して素朴な關東の自然に接するやうになつてから、自然への關心は更に深まつて行つたにつれて、この自然詩人蓮月尼を追憶することも又一つの仕事であつたが、今やうやく其の心をこゝに纏め得たことは自分の愛するこの尼に對する思慕の一端が果せたことを歡びとした。特に昭和維新の叫ばれる今日、明治維新の國士であつた尼をこゝに顧ることも又意義なきことではなからうか。終りに本書を草するについて此の方面研究の第一書、村上素道師編の蓮月尼全集に負ふことの深かつたことを感謝してやまない。

昭和十一年早春

河内生駒山西麓の山房にて

愛 染 塔 生

目次

一人の女性……………一
悩みの中をゆく……………一九
苦惱を超ゆる者……………二六
四時の露に濡るゝ——春——(一)……………四
四時の露に濡るゝ——夏——(二)……………八
四時の露に濡るゝ——秋——(三)……………一〇六
四時の露に濡るゝ——冬——(四)……………一三九
清貧安住……………一四三

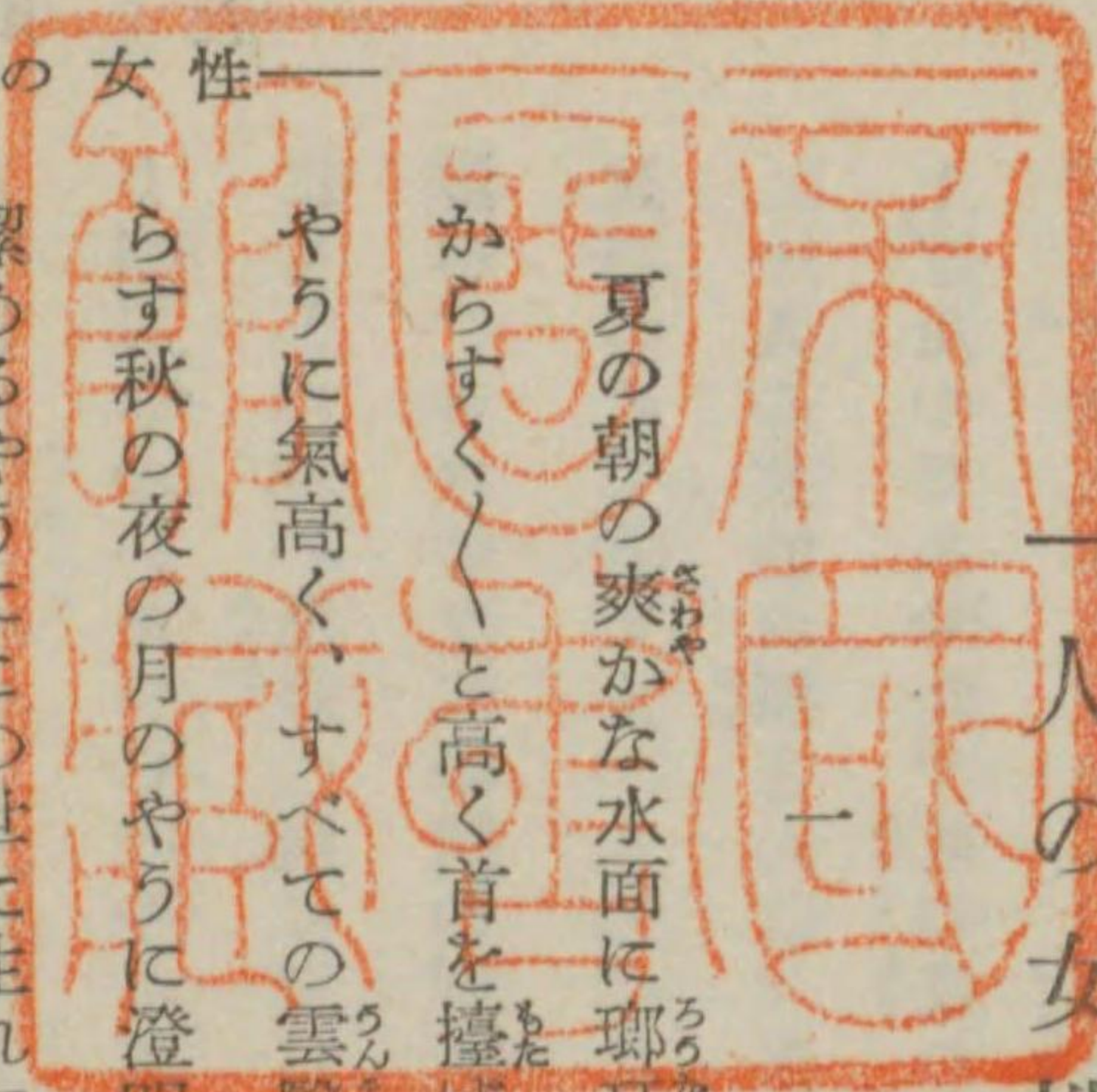
世を思ふ……………一七〇

永遠の女性……………一七九

永遠の女性 蓮月尼

蓮沼文範著

一人の女性



一人の女性

夏の朝の爽かな水面に瑯玕の玉を展げたやうに、碧緑の廣葉がのび／＼と擴がつてゐる間からす／＼と高く首を擡げて今しも其の清爽な苔を破つて四邊に馥郁と清香を放つ白蓮のやうに氣高く、すべての雲翳を拂ひのけて澄み切つた青空に唯一つ皎々と吝しみなく世を照らす秋の夜の月のやうに澄明な一人の女性が、ともすれば亂れがちな幕末の慌しい世相を潔めるやうにこの世に生れて來た。其れは其の女性がもつた運命ではあらうけれども、洵に奇しき一つの因縁であつた。

東山三十六峯の隠やかな峯のつゞきが眠るやうに低い曲線を描いて、夢を誘うやうに静かな加茂のせせらぎと共に何日もこの古都の深き平和な熟睡を素することはなかつた。世の遷變りが運命のいたづらのやうに、時たまにこの都の風雲を搔亂すことはあつても、それはすくにもとの都の風雅の胸に還へつてゆくのであつた。宮々の朱の玉垣には忍びよる平安の香が漂ひ、寺々の夕べの鐘の響に王朝の囁きが籠つてゐるのであつた。永遠の都と云ふ言葉が世に許されるのであつたら、この西の京は正に其れに價する唯一つのものであつた。

一人の女性お誠さんは、かゝる麗はしき環境に恵まれた都の片隅に事もなげに呱呱の聲を上げたのであつた。糺の森の鬱蒼たる神苑を加茂川の彼方に眺めて、冬の夜は川千鳥の啼く音に更けてゆく三木の嬌斜の巷、辻行燈に映える自分の姿をさへ人目に避けて、夜毎に魅かれものゝやうに通ふ遊野郎の中には、身分卑しからぬ大家の若殿原も少くなかつた。若氣の過ちがともすればかゝる巷に醸されがちであつた。

伊賀上野の城主藤堂氏の分家と云はれる藤堂金七郎とか呼ぶ若殿も其の例に洩れなかつたと考へられる。眉目美しい青年の御前様は、この三木の巷に一人の明眸の阿佗たる姿に迷

ふことになつた。人目忍んで繁々と通ふ貴公子の姿に、待間もどかしき美女との情熱に燃ゆる灼熱の情炎は、いつしか美しい誠子と云ふ玉はづかしき女兒を儲けることになつた。其れは然し此の二人を幸福の坩堝に溶かすことではなかつた。

身分の相違と云ふ犯し難い不可抗力が二人の熱情と云ふ鐵鎖をも易々とたち切つてしまつた。生れ出でた玉のやうな誠子は二人をつなぐ絆ではなくて、却つてこの幸福の夢をにべなく破る一つの爆弾であつた。金七郎は自己の身分に眼醒めなければならなかつた。幕府のお目付けを避けなければならなかつたし、故郷の聞えも氣にせずにはゐられなかつた。若い心はこの辛い柵をじつと躰めて、朱の小篁にでもそつとしまつておきたいやうな甘い回想を強ひやうとはするけれども、嚴として身を苛む社會的秩序は、其れをさへ恥づべき行として打消さうとする。

誠子の母は生れ落ちたいとし兒を我子として養ふことさへ意にまかせず、生後僅かにしてこの子に後髪ひかれながら丹波龜岡の藩士に嫁ぐことになつたと傳へられる。及ばぬ戀の破綻が、いかに深刻に彼女を悲嘆の淵につき落したことであらうか。母に捨てられた誠子は眞

實の父にさへ迎へられることも出来なかつた。其れは父にとつては面目に關することであつた。してはならぬ邪しまな戀の持ち來した一つの重荷であつた。禁斷の果實を喰つた者の負はねばならぬ罪惡の負目であつた。

途方に暮れた金七郎は、思案の末に餘つてゐた。けれども又其處には救ひの神もあつた。恰度この藤堂のお屋敷に親しく出入しつゝ、常に彼れの碁の相手をつとめる一人の士があつた。知恩院の寺侍を勤める大田垣光古が其れであつた。彼れははたと手をうつた。光古こそはこの難題を解くには恰好の對手であつた。彼れはいつになく摧けた態度で自分の若氣の過ちを打明けて、光古に誠子の處分を頼みこむのであつた。突然の話に光古も幾度かためらつたが強ひての願ひをそつてなく拒絶しかねて、親子三人の淋しい家庭に、この上臈の落胤を迎へて、賑ひの一つの花を添へることになつた。

二

後の蓮月尼、大田垣誠子は、生れながらにして實の父母には育てられなかつた。生みの親

には生きながら別れねばならぬ悲しい運命が其の襁褓の中に、もう訪れてゐるのであつた。相寄る二つの魂が、甘い囁きのうちに、形づくつた一つの記念であつたけれども、この永遠にかしづかねばならぬ彫像は、打ち砕かれた二つの魂の永遠の記念として淋しく残されたことは、いかにも淋しい人生の側面を皮肉にも悲しく物語つてゐる。無心に微笑む天使の如きこの嬰兒が運命の神のいたづらを、神に代つて微笑むのもあらう。

この嬰兒が大田垣の家に迎へられたことは何よりの幸福であつた。寛政三年正月と云へば養父光古は三十五歳、養母の繩氏は三十二歳で、一子仙之助は九歳であつた。何不自由のない、而も子一人の淋しい家庭で、誠子の美しい女兒の姿はひっそりとした構へを、俄かに明るくすることになつた。大田垣の家にしても、やはり勿怪の幸福であつたと云つていゝ。寧ろ索性卑しからぬ上臈の落胤を養女に迎へたことは家の誇りにもなるであらう。いかにも美しき花を添へた形であつた。

誠子は其れ自身かゝる不思議な運命によつて、大田垣の人となつたことを終生知らなかつた。或は知つてゐたかも知れないが、彼女の口からは羨みの故か一度も其れを洩してゐない。

大田垣の家付の娘として終始してゐるところを見ると、貞節の唯一筋に其身を潔めてゐた彼女の人のよさが浮出てゐる。かゝる祕密は凡らく彼女の潔白な性格によつて打消されてしまつたのであらう。

「……………」

わたくしおやども、かぶと山九右衛門正重と申ものゝ子に徳右衛門正古と申、弟が仁平治行てると申ものゝ子にて御さ候。

あなた様御聞被遊候は、そのゝちの九右衛門に御さ候はんと存上參らせ候。おやどもは安永比のうまれにて御さ候。……」（知足宛）

と明らかに大田垣家の娘として其の父の出自を示してゐる。襁褓の中より育てられたるものは、養父母こそ眞實の父母と云つていゝ。親が嘗める苦も樂もより以上に嘗め盡したことによつて、寧ろ眞實の我子よりも可愛さを増さねばならんし、生みの親よりも養ひ親には故知らぬ運命的なるより深き愛が醸され勝ちである。誠子もこの例に洩れるものではなかつた。

家付の娘として父母の並外れた鐘愛の中に其の幼少時代を送つた彼女には、大田垣の家に

對する愛も次第に深く植付けられてゆくのであつた。この家の家系についての詮索や其の父についての述懐には少しも養女としての暗さが示されてはゐなかつた。眞實この家の娘として其の家系の古への光りを慕ひ、この家の娘として自分の責務の重大さをも痛感するのでもあつた。僅かな扶持によつて兎に角武家の面目をたて、生活に困るやうなことはなかつたけれども、祖先の輝かしき過去の業績に較ぶれば猶ほ遠く及ばぬものがあつた。

父の伴左衛門光古は、因幡の國鳥取在に寶曆五年を以つて生れたと云ふ。若くして山崎家に入り其の家を繼ぎ、一人の農夫として養家を支へねばならなかつた。然るに天明三年突如京師に上つて知恩院に出仕することになつたのであるが、其處にはこの若き父に人知れぬ惱みがあつたことが想像し得られる。一人の士分の身が片田舎に農夫として骨を埋めることの苦痛、程遠からぬ但馬には一城の城主として赫々たる偉名を傳へた祖先の遺跡が、其の名と共に傳へられてゐること、功名に燃える若い血が、山陰の田舎生活に堪えかねて慌しい出京となつたことは、光古の上洛の動機に相應しい。

天明六年因縁を求めて知恩院華頂門跡の勤仕の士として出仕する身となつた時、三十歳の

彼れは、如何に其の希望の容れられたことを満悦したことであらうか。妻子を故郷に残して唯一人郷關を出でた時の決心は並々ならぬものがあつたことは云ふ迄もない。寛政元年やうやくにして思残した妻子を京に迎へた時は、一家を擧げての都住ひの幸福の上に、一人の士分として一家を起してゆく誠に希望多きものであつたに違ひない。

其の翌年寛政三年はこの一家にとつて更に幸福が惠まれた年であつた。正月早々誠子を迎へて將來は一子仙之助の配偶として格段の家柄の子女が與へられた上に、其の八月には知恩院の士として譜代を仰付けられることになつた。これによつて彼れの生活は安定し、其の地位は搖ぎないものになつた。鋤犁の間に果てなければならなかつた光古は、帶刀を本分とする一人の武士として洛東の一廓に俸祿の生活を營むことになつた。寛政十年には本姓の大田垣に復し、元服した一子仙之助も賢古と名告り、この年より父と共に出仕を許される身分となつた。

三

大田垣の家系並に其の祖先の業績については、誠子後の蓮月尼が其の故郷の一族と時々往復した書簡の中によく示されてゐる。

「……先に但馬天民ぬしよりまゐり候文、み出し候まゝ御らんに入參らせ候。又この表米親王は、但州あさごの郡枚田村に千年前よりの宮御さ候よし、

赤淵大明神

大海りう王神

表米親王

この三所まつり御さ候よし、別當神淵寺と申候と、是も又但馬天民ぬしより承り居候……」
(知足宛)

と云ふ文面によつて其の古き祖先が遠く親王の血統に出づることを示してゐる。其れを更に委細に示してゐるものは天民より尼への音信である。

「……大田垣、垣屋、八木、田井莊、奈佐、朝倉杯皆同じく孝徳天皇の末流。大系圖に平家の別流といたし有之は誤也。右之内平家より養子に而もいたしゝ家有之や不知。右家名

異なれ共、姓は皆同く日下部氏、表米親王の末流也。故古を尋れば同じく親王の子孫也。貴家共に外々の他家とはちがひ申候。此段も序故一寸申上置候。前代但州朝來郡司大田垣土佐守竹田城主、赤松之爲に落城に相成申候、天正元龜之比也。……」

孝徳天皇を祖と仰ぎ奉り、表米親王の末流として但馬地方に大田垣、垣屋、田井莊、奈佐、朝倉等の諸家に別れてゐるけれども、均しく姓を日下部とする一族であることは明かである。特に中古に於ては竹田城主として其の地方に重きを示してゐたことは、更に

「……朝來郡竹田には、古城の石すゑなども今に有と申され候。……定紋の事仰被下、くわの中につたにて御ざ候。是はかぶと山大田垣もこのもんにて御ざ候よし、應仁記、應仁後記等に先祖の事ありと申事、おや居候うちに一度み申候やう申居候へども、わが好なるものはたづねてもみたく、ぐん書はいつかうみ不申候ゆゑ存不申候。ごたい平記にてかちよとみ申候へども、是もおぼえ不申候。……」(知足苑)

と云ふ言葉によつて、戰國時代の亂世に處して其の近祖の活躍が想ひ合せられる。山名持豊の家臣として、竹田城を守り嘉吉、應仁の亂に其の勇名を馳せたものは景近、朝古であつ

た。朝古の後傳へて政行、行輝(仁平治)輝古と次第し、輝古こそ誠子の父光古其の人であつた。朝古は景近の四男で、三男宗朝、竹田城を繼ぎ、其の孫朝廷に至つて羽柴秀長に攻略せられ一族は城下を去つて終に因州鳥取に農を家業とするやうに立到つたと傳へられる。

武門の名家として、其の盛名を再び取返へさうと云ふ大それた考へは光古には無かつたやうであつたが、せめて武士となつて其の家門の名を穢したくないと云ふ望みは彼れにとつては正當な願ひであつた。今其れが達せられたのであつて光古の満足は云ふ迄もない。けれどもぼつり／＼と幼少な誠子に語る家系の譽れは、亂世の英雄として世が世なれば再びこの落ぶれた大田垣の家に回天の偉業がなされやうものをもと儚ない夢を夢みるのでもあつたらう。蓮月尼が老年に及んで故郷の人々と交した音信に、父の物語を聞きしんで家門の名を回想する處に其の面影を偲ぶことが出来るやうである。

四

父の光古と子の賢古とが並んで宮門跡に出仕すると云ふ幸福は、大田垣の家にとつては得

がたき幸運であつたと云つていゝ。誠子も次第に其のあどけない姿を家庭の笑ひの中に大きくしてゆく。この幸運がいつまでもこの家に恵むとしたら、この上の幸恵は願はずとも洋々たる未來が其處に待受けてゐるに違ひはない。知恩院の譜代として確かな家柄が其處に堅い位置を築上げるであらう。祿は少くとも士分としての生活に何の心配もない安泰な暮しと、宮門跡の譜代の士としての名譽とが、光古の今迄の地位には望外なものとして與へられたのであつた。

いたいけな誠子が、成人するにしたがつて、もつて生れた麗質は、磨かずとも日々に澄んでゆくのであつた。其の容姿の美しさと聰明な頭腦とは次第に芽えてゆく。生の親の貴き家柄が其の育ちの上に明らかに示されてゆく。藤堂金七郎の容姿は光古の眼には新しくないけれども、見もせぬ生母の唯人でないと云ふことをさへ誠子を通じて想像するのであつた。不思議な運命の祕密が、この女神の如き女兒を自分に恵んで呉れたことを、光古は其の妻と常に深い感謝を捧げるのであつた。

光古は誠子を前にして、時々幸福なる未來を想像して見る。悴賢古の成人ぶりを振返つて、

この二人の睦まじかるべき十年の後を胸に描くと、知らず／＼満足の笑が兩頬に湧いて來るのであつた。娘に似た聰明な孫が大田垣の家を繼ぐであらう。門跡様の御覺えが更に目出度くなるであらう。自分の過去の無謀にも近かつた企てが兎に角軌道に乗つて遙かに遠い彼方の見透しが、かくも無難に與へられたことを、脊に汗しながら此の幸運を前にして危く振返へることも時々あつた。

春日遅々、和煦霽々の幾年かゞ過ぎ去つた。この家に幸運の花の咲匂ふ時も餘り遠くはなくなつた。然し時は怖るべき暴君であることも忘れてはならん。駭蕩たる春風が、いつ暴風驟雨と位置をかへるかも知れない。咲誇つた花は一たまりもなく枝を離れるであらう。幸運のクライマックスはやはり悲運のスタートであつた。享和三年が事もなげに迎へられた。けれども其れは何と云ふ惨らしい無殘な骰子の目であつたか。凶の符がこの大田垣の家に届けられたことを光古は勿論知る由もなかつた。

咲誇る花が一陣の風に誘はれて地に塗れるやうに、春先から病に冒されてゐた若い賢古は散る花と共に永い未來の夢を残して兩親と誠子の愛の手から去つていつた。慌しい浮世であ

る。二十一歳の若者の艶々した顔は、見る／＼光と色を失つて生氣のない骸が生命の形見として其處に横はつてゐるのみであつた。來てはならぬものが來てしまつた。今迄想像もしなかつた不吉が、今眼の前の事實となつて、打消すことの出來ぬ現實を茫然と瞞めるより他に術はなかつた。

止どもなく流れる涙である。二十一年の苦を惜しむ涙ではない。失はれゆく末遙かに残されたこの子の未來の幸福を惜しむ涙である。光古には幾人もの子はあつた。けれどもすべては夭折して一人残されたこの子に愛を傾けてゐたのであつた。愛の深きが故に悲の大なることも理であつた。五十の齡に近づいて、再び得ることなき寶を失ふことは、命にもかへがたい苦痛であらねばならなかつた。全身を人生の堪え難き苦味に浸したことは光古にとつては今が初めてであつた。

男子は猶ほ慰むこともある。けれども母の悲嘆は生きる術さへ否むものがあつた。賢古ゆゑに今日まで生きた命であつた。彼れなくして生きることは虚しき骸を養ふに過ぎない。致命的な母の心勞は遂に彼女の命をさへ奪ふことになつた。子に捧げた犠牲の如く秋風を俟つ

ことなく其の六月、四十四歳を一期として此世を閉ぢた。木の葉の舟に再び襲ひかゝつた波のうねりであつた。この家の前途にはすべての光明は消え失せた。あやめもわかぬ暗がこの小さな舟を待受けてゐるのである。

光古が描いた胸の影繪はすべて夢であつた。美しく點されてゐた燈火は狐火であつた。今迄我ものと考へてゐた妻と子は、我ものではなくなつた。つく／＼と顧みる時、其處に残されたものは五十路に近い老ぼれた孤影悄然たる自己のみであつた。このもののみ、間違ひもなく現實の自己の所有であつた。そして其の周圍に展開するものはしがたい淋しい人の世であつた。而しこの自己も、この人の世もやはり自分のものでない。まゝならぬ世であり、思ひにまかせぬ自分であつた。

知恩院の鐘の音がいつになく身に泌みるやうになつた。ともすれば棄鉢に近い心が胸をかすめる。けれども一人残された誠子の愛にやうやく元氣を取戻すのであつた。

大田垣の家を襲つた悲運は、光古のみの悲しみではなかつた。漸く十三歳を迎へた小娘の誠子にとつても、其の小さい胸に強く刻まれた、寧ろ終生癒えがたい痛手であつた。慈眼視衆生ではない、唯自分のみに灑がれた母の愛が、兄の慈しみが、一時に奪はれたのである。自分の太陽であり自分の光りであつた母と兄が突如として歸へることなき旅に立去つたことは、彼女に、而も聰明なこの乙女に、漆黒な暗を與へると共に、其の暗を通して、ある微かな光りをさへそれとなく示しはしなかつたか。

父と娘との淋しい家庭である。氣を落して一時に老けた父を母に代つていたはることを誠子は忘れはしなかつた。小さい胸を痛めながら父を慰める彼女であつた。廣い世界に末を頼むはこのいたいけな娘ばかりとなつた今日、光古には掛替のない誠子を、不自由な生活に苦しめることも心に泣きながら、唯一途に鐘愛の誠を輸すのであつた。

嘗てこの娘を、いつ迄自分達夫婦のもとに置くことは光古には堪えられなかつた。武家の娘として躰る責任を痛感してゐた。其のためには手離し難い誠子ではあつたけれども、娘としての修業のためには何れかの藩の奥勤めをさせることが一番いゝ方法であつた。何かの手蔓を求めて娘修業の旅に出すことがこの時代の習慣でもあつた。

誠子には其の修業のために丹波龜岡の藩が選ばれたと云ひ、縁故の深い因州鳥取藩が選ばれたとも傳へられるが、生母との関係があるとしたら或は龜岡藩であつたかも知れない。兎に角七歳の子供のうちから奥勤めをさせてゐたと傳へられてゐる。(或は母の死によつて父光古が其の責任を感じて武家奉公に出したのではないかとも思へるが、七歳説に従つておく) 武人の妻として將來立つべき女性の教養のためには、女性としての身躰はもとより一通りの武藝は當然修めねばならなかつた。裁縫や舞や和歌やは固より、薙刀、劍、鎖鎌、柔術の類は、護身の用として必要であつた。

誠子がこれらのすべてに堪能であつたことは、其の聰明さによつて首肯することが出来る。後に多くの逸話を残してゐることは、偶然ではなかつた。しとやかにして勝氣な彼女の氣質が、何事についても忽緒にしなかつたことは事實であつた。それが妙齡の年頃迄致々として學ばれたとすれば武家の娘として恥ぢない教養が既に出来てゐなければならなかつた。かくして十七歳の誠子は再び待侘びる父光古の膝元に歸へつて來た。父の悦びは過去の苦しみの

と世の人々は思ふたであらう。

一子賢古が死んだ後、大田垣家の家督を継ぐべき養子が將來誠子の婿がねとして迎へられねばならなかつた。其の白羽の矢は、やはり光古の血統を傳へるために因州の同族の中に向けられた。恰度一族の田結莊家の三男に天造と云ふのがあつた。光古のお眼鏡になつて文化のはじめごろにはこの家に入り、元服して望古と名告つてゐた。家に歸へつた誠子はこの新しい兄と永き契を結ぶことになつた。

新婚の夢は朗かであつた。光古の顔にはやうやく安堵の色が見え初めた。けれどもこの結婚は大田垣の家に光を齎すものではなかつた。新婚間もなく始まつた望古の前と打つて代つた放逸振は、何に起因するのかわかぬ父にも妻にも會得が出来ないものであつた。門跡への出仕は愚か、家を外への放蕩に、人のいゝ父光古は妻の誠子と心を痛めてはゐたけれども、一時の氣紛れとして靜かに其れを傍觀しながら、正氣にかへる日を待兼ねてゐた。

子が生れ、ばと、かすかな望みを持つてはゐたが、其の翌年には待焦れた男の初孫は芽出度生れたけれども、其れも間もなく死んでいつた。光古の顔には次第に憂ひの雲が濃くなつ

てゆく。其の翌年にも女兒が初聲をあげた。しかし望古の亂心は少しも治まる時がないのみか、次第に募りゆくのみであつた。この子も三歳でみまかつた。又其翌年にも女兒を出生した。つゞいて三人の子までなしたのである。も早や夫望古の亂行も、いゝ加減に修まらねばならない時期であつた。貞節にして聰明なる誠子は期をみては夫の改心を乞ふのであつた。

其の中に三人目の女兒もいたいけな中に死を急ぐのであつた。好人物の父光古は早や七年の忍耐をつゞけたのであつた。が、養子望古の心はいつかな癒える時もなかつた。酒色のために身を持頼し、博奕の仲間に入り、徒勞徒食は愚か、父に逆ひ、妻を打ちのめす。この家とこの父と更にこの妻を持つことは、望古にとつては並々ならぬ幸福であらねばならん筈であつた。其れを何故の不满であつたか。

痺をきらした父は、到頭養子望古の離縁を決心した。折角迎へた一族の養子であつたけれども、この者をこれ以上この家に置くことは、大田垣の家の破滅を招くことになる。光古が最善の努力によつてこゝ迄築上げた家運を根こそぎ覆滅することは自明の理であつた。離縁と云ふことは甚しき不義理であり、不人情ではあつても、この場合其の方法を採るより他に

術はなかつた。父は誠子に其の旨を涙ながら傳へるのであつた。

誠子は今の今迄、離縁と云ふ恐ろしい事實を考へたことはなかつた。貞婦は二夫に見えずと云ふことは彼女の金科玉條であつた。そのみでない、たとひ悪魔であれ、悪鬼であれ、自分が一度仕へた夫はやはり終生の殿御であり、永遠の婿がねでなければならぬ。一度交した契りは汗の如く再び代へ難いものである。然るに突如として父の黙し難い命が傳へられたのである。

父に組するか、夫に従ふか。彼女は殆んど其の首鼠の兩端に眼が眩むのであつた。血を吐く思ひで諫めた夫は、いつも其れを聞流しがちであつた。誠をこめて云ふ言葉は少しも通らなかつた。二十五歳の彼女は、も早や分別に迷ふ時ではない。家のため父のためには、やはり生木を割く苦は忍ぼうとも、離縁の苦杯を嘗めることが、今の誠子にとつては選ばなければならぬ唯一つの道であつた。しかし彼女は父に涙ながらに云ふのであつた。たとひ夫と處を距て相見る時が無くなつても、我夫であることに違ひはない、其の故に再び男に見えることはせぬと、尼の心になつて世を送る決心を示したのであつた。

二

大田垣の家を去るやうになつた望古は京都の幾年かの生活を閉ぢて大阪に出で、兄の但馬天民を頼つて其處に身を寄せることになつた。この不運な望古は、間もなく八月の末には、病を得て不歸の客となつたと云ふ。時に文化十二年であつた。

望古の死はいつか誠子の耳にも風の便に聞えたであらう。うち續く不幸の中に更に不憫の涙を絞つたに違ひはない。華頂山麓の生活は又もとの靜謐にかへつた。六十に近い父と若い未亡人の二人の生活は、しみ入るやうに淋しいものであつた。老先短かい父を見まもりながら破鏡について死別の悲しみを心に秘めた誠子は、唯ひたすらに父光古への孝養に心を摧くのであつた。

亂行の夫であつたけれども、其處には何かの頼りがあつた。子に先立たれ夫に別れてみれば、淋々と淋さがこみ上げて来る。取返しつかぬことゝは云ひながら愚痴の一つも洩したくなる。夫婦生活の七年間は並大抵の苦勞ではなかつたが、其處に又た何かの望みもあつた。

かうして一人ぼつちになつて見ると、女の臍甲斐なささへ考へられて來るのであつた。せめて自分が男であつたら、かゝる苦みはせずと濟むであらうが、女なるが故に嘗めねばならんこの受苦の生活を悲しむのであつた。

次第に影が薄れてゆく父光古の悄然とした姿を見ると、前途は眞暗であつた。暗から暗につゞく遠白い不氣味な道がほの見える。今のまゝでは別に生活に困ることはないけれど、否寧ろ二人の口を糊するには有り餘つてもゐるが、しかし父の眼が閉ぢたら、其れが兵糧の盡きる時で、忽ち路頭に迷はねばならん味氣ない運命が來るであらう。薄氷を踏む怖れが誠子の總身に身毛をよだゝしめることも度々であつた。

父の死の不吉を考へるまでもない。日々に衰へてゆく健康が、何日かは父を病床に誘ふことになるかも知れない。いやそれよりも目下の急務は官仕への苦にあえぐ父を、何とかして慰め得る道を見つけることであつた。自分が二夫に見えぬ以上、自分に代つて家を繼ぐものを求めることであつた。自分の子として適當な若者を迎へることであつた。折角の譜代の家柄を斷絶せしめることは自分にも大いに責任がある。誠子は日々として其れを考へぬ時とはなかつた。

自分としても又一つの重荷がある。父なき後の生活について何かの計を立てねばならんことであつた。いや父の心を安めるためにも自活の方法を考へておくことが何よりの必要でもあつた。彼女の小さい胸には思餘る程な心配が重ねられてゆく。聰明で勝氣な彼女であればこそ、少しも取亂すことがないのであつた。

父の光古はこの間に何を考へてゐたらうか。因幡の片田舎から志を立て都へ飛出して來た若い時分の元氣はすっかり消えて、尾羽打枯した鳥のやうに望みのない日々を門跡へ仕へてゐるのであつた。生ける屍に鞭打つことによつてやうやく仕事の手前をつくらつてゐるに過ぎなかつた。氣の毒な誠子を見るにつけても老の眼に屢々涙が光るのであつた。けれどもこの老人の胸に蟠つて解けぬ一事は、この譜代のお役をいかゞすべきであるかと云ふことであつた。人に譲るには餘りに深い執心があつた。これはやはり何とかして大田垣の家に保存したかつた。と云つてあの雪より潔い貞節を固持する誠子に、今更再び夫を迎へることをすゝめる譯にもゆかなかつた。

兎や角と思迷うてゐる中にも時は容赦もなく過ぎてゆく。其年も暮れ、其次の年も暮れていつた。如何に思ひ悩んでも胸の蟠りは何日かな解ける日は来さうにもなかつた。光古は老の加はるに従つて物が急がれて来るのである。見る見る中に四とせが過ぎて文政二年を迎へることになつた。六十四歳の老人となつた光古は眞剣に事を決めねばならぬことを痛感するやうになつた。一日を急ぐことであることを思ふやうになつた。

三

打明け悪い氣まづさを怵へて、光古は誠子に折入つて頼んでみた。この父の唯今の切なる願ひは他でもない、そなたに再び養子を迎へてせめてこの家の譜代のお役をでも繼がせたい。折角こゝ迄仕上げて来たことが俺の死によつて崩れてゆくことは、今迄の俺の生涯の勞苦がみんな水泡となつてしまふことになる。それに、そなたの將來の見透が全くつかずにこの世を去ることは、到底俺の堪えるところではない。貞節を破ることを強ひるのは俺の本心ではないが、この際萬止むを得ぬではないか。この父への尊い犠牲を覺悟して呉れまいか

父の手はわな／＼と顫へてゐる。誠子の顔は蒼白となつた。老先短い父を慰めるために犠牲となることは何でも無い。寧ろこちらから願ふ處であつた。しかしこれは何と云ふ無残な提案であらう。何ものにも代へ難い貞節を微塵に打擡いて、果して其處に女性としての生きる道があらうか。即答に苦しんだ誠子は幾日かの裕餘を乞ふた。一室に引籠つて懊惱の數日が暮れていつた。弱きものよ汝は女である。やはり女は弱かつた。この焦眉に迫つた家の大事を無事に取持つて行くものは男子でなくてはならなかつた。いかに考へても、いかに藻掻いても誠子の力ではどうすることも出来なかつた。

自分の身を犠牲にすることによつて、自分に代つて男性にこの大事を引受けてもらふ事より他に方法はなかつた。其れは直ちに彼女が男性に生れ替つたことでもあり、彼女の責任を果す道でもあつた。餘りにも大きい供犠ではあるけれども今の場合、其れも仕方がないと彼女は父の申入れを承諾せずには措けなかつた。父はやうやく愁眉を開くことが出来たが、誠子に對する彼れの愛が深ければ深い程、彼女の苦衷には云ひ知れぬ同情を感じるのであつた。二十九歳の姥櫻とは云へ、誠子の容色は決して衰へてはゐなかつた。さだ過ぎた女の美は、

又其處に云ひ知れぬ匂ひがあつた。先夫との離別以來、この麗人を惜しむ幾多の人々は、其の再婚を慫慂するのであつた。彼女の美貌に迷う幾人かの痴人もあつたらう。そこから界限の評判を耳にせぬでもなかつた。しかし其の形姿の美を惜しむものはあつても、其の心の潔さを惜しむものはなかつた。

誠子の先夫望古に懲りた父光古は、養子の選擇には慎重の上にも慎重を加へてやつと一人の好丈夫が見付け出された。近江彦根の家の中石川光定の三男重二郎であつた。これこそは誠子にはうつつつけの夫であつた。早速話が整ひ文政二年の春には大田垣の家を迎へられることになつた。死を思はせるやうな淋しい家にも、長い冬の重壓がやつと過ぎて、雲間を破つて春の陽光が射初めたやうに、五年の忍苦の憂鬱が解けて、笑ひが再び取戻されたのであつた。重二郎は得難い人物であつた。資性の優しさ、愛情の深さ、仕事に熱心なこと。孰れにしても先夫とは全く素質の異つた、この家には望んでもない幸運な養子であつた。名を古肥と改め父の光古と相並んで宮門跡に仕へることになつた。今度こそは心から安堵が許された。深く凹んだ父の皺けた顔にも希望の色があり／＼と讀めるやうになつた。誠子の胸には自分の大きな犠牲が却つてこの大きに好ましき結果を見せたことの歡びと安堵の、不思議な愉悅の感情がこみあげて來るのであつた。先夫に對して濟まないやうな、しかもそれをも壓しつゝぶして其の上溢れて來る喜びを、どうすることも出來ない、一種の揶揄をさへ覺える不思議な心を感じるのであつた。

四

幸福を取戻した誠子には其の年の末には其幸福を裏づけるやうに可愛い、女兒をさへ儲けたのであつた。大田垣の家に失なはれた春が甦へつて來たのである。いそ／＼とお役に出仕する夫の後姿を見送つて感謝と幸福の涙を人知れず滲ますものは一人誠子のみではなかつた。父の光古の枯木の如き姿にも春の日射しが暖かに射影を投げてゐるのであつた。其の翌年には安心した父は家督を古肥に委ねて年來の希望であつた隠居が差許された。萬事が都合よく運んで過去の曲折悲喜の多難な生涯を一場の夢として、濫かい樂隱居の餘生を樂しむことが出來るやうになつた。

東山ひがしやまに春が訪れると、冷たい常緑樹とこわかきの間を連ねて紫に煙つてゐた櫻が一時に綻びて来る。花の霞が薄い紅に映える頃には、樹間このま々々の堂塔伽藍がらんが殊に浮立つて、静ま、かへつてゐた寺々には一度に春の行事が繰展くりひろげられる。絡繹ろくごとしてつゞく團參だんさんの群に、都の士女の行きかひ、花に照返へる暖かい春の日影。祇園清水八坂ぎんきよみづやの賑ひを、父をいたわりながら一家揃ふて花の蔭に杖をひく楽しい時もこの一家に恵まれてゐた。

花の上をかすめて鳴る寺の鐘は、諸行無常しよぎやうむじやうの響ではなかつた。是生滅法ぜしやうめつぽうの悲しき運命を傳へるものでもなければ、まして生滅滅已寂滅しやうめつめつじやくめつ爲樂の花なき世界を讚嘆するものでもない。峰の樹間このまを洩れては霞に浮かび、花に滲み入る春の交響樂であり萬春樂ばんすんらくであり、春鶯囀しゆんわうてんであつた。大田垣一家の春は今が頂上でもあらうか。

花は散り人は去る。鐘の音もいつかは其の正當なる意味を讀むことを要求する。餘り強くない古肥ひさとしの體質は、几帳面な門跡勤かどめと、忽なほざりを忌む性格と相俟つて次第に疲れを見せるやうになつて來た。再婚四年の歲月が流れて文政も六年になつた春頃から、胸の病が漸く嵩じて、ぼつたりと床に就くやうになつた。不治の病の、死の床に呻吟しんげんする古肥ひさとしにはすでに覺悟はしてゐるものゝ、不吉の豫感にうなされながら、日々に瘠せゆく夫を看とる誠子には、覺め難い執着しよくちやくがあつた。

生別につぐに死別と云ふ悲惨な運命を、彼女は二人の夫に見なければならん薄命はくめいを思ふことさへ堪えがたきものがあつた。しかし與へらるゝものは素直に受けねばならなかつた。來るべきものはやがては來るに違ひはない。天命は避けがたい。古肥ひさとしに與へられた命運の盡きる時がやつて來た。誠子が受けなければならん死別の痛苦が、日々に迫つて來る。恰度其年の六月の末には、温厚篤實とんじゆつな再度の夫は、他界を急ぐことになつた。

其の前日苦しむ夫の枕頭ちんちゆうに侍して、惜氣もなく女性の命、丈たけなす黒髪くろかみをふつゝり斷切つた。有髮うはつの尼として、夫の永遠の侍者であることを誓つたのであつた。さむく、と降る五月雨さみだれの冷たさよ。かげろひゆく妖雲やううんの何日いっになればか晴れゆく空を見ん。三十三歳の彼女は、かくして世に叛かねばならん運命に曝らされた。

「みせうそこたうばり、しほりあけて見侍るにも、たゞ夢のこゝちし侍りて、立のぼるけぶりの末もかきくれてすゑもすゑ無心ちこそすれ。

ともに見しさくらはあともなつ山のなげきのもとにたつぞかなしき。

初七日のよ山中のさみだれといふだいをさぐりて、

かきくらしふるはなみだか無人をおくりし山の五月雨のころ。

うたよまんの心もなくてあかしくらし侍れば、こまやかにえきこえさせずなん、いさゝか心もしづまり侍らんをりに、はたきこえんかし。よろずなめしきはゆるさせ給へ。御香のしろとてしろがね一ひらおくりたうばり、とみに手向侍りぬ。あなかしこ(みきこ宛)

五

逝くものよりも残るものに、憂ひのいや深きは世の常である。逝きしものは救はるゝであらうけれど、其の面影に涙して暮す誠子には堪え難き憂鬱があつた。昨日まで我が太陽として仕へた夫が、唯一縷の煙として峰に棚曳き雲に入る。眼底に強く刻んだ面影は消える時はないけれども、物云はぬ其の姿が口惜しかつた。

立のぼるけぶりの末もかきくれてすゑもすゑ無心ちこそすれ。

夫の骸を焼く煙は次第に薄れてゆく。涙にかきくれた眼にちつと現實を覗めて見ると、光を失つた未来が暗の幕の中に消えてゐる。この世の望みはすべて断切られてゐるではないか。有りし日の幸福が今更のやうに胸に浮んでくる。

ともに見しさくらはあともなつ山のなげきのもとにたつぞかなしき。

共に見た櫻はとつくに散つてしまつた。惱しい夏の若葉の下に一人淋しく若き日の日暮れを悲しみ、過ぎし幸を嘆くことの憂ひをつく／＼と悲しむ自分は、何と云ふ不幸な女か。

かきくらしふるはなみだか無人をおくりし山の五月雨のころ。

又して五月雨がはら／＼と頬を打つ。世を早うした夫の血に泣く涙か。妻を思ひ子を慈しむ魂が雲に棚曳く煙となつた。雲か煙か、煙か雲か、其雲に滲む涙が誠子に降りそゞぐのであつた。鬱陶しい低い雲の亂れは夫の我れを悲しむ心の亂れであつた。この憂鬱はい 果てるとも考へられない。恐らく彼女の終生を覆ふに違ひない。大田垣の家はも早や蝕まれた木の葉に均しい。地に落ちた病葉である。唯だ朽ち果てることのみが其の運命であつた。

かくて強く打ちのめされ、打擧がれたものが生きて行くべき道は、この人の世の望みとし

ては求められないものであつた。塵の世を棄て、彼岸の世界に光を求めることが唯一つの道として與へられてゐる。父の光古と子の誠子と、いたいけな孫とは當然この寂しき道を歩まねばならんことになつた。それにつけても大田垣の家をこのまゝ棄てることは忍びえられぬものがあり、其のためには故古肥の縁にしたがつてやはり彦根の家中風見平馬の義弟を誠子の子として迎へ、毛利舎人の娘を其れに娶すことによつて、兎に角家の籍ひをつけることにして、父と誠子は葬後間もなく知恩院に剃髪の式を擧げ出家の素懷を充たすことが出来た。父は西心、誠子は蓮月。

尼になりたる秋、色ふかきもみぢを見て

いろも香もおもひ捨たる墨染の袖だにそむるけふのもみぢば。

家のことも心配なく運んで伴左衛門古敦が其の妻と家督を繼ぎ譜代が許された。今は何をか思はん。今道心の西心と蓮月は、其の子をも具して、知恩院山内の眞葛庵に落付くことになつた。頭を丸めた父の變つた墨染の姿に、頭こそ丸めなかつたが切下げの蓮月尼の新尼振り。二人して六時を勤める木魚の音が、庵の柴の折戸を越えて眞葛原に響き互るのであつた。

秋も深くなつて庭の紅葉は、夕暎のやうに映えてゐる。

いろも香もおもひ捨たる墨染の袖だにそむるけふのもみぢば。

墨染の新しい袖には其の紅葉の色が映つてゐる。此の世の色も香も彼女には何の因縁もないものであつた。世を叛くが故に身につけた墨染の飾なき衣である。紅葉の紅の色が心なく今我袖を照らしてゐる。けれども其れは浮世の色ではなかつた。我が盡す佛への誠が墨染の袖にも滲み出てゐるのである。心は秋の空と澄みこの世の絆しは無心に浮ぶ白雲よりも淡い。眞葛原に木枯が吹いて、散行く木の葉を見ては、世の思ひの次第に去りゆくを悦ぶ身となつたことを心から感謝するのであつた。



苦惱を越ゆる者

知恩院の中に衣食してゐながら、時を違へず鳴響く其の鐘の音を外に聞いてゐた時代は過ぎ去つた。山本から静かに落ちる吉水のかすかなせゝらぎにさへ耳を聳立てねばならん時が来たのであつた。西心と蓮月尼の菴住生活はいとも静かに送られてゆくのであつた。今迄耳元に喧ましかつた堂僧の勤行が淡々として耳を掠めてゐたのみであつたものが、自ら一人の出家となつて朝夕の勤行看經にいそしむ身となつて見れば、西心の胸にも泌々と法の有難さが會得せられるのであつた。木魚の音一つ一つにさへ不思議な意味が讀まれるやうにさへなつた。

時に不用意に口を洩れて來る念佛に、自ら驚くことさへあるやうになつた。祖師の法語や經文の字句をひいての法談に思はず夜を更かすことも度々となつた。小さいなりにつゝまじやかな三人の生活は、飢えることもなく凍えることもなしに、幸福な日々と云ふより寧ろ富貴に均しいものがあつたと云つてゐる。

蓮月尼は今亡き夫の忘形見を側にして、今迄にない心の餘裕を感じるやうになつた。人の世の生活を生活してゆくことの苦痛は、この眞葛庵の生活にはなくなつた。居ながらにして與へらるゝまゝに衣食すればいゝ。美食を嗜む野心も何處かへ去つてしまつた。身分相應な構へを維持せねばと云ふ心配もなくなつた。人目を恥ぢなければならぬ衣服の桎梏も野望もみんなすべてが消えていつた。其等がすべて心の悩みであり、心の全部を占めてゐたのであつた。其等が無くなつて見れば心は淡々として形なく悠々として餘りあるに驚かされる。望みは彼岸にあつた。佛前にゆらぐ法燈によつて淨められ、立昇る香煙によつて薰ぜられてゆく。捧げられた淨華によつて理想を贖め、木魚と鐘に心情を澄してゆく。端嚴なる佛の姿が其の奥に慈眼を垂れてゐる。一切を統攝するやうに、今呼ぶ佛の御名は、今開かれてゆく新たなる世界の親に捧げまつる禮讚であり佛子の誠を傳へる名告であつた。

庭の片隅の一草も、山のさ中に立つ一木も、鳥も獸も雲も風も、すべてが佛國の莊嚴なら

ぬものはない。世の人々の眼に映する此等のものはすべてが財として眺められる。たとひ花鳥風月の美を謳ふとしても、肉を悦ばしむるに過ぎないではないか。身は富むことがあつても、心の富は更に虚しい。心の淨きものは心の富めるものである。世の塵埃を拭ひつくした蓮月尼には今迄夢想だもせなかつた心の富をつくづく味ふことが出来るのであつた。

眞葛庵の生活も靜かに二年が暮れていつた。父の西心は七十も過ぎた。其の文政八年には思ひがけなくも七歳まで數へた尼の愛子が病歿すると云ふ悲惨が運つて來た。淋しいながらも、この菴住生活の賑ひであつた實子の死は西心はもとより蓮月尼の心を強く打つたに違ひはない。佛の袖にすがりこそすれ悟澄したわけでない彼女に、母として先立ち行く我子の死が泣かれない筈はなかつた。

衣手にみだれてかゝる朝寝がみかきなでし子の花のしら露

夜毎に添寝をしたこの子であつた。寝亂れ髪がいかにか可愛ゆくこの母によつて搔撫でられたか。乳呑子を失へば乳の淋しさに泣かれるのが母である。添寝ながらに朝毎に撫でたふさ／＼とした我子の髪が、母としての蓮月尼の手に如何に心地よい愛の感觸を與へたことか。

撫でた手の淋しさに故なく泣かれる今の悲しき自分を、彼女はしみ／＼と涙ながらに贖めねばならなかつた。「つねならぬよをうきものとみつぐりのひとり残りてものをこそおもへ」嘗て夫の死を悲しんで詠んだこの歌が想出されるのであつた。其の時には三栗の二つは残つてゐたのに、この歌が懺をなしたか、あんなに迄固く抱き合つて居たものが、やはり唯一人残されてしまつた。残んの栗がいつかは又た無くなるであらう。犇々と身に抓まざるものは世の無常であることであつた。唯一つ残された栗の物思ひに泣くより他はなかつた。

二

唯一つ残された世の絆の子も死んでいつた。浮世の空にかゝつた僅かな雲翳も拭はれつくした。道心に眼を開いた蓮月尼は、涙は子の菩提ではないこともよくしつてゐた。遙かに待つ父のもとに歸へつていつた子の幸福のために、直に佛の愛を心に銘づるのであつた。佛に物を捧げることは夫と子に捧げることもあつた。佛の御名を呼ぶことは夫と子を呼ぶことではなくてはならぬ。死は遠くものを距てやうとも佛は近く物を距てぬ。法の國の不思議な因

縁をつく／＼歡ぶことが今の蓮月尼のせめてもの幸福であつた。

吉水のながれの末のひろごりて四方にみちたる法のたふとさ

吉水の法然房源空上人の浄土宗の教へが、其の念佛往生の旗幟をふりかざした時代は五百年の昔となつた。けれども吉水の流れは次第に展げられて念佛禮讃の聲は都鄙に充ち満ちてゐる。上人の金の御聲は聞く由もないけれど、耳近い吉水の流れを聞く時、近く華頂山内に眠る上人の生きた御聲が響くのであつた。

吉水のかねひゞくなりいざ我もかすみこけのきぬくらべせん。

上人の本廟知恩院の鐘は、上人への道の開眼をすゝめるやうに、春の空に霞をわけて鳴響いてゐる。鐘の音はどこ迄も冴えてはゐるが、やがて霞に消えてゆく。霞も法の心に匂ふ。我れも亦た我が道心を霞に較べて法の歡びに浸りたい。こゝまで尼の心は澄んで來た。

父と二人の眞葛庵の生活は、初めてこゝに庵住してからをも加へると、も早や十年の日も立去つた。父の西心は七十八歳を數へるやうになつた。蓮月尼も四十二歳にもなつた天保三年。尼の心づくしの孝養に充分なる満足的笑を湛えて西心入道は浄土往生の本懐を遂げた。

八月十五日であつた。一人去り二人去り往々來々幾十年。人の世は唯假の世に過ぎなかつた。來るを悦び去るを悲しむ。其の悲喜の往來が結局人世であつた。唯一人の父も去つていつた。孤獨と云へばほんの孤獨となつた。

縁あつてこの家に子となり、この父によつて養はれて四十二年。家を繼ぐものはあつても魂を魂に結ぶものはこの父より他には無かつた。今にして夫に別るるより子に離るゝよりも辛い痛苦をこの父に感ずるのであつた。呼べど應へぬ骸に取纏つてよゝと泣く蓮月尼は、若き日の娘の誠子であつた。終生の恨事として父との死別を惜しみながら、いませが如く怒るに此れを葬り、華頂山腹の鬱林の中に骸を埋めた。

雨の日も風の日も彼女の心は墓畔にあつた。峻しい山を攀ちて日々かゝさず墓碑に額づくのであつた。しかしかくまでしても彼女の心は満足ではなかつた。墓畔に庵して墓側に奉じたい一念が、彼女の唯今の願ひであつたけれども、其れは餘りに無謀なことであつた。一人の女性が、尼とは云へ、かゝる山中の生活は身の危険を伴ふも計り難い。人々の諫めによつて其れは斷念することになつた。

父の死によつて眞葛庵まがくわの生活をつゞけることには遠慮があつた。十年の思出を辿つて父を懐なつかしみ子を慕したひたい心は、この庵に深い執心を投げかけるが、去り難きを去るは出家の本分とする處、

たらちねのおやのこひしきあまりには、はかにねをのみなきくらしつゝ、

華頂山腹の父の墓所にも心引かるゝけれども、一切を覺あきらめて程遠からぬ岡崎の里に家を求めて靜居せいきよするやうになつた。

岡崎の里の閑居かんきよ以來其の死に至るまでの約四十年間は、蓮月尼が蓮月尼としての最も意義ある生活であつた。尼の面目が一人の出家として、優すまれたる歌人うたびととして、又一人の國士こくしとして自由に發揮せられた惠まれたる半生であることを追憶せねはならぬ。父に別れる迄の彼女は一人の優やさしき家庭的女性に過ぎなかつた。然るに一朝父を喪つて後の彼女は、も早や世に有りふれた女性ではなくなつた。不羈ふきどくわう獨往どくわう一切の係累けいろいが除かれた彼女には、唯其の天分に從つて舉措きよそすればよかつた。心のまゝの自由が天真てんしん獨朗どくらうの彼女をいやが上にも立派そだてあに育上げてゆくのであつた。

もとより操守堅固さうしゆけんこな蓮月尼である。出家して姿を代へても残る容姿の匂には、引付けられる男性が多かつたが、それを悲んで眞珠の美しき齒を引抜いたと云ふ彼女である。然るに四十も越した今日も早や其の心配も大かた解消していつた。獨住ひとりすまひの安氣あんきな生活に、求むるものは何も無かつたけれど、庵いばりを去れば其日より求めねばならぬものは生活の資料しりょうりやうであつた。身に覺えた藝が先づ身を助けねばならぬのであるが、果して多能の何れを選ぶべきであつたか。父を慰めるために自然と覺えた圍碁ゐごの嗜たしなみがあつた。しかし男對手おにての仕事は面白くもない。と云つて今更武藝の師匠でもなかつた。和歌の嗜みがある。歌を教へることも妙ではあつたが其れも名聞めいもんに走りやすい嫌きらいがある。唯一人の自由な生活を樂しむためにはすべて望みがなかつた。

「なく／＼かぐら岡ざきにうつりぬ。もとよりまづしきみにてせんかたなく、つちもちてきびしよといふものをつくる、いとてづゝにてかたちふつゝかなり。ゑりたる歌も、たゞ

すきにて……」

作陶の趣味に生きると云ふことは彼女にとつて何よりの好ましい生活様式であつた。彼女の器用と聰明と、其れに次第に冴えてゆく風雅な心と、其のものを一にして一塊の陶土に向ふことは、確かに彼女の志向に相應いものであつた。又其れによつて乏しいながら彼女の口に糊し得るならば更に妙でなければならなかつた。彼女はいゝものを見つけた。彼女の終生をつくして飽くことを知らぬ生活のいゝ伴侶として、満足するまで其の創造の天分を樂しむことが出来る。

神樂岡の土をとつて、信樂焼に模した蓮月焼が、尼の歌の爪鑢の意氣な意匠によつて、都鄙に喧傳せられるやうになつてゆくのも無理からんことであつた。多くの模造品が作られるやうになつたことは、如何に其の作の雅趣が時好に投じたかゞ偲ばれる。けれども尼は其事については少しも意に介してゐなかつた。人氣に乗すると云ふやうな名聞根性は凡そ彼女とは縁の遠いものであり、其の盛名は彼女の心の藝術の移り香によつて得られたもので、彼女の作爲ではなかつた。尼は唯其れによつて乏しいながら得られるそこばくの錢によつて、露命をつなげばいゝのであつた。

次第に冴えゆく蓮月尼の和歌は、かゝる生活環境によつて奔放に暢達に其の歌意を示すことが出来た。身を雲水の安きに置き、心を風雲の優しきにかけて、旅心安住の境界に浸ることが彼女の宗教であり藝術であり得た。つくろはぬ心をおし展いて一切を其の心に映し、あるがまゝなる其の影像を彼女の人格を通して再現する。其處に蓮月尼の歌の特有なる味ひが示めされてゆく。京都の歌人で幕末の志士小澤蘆庵の歌が彼女の歌の指南であつたと云ふことは云ふ迄もないが、蘆庵の生涯が彼女の生活に均しきものがあり、其の心性に於ても通ずるものが深かつたが故に、自然と彼女の私淑する處となつたのであらう。

閑雲野鶴を友とする生活に於て、自然に放心する心が直に感ずる感情の綾を盛るためには殊に女性としては和歌が相應しいものであつた。尼は家を外に常に出がちであつた。ふつと氣が向けば其の儘幾日もの旅をつゞけて居たと云ふ。衣食の糧がありさへすれば、旅の代が出来さへすれば、彼女は其の唯一の伴侶である自然に浸ることを仕事とするやうになつた。かうも執拗に向けられた自然への心が、尼の歌として其の美しき藝術を露呈せしめたと云ふ

ことが出来やう。埴を練ることゝ、歌心に浸ることが彼女の生活の全體であつたと云ふことも出来るであらう。勿論國士として出家としての尊き一面は忘るゝわけにはいかないけれども、其れもやはりこの純なる心の他の方面への派生と見て差支へはないであらう。

四

岡崎には随分久しく住まつてゐたやうであるが、其の中にも大佛のあたりに居を移して屢々止住したこともあり、北白川の心性寺に居を求めたこともあつた。或は自分の家を繼ぐ大田垣古敦の監理する眞葛庵の舊居に古を偲び、生家に近き錦織の里にも住んでゐた。七十六歳にして西賀茂に隠棲し十年の晚日月を終るまでは、洛中洛外心の趣くまゝに轉々とし居所を定めなかつた。轉居が一つの趣味かと人の口の端に上るまで頻々と居所を移してやまなかつた。恐らく蓮月尼の名が世に聞えることによつて、人の訪問の繁くなることを恐れての轉住であり、心の自由を束縛せらるゝことを厭うての輜晦であつたらうことは想像に難くない。何れにせよ西行の心に生き芭蕉の魂に通ずる彼女は、やはり自然の子であつた。人として

の苦惱を浴びて、其の苦惱を覆ふのではない。苦惱に徹する處に自然に展げて來るのが廣いこの坦々たる自然の道なのであつた。小さき人と人との交渉に疲れ果て萎へ死んで行くのが人の世の淺間しさであつた。人の世の淺間しさに徹すれば其處に自ら自然の扉が開かれてゆく。人と自然の交渉の世界である、名聞欲しからず利養戀しからず、樹木と語り鳥と歌ひ風雲を枕とし山野を褥とする自由が其處に待つて居る。心ゆくまで、四時の露に濡るゝ生活がある。蓮月尼は前半生の人の世を去つて後半生の自然に生くるものであつた。

四時の露に濡るる 一春一 (一)

一

心のまゝに處を定めず移りゆく尼の庵住生活は、洵に行雲流水の不住の生活であつた。この心安い生活のうちに彼女の心をいとも強く捉へたものは四時の風物であつた。移り行かない不動の心をもつて、移りゆく自然を眺めることは、何事にも換へがたい楽しみであつた。移氣な人の世の心を棄て、永劫の自然を心とし、移りゆくけれども老ひることを知らぬ四時の交替を贖める時、この一人の騷人はいかに若々しくいかに盡きぬ永遠の慰みに浸つたことであらうか。

冷々と身に泌みる木枯の憂鬱な冬が去つて、ほのぼのと明けゆく新春の空を眺めた時。

いひしらぬけさのころよきのふまでくれゆくとしを何をしみけん。

尼はしみくくと暮れゆく年を惜しんだ心を顧みて後悔するるのであつた。身も心も洗淨めら

れたこの好き日を、何故に拒んでゐたのであらうか。見渡すかぎり清々しきこの世、創世記の初めての日やうに初なこの日を愛せずにはゐられなかつた。

棚曳く雲さへ靜かに凜々しい太陽の初姿に匂ふやうに明けゆく東の空、まだ小暗いのに宮を立出でた懸想文賣のあでやかな春の衣裳に初めて射す初日の光。

人みな春のころやさそふらんかざしの梅も匂ふ明ぼの。

何時の間にか咲いた梅のかざしの枝が、其の背に匂ふてゐる。待ちわびた春の便は先づ其の梅の匂ひより綻びるであらう。

けれども、まだ春は早い。この山近き庵には冷たい氷が猶ほ冬を惜しんで居る。

たに川のはるの水やうぐひすの都いそぎの鏡なるらん。

鶯のさゝ啼きはすでに幾度か麓の林に春のいそぎを傳へてゐる。花の都への初上りを待兼ねる鶯に、この谷川の薄氷こそ其のお化粧の鏡にもしてみたい。

汲みなれた山の井の張詰めた分厚な氷も、冬の堅い鎖しを解きさうになつてゐる。釣瓶を

落せば其の一方はすでに解けてゐた。

あつ氷かたへうごきてやまの井のみづにも春はくみしられけり。

汲上げられた水はやはり冷めたかつた。けれども其處には微かながらも春の温みを感じられるのであつた。

谷川の流れも少しづゝ音が高くなつてゆく。山の麓の雪も解けてゆくのであらうか。見れば流れる氷もある。氷の流れを惜しむかのやうに冷たい鶯の伴奏が聞えて来る。

ながれくる氷にそひて鶯のこゑもなぐるゝ谷のした水。

川沿の柳はまだ芽をふいてもゐない。冬のまゝの淋しい糸を垂れてゐる。冷たい夜空を見上げると氷のやうに冴えた物凄い片割月が其の枝にかゝつてゐる。

川ぞひの柳のいとかゝりけり、残る氷のかたわれの月。

冷たい夜空には冬は未だ多分に残つてゐるけれど、晝の日射しには確かに春の匂ひがあるかき暗した空からは、時々雪が見舞うて来る。離を惜しむ冬の涙が凍つてゐるのであらう。淡い雪である。

ふる雪もあはにむすべるいそ柳かつみるまゝにとけわたりつゝ。

繪のやうにふくよかに、浮雲のやうに軽く、へんぽんと散つて来る。やせ肩の柳の枝垂れにかゝるともなく泡のやうに消えてゆく。どこかに啼く鶯の聲。聲の響をこの淡雪につゝみたい。

鶯のこゑの匂のちるかとしてつゝめば袖にきゆるあはゆき。

つゝむともつゝめぬ悲しさを、尻目にしては消えてゆく淡雪。春だ、春の吐息がかすかに聞える。

野邊に降りつんだ雪はかのこまだらに消えていつた。野原にももう春は來てゐるのだ。

いく日ありて若菜つまんのあらましも心にしるき野のけしき哉。

尼の心にはぢつとしてゐられない焦燥が、心のどこかに頭を擡げかけて來る初春の野のたゝすまゐを見れば、すぐ頭をかすめるものは若菜の香と其の清新な姿であつた。晝、夜も暇さへあれば若菜摘みの娛しいプランを心に描くのであつた。籠を携へて行く野の行樂が待遠しかつた。

いつの間にわき葉さすまで成りにけん昨日の野への雪のした草。

いつの間に、ほんとにいつのまに若草がこんな二葉さすまで大きくなつたのか。春の雪がもつほの温くき愛が風にも當てず、このいたいけなものを育て、いつたのでもあらうか。

千ぐささく秋はあれども一くさの二葉見つけし春のうれしさ。

秋の野の干草の花の咲亂れた風情もいゝ。けれども其れよりも嬉しいものは、雪消の野べに嬰兒の眼にも均しい若草の二葉である。そして其處に眼醒めゆく春がたまらなくいゝ。彼女の貧しい生活もかくして有り餘る富を謳歌する。

ことたらぬ住家ながらも七くさの數はあまれる春の色かな。

身を容るに足るだけのこの庵にも、春くれば豊であつた。野への七草が籠に充ち溢れて、其處に漲る春の富を撞にすることが、出来るのであつた。

うなひらが垣ねにちかくつめばこそ草のめでたき春もしらるれ。

垣根近い若菜を子供等が摘んでは運んで呉れる。居ながらにして其の春を味ふことの幸福は尼の春の生活の豪華版であつた。

若菜にはうれしきことをきくもよしうきこときかて耳なしもよし。

籠を埋めた若菜を探れば、春菊も出て来る。耳なし草も出て来る。嫁菜も出やう。芹も出やう。なづな、ごけふ、はこべ、ほとけのざ。數へては揃へ、揃へては煮る。春の香が室に溢れる。

二

春の女神の出でましを誘ふやうに、春の象徴の霞が立ちそめる。

野づかさの松よりはるのたちこめてやがて軒ばにかすみたなびく。

何時とは知らず野への一本松が霞みそめて来た。春が立つたのだ。とみると早やこの庵の軒にもかすかなものが羅網のやうにかゝつてゐる。霞だ。

立日よりのどかに成りて世の中のをさへへだつる春霞かな。

際立つたものがぼやけて来る。剃刀のやうに餘裕のない切立つた世の生活が、ぼやけて来る。猫は鯉節を忘れ、借金取は居眠をする。世を忘れ人を忘れるためには、長閑な霞が、いか

に春に相應あはしいか。世のうさはこの尊い幕の彼方に消えてゆく。

消えてゆく世のうちに引かへて、冴えてゆくものは春の歌姫、鶯の聲である。森の隠家かくれがに或は林の木むれの中に、春のステージを控えて忙しい練習がはじめられる。

だみたれどいまめかしくぞ聞ゆなるひな鶯のはるの初聲。

夜の明けきらぬ冷たい大氣にだみたバスの聲が流れて来る。ひな鶯の恥しい練習だ。けれど其の音にさへすでに春の響が傳はつてゐる。

森の何日かの練習が積まれて歌姫達は一人のソプラノの歌手として巢立つてゆく。林を渡り野づらを越えて都のステージを急ぐのであつた。

おりたちて朝菜あらへば加茂川のきしのやなぎに鶯のなく。

朝まだき白く流れる美しい加茂川の汀みぎはに清々すかしい朝菜を洗ふ時にさへ、思ひがけずも岸の柳にはこの歌手うたひてが朗々と春を謳ふやうになつた。

青柳の下ゆく水にかけみえて聲もながるゝ春のうぐひす。

緑に芽ぐむ柳の下ゆく清い流れ。其の流れに影を落して、グリーンの歌手の姿は頻りに歌

を流してゆく。姿は流れぬけれど瑞々みづしい頌春しょうしゅんの譜は一つ又一つ落ちては流れてゆくのであつた。

一鎖ひとくさりの歌がすむと。この歌手は次のステージに移つてゆく。ジブシーの女のやうに、トロバドールの歌僧のやうに。

鶯の聲まつほどの手ずさびに、柳の糸をいくむすびせん。

次の歌手を待つ間ほもどかしい。手持無沙汰にぼつねんと立つてゐる間に、何かを契ちぎるやうに柳の青いモールを幾結びしたことであらうか。それでも春が深くなるにつれてこの歌手は舞臺を選ばず歌つて呉れる。錦にしきをつらねたやうな花の中からも。

こきませし春の錦のもなかよりにほひいでたる鶯の聲。

花の聲かと紛まふばかりに歌ふこともある。ともすれば又。

かくれ家に春つげがてら鶯のそらごとすなり人もこなくに。

春を忘るなと春告鳥はるつげどりの名に叛そむかず、この淋しい庵いばりを訪ひながら、人は來ぬに人來ひとくと欺くこともある。けれど、

あづさ弓春の日かげもさす竹の世はのどけしとうたふうぐひす。

この歌姫の聲聞くとときは、春の日の長閑けさにあやかる人の世の迫らぬ風情をしみぐと味ふことが出来る。日は長い暮れて暮れはてぬ夕闇にまだ鶯が啼いてゐる。

ゆふ霞きえのこりても聞ゆなりやなぎになれし野べのうぐひす。

山の古巢への歸へりを忘れて、馴れた柳に野を怖れない。春はいづくまでも行互つたのだ。山も野も原も同じく春である。春のニンは野に一夜の宿をかるに違ひない。

鶯がもし美男であるならば梅は其の花妻でなくてはならぬ。鶯が春を謳ふものであるならば、梅は春を開くものでなくてはならぬ。この歌手とこの春の舞姫。二つ相俟て春は完しと云ふことが出来るであらう。

鶯を待つ心はやはり梅を待つ心であつた。だみ聲のまだ山なりの鶯を聞く頃は梅も蕾が堅かつた。それに鶯の聲が澄むにつれて梅の蕾もふくよかにこの歌姫を待つかのやうに膨れてゆく。

玉だれのをすのあさ風かをるなりさけるやいづこ梅の初花。

小簾の朝風のひやりとするに、其風には異なる匂ひが微かに匂ふのであつた。まさかと思ひながら、とみれば垣の梅の一本がすでに其の蕾を割つてゐるのであつた。

かげうつる水もぬるみて山の井のあさくはあらぬ梅が香ぞする。

山井の水も次第にぬるんで来る。冬木立の林には春は遅いけれど、梅の初花はぞんぶんに其の香を漂はしてゐる。

となりにはうめ咲にけりこにこめし我鶯をはなちやらばや。

隣の梅も咲いた。籠の鶯も放ちやる時が来た。冬籠りの長い桎梏を離れて、彼女は梅の移香を浴びて彼女の世界に春を謳歌するであらう。山の鶯も早や旅立つであらうか。梅より梅への驛路をたづねて春の長閑な歌の旅に。

たち雙ぶまつにつげばや鶯のやどにとうゑし梅咲にけり。

鶯の宿にと植ゑた梅も咲いたに、あの松に其の言傳を頼みやらうか。こぞうゑし梅咲たりとなにがしの鳥住山にたよりしてしが。

松の言傳が頼りなければ、梅もさいたにと鶯の籠る山路に他の便りもしたいのだが。

うぐひすの都にいでん中やどにかさばやと思ふ梅咲にけり。

便せずともやがては都を指して鶯が來るであらう。この庵こそは、其中宿に相應しい。梅咲いて宿は匂ふに。

鶯のつまやこもるとゆかしきは梅咲かこむ庵の八重がき。

貧しい家にも垣根は梅に埋れさうである。鶯の花妻が其の美男を待つかとゆかしさを感じずにはゐられないけれども、待つ鶯はやがて遅れずに花風に乗つてやつて來る。

うぐひすもさきかくまれて梅園のいづこもおなじ花に聲ある。

梅園には花と花との競ひが、其の頂上に近い。花と云ふ花、枝と云ふ枝には鶯の轉ぶる聲が、音を競ふてゐる。匂ひと音の交響樂が今や其の豪華な繪圖を展げてゐる。

梅咲く頃の庵は尼の生活に訪るゝ春の初めの悦びの時であつた。まだ小暗い空に白く残つ

た有明の月に名残惜しむにや月をつゝむばかりに梅が咲匂ふてゐる時もある。朝日させば朝日さすとして、

あさひかけさすや軒ばのこすゑより匂ひこぼるゝ梅のくれなる。

紅梅が軒ば近くに其の贅澤な匂ひを振舞ふ時もある。夜は夜として、

墨染の袖にも梅のかをりきて心げさうのすゝむよはかな。

墨染の袖にも梅が香り來て、物戀しさを思ひ捨てた心にも、恠しく戀が眠醒さうな時もある。つた。

三

静かな春風が霞の裾を別けて來る。柳の枝を颯るやうに。

いと柳みだれぬほどにすさぶなり枝をならさぬ御代のはるかぜ。

娘の足どりのやうに靜かに軟かに、梅が香を散らすこともなく、柳の枝垂をゆすぶりもせず、穏やかな足どりで。大地をわたりゆく春風。

芽をふいたばかりの柳は、梅と鶯について春を傳へ春を育む

山ざとのやなぎのめにも見ゆるまでほのめきわたる春の色かな。

長い細い枝に小鳥の脚の爪にもしてみたい嫩芽。浅い青磁の瓔珞に花の色よりも心地よい春の雰圍氣を漂はす。

青柳のいとこそ永くなりにつれ野邊のかすみにたなびかれつゝ。

處女の緑なす髪にもたとへたい其の枝に、霞がけぶる。

一むらの煙と見しはふる郷の昔のやどのやなぎなりけり。

柳は其自身、華奢な細い存在である。遠く煙ると云ふよりも其自身が一つの煙である。

霞の如く煙の如く故郷の宿を漂はした柳に其の如く模湖たる過去が思出さるゝ。

あづさ弓はるかながらもむかしよりめなれしかどの柳なりけり。

冬の間はあるかなきかの柳も春と共に甦つて来る。故郷の昔懐しい其の記念の柳も、やはり昔忘れず煙るやうな姿を現はして来た。あの門の柳が。

柳が芽ぐむ。梅の香が漂ふて来る。そして夜には天上の花にたとへたい月が、又春の夜の興を添えることを忘れない。春早い夜の月にもすでに春の匂ひはある。

このもとの花のみゆきを枕にてはるのよさむき月を見るかな。

木のもとには消えやらぬ雪が散りしいた落花のやうに自ら浮出てゐる。其の雪を枕に眺むれば冷たい春の夜の月が早春を囁いてゐる。

きえ残る雪の玉水音づれて花なきさとの春のよの月。

花はまだ咲かない。屋根の雪解けの雨垂が淋しく落ちてゐる。それに月にはすでに春の色がほの見えてゐる。

とけわたる氷にそひてはるのよの月もなぐるゝ井堤の玉川。

山吹は其の姿さへ止めぬ井出の玉川には、解けゆく氷に水かさ増した川水に、月も流れてゐる。其の流れゆく月にもやはり春がほの見える。やがてこの月も霞みゆくであらう。

ぬえ塚の榎のこすゑほの見えて栗田の山にかすむよの月。

見馴れた栗田山に月が出た。ぬえ塚の凄く微かに見えて、あゝもう月が霞んで居る。在明のかすみに匂ふ朝もよし如月ごろの夕月もよし。

霞む月はいゝ。有明の霞む朝の月も、二月頃の霞む夕月もいゝ。美しき佐保姫の背光よそ

れはあまりに朧ろにあまりにまぼろし幻まぼろしに近いではないか。

月を霞め山を霞むる霞は其れに均しい春の雨を誘うて来る。

ふかかりしかすみや雨となら柴のぬれておとせぬ山したのいほ。

麓いほの庵いほにも霞がかかる。深い霞が春雨はるさめとなつて行くのか、なら柴はぬれ色に光つてゐるのに雨の音は少しもせぬ。

みどりそふ野邊の若草うちしめりふるとしもなきけさの春さめ。

朝の野へには眼醒めるやうに若草の色がましてゆく。若草はじつとりと潤しめつてゐるのに、やはり降るとしもなく降りゆく静かなる春雨。四邊はぼうつと霞んでゐる。眼に見えぬ水珠みづたまに春の匂ひがする。

おともせずふるとも見えぬ朝じめり枝おもげなる青柳のいと。

芽めぶいた柳の枝には小さな露が重たげに宿つてゐる。降るとも見えぬけさの春雨が、其の潤しめりを柳の枝垂しだれに雨と知らせずに宿したものであらうか。枝の春雨の露を眺める心地は

春の日の長閑のどかさを更に長閑にする。

○ つれづれと春のながめの手づさびにむすびてながす軒の糸水。

殊ことにつれ々々わぶるほど長閑なものは春雨の雨垂である。ポツリと落ちて忘れた頃に又ポツリ。春の眺めの手づさびに、雨の戯れが結びては落す雨垂であらう。仕様事しやうごとなしに静かに雨垂に聴入る心は、つれづれとさびしいものではあるが、又、

つれづれとさびしきものうれしきは花まつやどの春さめのころ

春雨はうれしいものである。櫻が咲かうと待受けるこの庵に、花を心に数へる静かな時を與へて呉れるけれども、深夜唯一人寢床に聴く春雨の音には、身に抓つまさるる故しらぬ淋しさも胸に響いて来る。

ふかき夜を思ひねざめの春雨はおとをきくにもぬるる袖哉。

寢覚ねざめの床に、故知らぬ涙が頬を傳ふて来る。春雨のひそかに泣く故でもない。雨が頬にかかるのでもない。間遠にきく雨垂の音のつれ々々が心をわびしめるのもあらう。

ふりし世もふりゆく末もとりどりにおもひあつむるよはの春雨。

過ぎし過去もこれからの行末も、折かけ胸に湧いて来る。とりとめのない浅い悲しみが
がつい涙を誘つて来る。弱き感情の戯れよ。

四

冬の間をこの國に屯した渡鳥雁がねが愈々其の故國をさして急ぐ時節も近づいた。夕やみの
空高く吹く嵐のやうに幾行かの雁の群が雲間を縫うて飛行く音が聞えてゐる。

いくつらか行方も見えす夕がすみねたくも雁の聲ばかりして。

音はして姿は見えぬ。夕霞が相にく其れを距てゝゐる。憎き霞よ。

梅が香にまくらもとらで更る夜のそらに鳴ゆく春の雁がね。

地上は梅の香に匂ふてゐるのに、春は今其の美しい眸を開いてゐるのに、この夜半に慌し
く立行く雁がねの心なしの立立ちや。恐らく懐して故郷への思ひに一杯であらうか。

待人のありとやそらにいそぐらん雪のこしぢにかへる雁がね。

待人の戀しさに其の歸へりを急ぐのであらう。冷たい雪の越路への旅。故郷故に雪も花と

匂ふであらうか。月のいゝ夜には去行く雁の姿がいかに鮮かに仰がれる。

○ さよなかの月のみふねをあとにおきてからるおしつれかへる雁がね。

月はいま上絃の船を大空に浮べてゐる、天上の女王の御座船のやうに。其の船を後にして
は次から〜と幾行かの雁の群が快走艇のやうに過去つてゆく。天上を背景とする素晴らしい
豪華な繪圖である。けれども其の音を聞く時にはそゞる涙が浮んで来る。

かへる雁なけばなみだぞこぼれけるまたこん秋のたのみがたさに。

去り行く雁は又こん秋に歸へることもあらう。けれどもたのみ難いは人の命である。會は
離るゝのはじめ、何となき悲しみが胸を塞いで来る。

かりのよを思ひつらねてながむればあまのはら〜ちるなみだ哉。

かりと云ふ名にあやかるかりの世の淋しさ、いろ〜と思ひ煩へば涙のみはら〜と膝に
落つ。味氣なき人の世の淋しさ、しかし淋しさのみが人生ではない。

うかれきて花野の露にねぶるなりこはたが夢のこてふなるらん。

蝶が花野を浮かれるやうにもなつた。現實に描いた幻の結晶のやうに、ある夜見た幸福の夢の吉兆のやうに、花野の花の露に眠る贅澤な胡蝶だ。春の精のやうに又浮かれ舞ふであらう。それに南國の候鳥燕さへ其の異形の姿を見せるやうになつた。

軒ちかくゆきてはかへるつばくらのうぶやいそぎぞいとまなげなる。

子を育てに渡つて來たかエキゾウチックな燕よ。埴で作る巢の營みが忙しさうだ。それさへ一つの異國情景である。

桃が咲くやうになつた。

このとにけふさく花は幾春の百よろこびの始なるらむ。

お雛祭の桃の明るさ。桃には明朗な生な美しさがある。娘のために其の長壽を祈ることは誠に相應し。

世の中のもよよろこびの春霞くみかはさばや花のさかづき。

季節のよさ、花のよさ、其の名のよさ、すべてが人の世の悦びに充ちてゐる。人の世の幸福をこの花に契る桃の盃こそ、永久に幸運の契機となれよ。

桃咲けば櫻は近い。櫻咲く頃の春の最中の悦び。人の世にかゝる豪華な悦びが又とあらうか。尼の心は櫻近い春の氣息の中にいつも固唾をのむ心地であつた。

花をまつ人のこゝろや雲となりて山のはごとくにたちまよふらん。

花を待つ心が凝つて白雲となり、春近き山々に低迷しやう。その雲の温かみに花も一日を急ぐであらう。

如月やいまか櫻のこのもとにいほりしをれば春雨ぞふる。

家で待つことの頼りなさは、花近き木蔭に身を置かではすまない。立寄る木の下に澎らんだ蕾は未だ開かぬけれど、其の先觸のぬるんだ春雨がはらくと頬をかすめる。

東山花まつころの朝ぼらけかすみにはほふ鐘のおとかな。

清水、八坂、祇園の櫻は紫にけぶつて花の霞のいそぎを見せてゐる。朝な朝な鐘の音も霞にけぶつて今一時の花を待ち顔に花やかに響いて來る。

明ぬるかほのがすみつゝ山のはの昨日のくもは花になりゆく。

春の夜は明け放れた。霞むかすかな霞の中に白くかゝつた昨日の雲は、今日は次第に去つて行くけれど、去り残つた雲かと思ゆるまでに、櫻が其れに代つてゆく。櫻が咲いた山にも野にも雲の棚曳くやうに、

いちじろく匂へるものを櫻花、くもか雪かとなにまがふべき。

雲でもない雪でもない。あの優しく淨い花を洩れて来る著しい香を嗅げば、櫻の生命が其處に匂ふて居るではないか。この香を慕ふて花に酔ふ春は悦ばしい。

あすも来てみるとおもへば家づとに手折をしき山ざくら花

山にあつて山に咲く花を味ふことの嬉しさ。又来て花に酔ふためにはこの花を家苞として手折ることを惜しみたい。手折ればこの美しきものゝ生命が花と共に散つてゆく。愛すればこそ折るに忍びないわが愛するものよ櫻よ。

わけきつる花のかをりにわれをひてこゝにねぶたくおもほゆる哉。

尼は花に酔ふのである。花に我れを忘れるのである。花と共に花の木の下の熟睡は尼の花を愛する心と花の二つが一つに融けてゆく。ねぶたく思ふ心こそ花が心に滲み入る時であつた。

やどかさぬ人のつらさを情にておぼる月よの花の下ぶし。

宿かさぬ人を怨まない。其の情のあつたが故にこそ、朧月夜のもと、花の下ぶしの、ゆくりなき一夜が明かされるのである。花に寝て知るつらかりし人の情である。

我が山下の庵にも櫻が咲いた。

いつもかく軒端に匂へ山ざくら雲のとざしとよそにみるまで。

雲の閉ざすと人の見るまで、我庵に花咲き盛ることの幸福をつくぐ思ふ。

うきふしの身のもとすゑも梓弓はるはさくらにうちわすれつゝ。

櫻さけば、身のうきふしも、こし方行末も、更に胸を痛めることはない。花をしみれば物思ひなしと云つた古人の心が今の心であつた。

蓮月尼は花咲く頃は忙しかつた。花をつける梅の花さく頃には都近き花を慕うて梅をたづねてゆく。

鶯も咲かくなれてうめだにの花に聲あるこゝちこそすれ。

梅だにに一よふしみのうつりがを少女さびすと人などがめそ。

と城南の梅谷に杖をひき、

うめづ川うきて流るゝ瀬をみれば末くむ里ぞうらやまれぬる。

と洛西ちよせの梅津あたりに旅立つこともあつた。けれど櫻がふりつむ雪のごとく、棚曳く白雲

のやうに洛中洛外に咲匂ふ時は旅の心は頻りに尼を苛むのであつた。

まさかりに匂へる山をわけいりてたぐひなきまで花をみし哉。

の満足を得るために、

山のはのこのもかのもにゐるくもの立のぼらぬやさくらなるらん。

のはじめから

ちらさじと霞をはるのとばりにてつゝむにあまる花盛哉。

〔の花盛に出會ふては一日の庵の安住さへ心もとないものであつた。

加茂かつら二つの川をさかひにて都をうづむ花の白雲。

となれば、一日として尼の庵には戸のさゝれぬ日とはなかつた。うつかりすると戸をさ

すことすら、飯の煮えることすら打忘れて、心のまゝに幾日かの旅に立つのであつた。

八坂なる宮居あたりの櫻花いろかはよそにしる人ぞしる。

の洛中から

さかの山峰にも尾にもさくら花松も匂ひに埋みけるかな。

野の宮の春の手向の白ゆふは榊にまじるさくらなりけり。

の嵯峨野さかの、野の宮のさすらい。川を距てた嵐山への花見は更に尼の本懐と云つていゝ。

みをかへし心地こそすれうき世にはあらしの山の花の明ぼの。

世の中に何のほだしもあらし山おもふおもひは花にのみこそ。

其の花の明ぼのに、其の花の花明りに、この世を忘れてひたりゆくのであつた。

たきとおふうしのかざしの花みれば咲きぬとみちのいそがれぞする。

さだ過ぎし聲も一ふしたかむらに春もふけぬとうぐひすの鳴。
 高ねよりうつるをみれば白波のたつの都も花盛りかも。
 落たぎつとなせわたりに舟とめて花みる人のこゝろをぞくむ。
 春雨にぬれつゝ花をとめこずば玉のことばの露もかゝらじ。
 ぬれつゝも君きまさずば咲花もよるのにしきの心地こそせめ
 袖の上にむかしをかけてふる雨も花をしみや人はみるらん。
 寒からぬ嵐の山にわけいりて花のふゞきにたちまじらばや。
 吹すさぶ春のあらしの山ざくらひとへ心にかゝるよはかな。
 立ぬれてわれかはらばやさかの山さかりの花に雨そゝぐよは。
 春雨も花のにしきをかけてこそ梢ばかりはよきてふらなん。
 咲花の一木一木をしめおきていく春ごとのやどりにはせん。
 ふみわけてゆけど夢ぢはあともなし思ひねにみし花のしら雪。
 夜もすがらかをれるかたにひかれゆくわが玉むすべいとざくら花。

山の名のさそへばやがてよのさかのうきてながるゝ花の白浪。
 しらみゆく花の匂ひにけおされて雲のいづこに有明の月。

六

嵐山に春を摘む尼の陶酔とうすいがいかに深いものであつたかは云ふ迄もない。彼女は花の咲く限り其の道の遠きを悲しまない。都近郊は云はずもがな、山を東に越えて志賀の古都にも其の花を賞してゐる。

こがれ来て春の日影のながら山はなに霞める鐘のおと哉。
 志賀山や花のしら雪はら／＼と古き都のはるぞくれゆく。
 たづねこしさくらは雪とふる郷の志賀山でらのはるの夕ぐれ。
 と志賀の古都を訪れてゐる。
 ふきおろす横川よかわのみねの春風にながれておつる花のしらなみ。
 と横河の奥にもわけ入つてゐる。それのみではない。

おのづから風もなぎさの森の名のたのむこかげに散櫻かな。
と河内堵たなごさの院に古を偲び

いまはとてはるもはつせの山風にのこりかねたる花の白雲。

と初瀬の遠きに旅して、更に吉野に入つて、

山の端もおくもさかりのよしの山けふこそ花のもなかなりけれ。

と歌ふのであつた。

さしもの花もやがて散りゆく時が来る。尼の旅もやがて庵が戀しくなつてゆく。

明ぬるかすどろ寒しもちるはなの雪にのこれる月もしらみて。

有明の白い月の前にはら／＼と散つた櫻が白く散しいてゐる。雪のやうに白く月に冴えてゐる。

たちよればそのきさらぎのしのばれてもろくも袖にちるさくら哉。

花待つた二月きさらぎの待間の戀にひきかへて何と慌しい脆もろい落花の散り方であらうか。しかし

ひるがへすてふのはそでの心ちしてちるもあやある花の下かげ。

花の木の下蔭に立寄つて仔細に贖めると、ひら／＼と胡蝶のしなをつくつて散りゆく

花片の美しさ。

ももとせの春やむかしとしのばれてよその袖にもちる櫻かな。

永遠の春は自分のものではないと云ふ淋しさを、つく／＼感じながら、我ならぬ我世ならぬ淋しさを抱いて味氣ない人生に再びかへつて来る。花はやつぱり自分のものではなかつた神の世のものであつた。

山ざくらちるはうけれど世の中のほだしはなるゝ心地こそすれ。

しかし櫻も散つていつた。たとひ神の世のものでもやはり我戀の相手であつた。散るは佗しく別れは惜しいけれど、塵の世のほだしを離れて又出家の自分に返へることが出来る。これがほんとうの自分であつた。すが／＼しい自分を贖める時尼は櫻の酔から靜かに醒めるのであつた。そして、

うらやまし心のまゝに咲てとくすが／＼しくも散さくらかな。



心のまゝに咲て、心のまゝにゆくりなく散つてゆく櫻のすがくしい心を我心にしてみた
いと、散りゆく花に心の淨さを祈るのであつた。

七

花散りし後の淋しさ。そこには晩春の譜が新に奏でられる。山を離れて野を親しむ時がや
つて来る。

うまいして蝶の夢みん菜の花の枕にかをるはるの山里。

櫻にかはつて菜の花の黄金色の美しい畑が展開する。其の素朴な花の香が風に誘はれて庵
に満ちて来る。蝶の夢が其の熟睡に結ばれて菜の花の海を逍遙するであらう。うま寝の待た
るゝ山里の庵の枕に薫る花の香の世界のよさが淋しき心を充たして呉れる。

青麥にまじる大根のはなみれば蝶のむれたる心地こそすれ。

菜の花畑につゞいて青麥のすくくくと並ぶ琅玕の畑。其の畑の隅には大根の白い花が蝶の
群かと紛らはしながら咲誇つてゐる。

おもふことかきもつくさぬ筆にてつくつくしつゝ春もくらしつ。

春早い野邊にすい〜と頭を差出した土筆もも早や闌けていつた。春の深さが春をつくさ
ぬ心に侘しまれて来る。麥畑のどこかには苗代の準備も出来たやうだ。

せきいれし水もぬるみて小山田のなはしる水にかはづ鳴なり。

水のぬるみを我物顔に蛙の聲が聞えて来る。

水ぬるむいけのかはづの聲きけばやがてぬぶりどもよほされける。

あのふつゝかな鳴音を聞けばむしやうに睡りが催されて来る。間のぬけただみ聲に響いて
来る土の悴の下卑聲のコーラスがうつら〜と睡を誘ふのだ。この滑稽な存在もやはり晩春
にはなくてはならぬ添景であつた。

散花を手にとらんとやとび入て水にたゞよふかはづなるらん。

この道化のおかしさ。花を取りそこねて思ふ存分四肢をのべた馴きん者。この者でも

ちる花に春のゆくへやしたふらん加茂のかはづの聲ぞながるゝ。

美しい加茂の流れに浮びながら流れゆく蛙の流るゝ聲には云ひ知れぬ詩情がある。

蛙をきき、菜の花を嗅ぐ、青麥の眺め豊かな庵の生活、そして暖かき草いきれのする野べの誘惑。

新しくの枕からばや山ぶしをのぶしと人のよしわらふとも。

一夜の野臥の生活が、この新草の野べのふすまの上に試みたい心で尼は一杯であつた。

山吹が咲く。

思ふことそこの蛙にうたはせていはぬいろなるきしの山吹。

黄色にしては派手な色に匂ふ山吹。青い葉と莖の間にたわゝにつけたつぶらな花。物云ひたげにして物云はぬ花。蛙がひとり其の溝邊に囀りをやめぬ。花に代つて口上を云ふ蛙の歌のどけさ。

ふむはをしわたらでさらにやまぶきの花にしがらむたにのかけ橋

山吹は散つた。谷川にしがらむ花の美しさ。渡るは惜しく渡らねば更に思ひの残る谷のかけはし。

山には蕨が頭を聳立てる。

とびめぐる蝶にひかれて初わらびをりおもしろき春の山道。

花を失つた山道に、再び山道のゆかしき時が来た。摘まるゝことを待つやうに、岩かげに小竹の篠原に拳を上げる蕨。其の上には二つの蝶が追ひつ追はれて忙しく舞つてゐる。

春もつひに老ひた。野にも山にも夏の日射しが強く射るやうになつて来た。晩春のわかれは惱しく侘しい。

はる風はまだ寒けれど梅香にまどのさうじもさゝれざりけり。

冷たい風を恐れながらも梅の香の惜しきが故に障子をさしかねた早春もあつた。

春寒み榾火にねぶる山賤のゆめおどろかすうぐひすの聲

春はまだ早いに冬を驚ろかすやうに鶯の聲を聞いたこともあつた。

うめが香にさゝぬ外面を唐猫のしのびてすぐる夕月夜かな。

春淡い夕月夜に梅の香を聞きながら外面を見ると、猫の椽を過ぎゆく艶な春の夜もあつた。

花さかぬ山のおくまで風なきておぼろ月夜にましら鳴なり。

朧月夜の山の夜半に風の死んだ春の静かな寂を破つて鳴く猿の聲を聞いたこともあつた。しかし今はすべてが過去のことになつてしまつた。惱しい春の暮れの佗しさ。

四時の露に濡るる 一夏一 (二)

一

夏が來た風の涼しさを戀ふやうになつた。

雲とみしさくらは跡もなつ山の青葉にかをる風のすゞしさ。

春の一時をわがもの顔に振舞ふた櫻もこと木の若葉と其の緑を競ふやうになつた。木蔭をしたひ涼風を待つ青葉の頃が來たのである。

散花にかけし心のしがらみもなつになるせの音のすゞしさ。

散る花に心残りを感じた胸も山川のせゝらぎの涼しき音にすつかり洗去られてゆく、青葉を互る風と瀬をゆく水と、涼しさのすがくしさを夏の悦びがひたくと全身に滲みこんで來る。しかし猶水と風のみではない。

はなのいろに染し心やいかにせむ衣のみけふなつにかへても。

と春に残る心はあつても更衣ころもかへぎわやの爽かさを否むわけにはゆかない。まして山をわけてさんさんと降る白光をすかして落す木々の新緑の瑞々みづみづしさを見れば、初夏のよさに浸ひたらざるを得な

5。

夏なつに今朝けさならしの岡おかのならばはくぼてにあまる露のすゞしさ。

柏かしわの葉の窪くぼみにたまる露がきら／＼と葉を洩る日に輝く涼しさや、

○ 日をさへしはがくれ菴あまのうれしきはすこしもりくる夕月のかけ。

こんもりと茂つて日の目さへ通さぬ庵いほりの茂みに夕暗に涼しき月の影の洩れくる初夏の夜のよさは又格別かくべつである。鶯うぐいすでさへ青葉がくれに老ひつくした春の名残なごりを若葉の梢こたえに舒のびして歌つてゐる。色あせた自分の羽色を恥かしむやうに、

なれきつる春やをしほの山さくら青葉がくれにうぐひすの鳴。

姿をかへ春を忘れた櫻を恨む鶯うぐいすではあるが、其のすが／＼しい夏衣の若葉になほ名残を惜しむやうである。

卯の花が咲く。

我やどのかきねばかりに有明の月と見るまでさける卯の花。

夏のすが／＼しさを面めんと示すものは卯の花の清浄なる白き色である。少し青みを帯るとさへ見ゆる卯の花の有明の月の白さにたぐへつゝ垣を雪につゝんでゐる。

寒からぬ雪のなかみちわけてみんうの花山の夕月のころ。

雪にしては暖かい卯の花。しかも静かに白い夕月夜に咲誇る花の白さの浮出でた夕暗をわけてゆく夏の夜の心地よさ。

うの花のさける垣ねの夕じめり山時鳥一こゑもがな。

ひんやりとする夜のしめりに夜目にもしるき卯の花を眺める時、ほとゝぎすの花妻としてこの花をみて、やがて其の逞しいすばやい婿むこがねのほとゝぎすの聲を待ちたくなる。

よのうさをへだつるかきの卯花はうれしきかたのうもじならまし。

卯の花垣の清浄な色に圍むらされたこの庵は、浮世の塵から遁のがれた一つの結界けっかいである。まことに卯の花こそ憂世わすれの宇治の茶にもたとへやうか。

茶摘みの歌が流れて来る。ほととぎすが待たれる頃は茶の芽の摘まるゝ時。ほいろの香の匂ふ時である。

〇 ところせくかをるこのめに時鳥しのびかねたる夕ぐれの声。

茶の香の匂ひ、新茶の薫り。夏の景物にこの香を棄てるわけにはゆかない。ほととぎすも茶の香を嗅ぎにたまりかねたる一聲を夕べに落してゆくのであらうか。

このめつむ野べにおちくる一聲はよをうち山のほととぎすかな。

ほととぎすも憂世のうさを忘るゝために、このうさ忘れ草の香を嗅ぎに其の一聲を茶畑に落してゆくでもあらう。

牡丹が咲く。

くさの名のはつかに咲きしその日より廿日ふればやはつか残り。

花恥しい廿日草が咲く。わづかに咲いた其日からしなやかな姿をみとれ勝ちであつたが、廿日もたつたのかわづかに花の残れるが艶に淋しい。

葵あひひも咲いて来る。

かけそへし露やみだれん玉だれのをすのあふひに風なふきそね。

賀茂あひまつりの葵祭の夢がまだ残つてゐる。簾すだれにかけそへて残のこんの葵に風よ吹くな、花が散りもするに。

ほととぎすの時節が来た。尼の心は又このものに空しくなつてゆく。夕暗のせまるころより戀人を待つやるせない心に待侘びるのである。

時鳥いまひとこゑとまつ山のまつはちとせの心ちこそすれ。

じれつたい心のあせり。松の木の枝に今かと待つほととぎす。まつまの久しきこと千秋の長さをかこちたくなる。

〇 ほととぎす今一聲とましましにしらみはてたる有明の月、

やはり天氣洩らすべからず、待つ鳥は一聲をさへ惜しんで、有明ありあけの月ははや白みかへつてゐる。

たづねきて見し花よりもつれなきは春のしをりの山ほととぎす。

折角尋ね来て見た花よりもつれないお前ほととぎすよ。春のしをりを忘れたか、飽氣ないお前の振舞ちまひよ。けれど時くれば聲を惜しむものではない。

朝かぜにつゆと散りくる一こゑはかゝるは山のやまほととぎす。

冷たい朝風に露と共に落ちて来る一こゑは薰かほるやうに山に飮くだまする。唯一聲でいゝ、其聲に幾夜の恨は露と散りゆくに。

時鳥なきていりにしよこ雲に跡なきみねもながめられける。

唯一聲に啼き去つたほととぎすの姿は峰の横雲にかくれていつた。雲ゆるゑに見えぬ峰さへ懐しく眺めやらるゝ。けれども庵を出でゝ聲を求むる世話も次第に無くなつて来る。山を飽き峰を淋しむほととぎすは人里を懐しんで夜々其の奇くしき謎なぞを落してゆく。山ゆかば山の佗おちしさを破るやうに喧しき叫びを聞くことが出来る。

をかざきのさとのねざめに聞ゆなり北しら川の山ほととぎす。

岡崎の佗住居にさへ尼の寢覺めを悦ばすやうになつた。

綿織にしぢのさとのねざめにきゝてけり北白川になく時鳥。

綿織の庵にもやはり北白川の野をゆく聲が寢覺を驚かした。

東山つたひゆくらん時鳥わがいほりにも初音もらせよ。

の恨みはもう必要でなくなつた。

風かゝる枕の山のほととぎすつゆとちりくるよはの一聲。

枕して静かな眠をまつ尼の軒近き山にも、一聲を露と諸共落して来るやうになつた。

鳥はみなかへるゆふべにつれなくも山時鳥いづちゆくらん。

夕暗が迫つて来るに、塙ねらを忘れたかほととぎすが唯一つ、つれなくもいづちともなく飛去つてゆく。けれど、

いつとなきときはのさとは時鳥忍ぶはつねに卯月をやる。

この一聲に、時を忘れた庵にも卯月の來たことを知らせて呉れる。ほととぎすに時を知る

庵住生活の心安さよ。

村雨がともすればはらくと濡れて来る。

雨はるゝ青葉のつゆをうちはぶき山ほととぎすなく夕べかな。

雨はやんで居る。青葉のつゆを羽ぶきながら啼くほととぎすの姿は見えねど、夕やみにも
しるく其のたゞまひが傳はつて来る。

月ならでもらしけるこそ時鳥ひとむらさめのなさけなりけれ。

月夜でもないのに、この一聲の聞けるのは、村雨の情けと云ひたい。うち潤つた聲に又一
入の趣があらう。けれども、晴れた月夜の聲には冴えゆくほととぎすのよさがある。

一こゑは忍びかねてやもらすらん月もかたぶく山ほととぎす。

西にかたぶいた月、そして冴える夜空の静寂、この美しき光景に大空をまつしぐらに割つ
てゆくほととぎすも、一聲の添景を惜しむわけにはゆかないで、啼いた一聲でもあらうか。

三

ほととぎす聞くためばかりとは云はない。卯月の空を懐しんで尼は諸方に旅立つて行く。

其の旅の道すがら夜となく晝となくゆくりなくもほととぎすを聞くのであつた。

日はくれぬやどかせ山のほととぎす明日は都へつれて出でまし。

と、多分南部の旅よりの歸途でもあらう、木津川べりの鹿背山にて夜に聞いてゐる。

夜をのこすけしきのもりの時鳥青葉がくれのつゆに啼なり。

けしきの森の朝にも聞いてゐる。

○朝風にうばらかをりて時鳥なくや卯月の志賀の山越。

志賀の山越にて朝のこと。

更るよの月すみのえのうらちかく初ほととぎす渡る一聲。

難波住吉の海邊の月に初音を聞いてゐる。

ものものふの矢ばせわたりの時鳥弓はり月のかげに鳴なり。

近江矢橋の夜の月にも之れを聞く。

あふさかの小關をゆけば長等山三井寺わたりなくほととぎす。

これは逢阪山をほさかのほとりで遠く大津の空に聞く。

ひとこゑはいかだのうへに鳴すてゝいづるあらしの山ほとゝぎす。

たびねするさかののいほにきこゆなり小ぐらあらしの山時鳥。

嵐山にてのほとゝぎす。近くは

加茂川やむかひのやまの時鳥月もはつかにいでゝ鳴なり。

ゆくとしてほとゝぎすの聲聞かぬ處はない。森に山に峙に、存分に味ふことが出来たに違ひない。

時鳥なきて過行かたをかの森のこすゑぞながめられける。

の恨みはなくなつた。

まちわびしうらみもけふはなつ木立こだちしげくも名のる山時鳥。

夏木立の繁りゆくやうに頻繁なほとゝぎすの音に尼は満悦していゝ。

そのうちに五月五日が来る。菖蒲の節句が訪れる。賀茂の競馬くらべうまもはじまるであらう。

おくるなよかけよかけよと神山のほとゝぎすさへ鳴わたるなり。

勇ましい上賀茂の競馬に、神山をどよもすほとゝぎすの馬を勇める聲が、なほ頻りにするのである。

ふきわたすあやめにおのが時しらばのきごとになけ山ほとゝぎす。

節句の時が、ほとゝぎすの鳴盛る時であることを知るならば、戸毎にも鳴きゆけほとゝぎす。聲を惜しみなく振舞ふによい時ではないか。しかし次第に飽かれてゆくほとゝぎすの残んの聲が侘しい。

四

あやめが咲いて五月五日が来た。祝ふべき男の子もないけれど節供は若ゆく子等の若々しい鹿島かしまだ立ちにはとつてつけのいゝ期節である。

ことさらにふきこそそへねおのづからあやめまじりのよもぎふの宿。

あやめふくことはせずとも、この草の庵にはあやめが蓬に交つて咲いてゐる。祝うとしも

はないけれど、節供を祝ふやうに賑やかである。節供がすむ頃から苗代田の水のぬるみが次第に早苗を成長させてゆく。苗取の期節が近づいて来る。苗取歌に賑ふ苗代のさんざめきが聞えて来る。

うちわたすくろの小川にながるゝやとりあまりたるさなへなるらん。

畔の小川に時に流れて来る苗の流れ。多分とり餘つた苗でもあらう。

かのみゆるる里の山田もうゝるなり菴のめぐりも早苗とらなん。

田植の歌も聞えて来る。見はるかす山田にはもう田植が始まつてゐる。この菴のめぐりの早苗もつい取らねばなるな。

庭の橘もあの揮發性の強い香を漂はすやうになつて来た。

手折ゆく花たちばなはいにしへをしのぶにあまるすさびなるらん。

五月まつ花橘の香をかげばと古人も昔を思ふためには橘が名にこそ負へれと云つたが、

やはりあの強い香が鼻をつく頃にはあの香を侘びた古人が今更のやうに戀しくなつて来る。

其の中に水雞がたゞくやうに啼く時も近づく。

○夕月夜ほのかに見ゆる小板橋したゆく水に水雞啼なり。

夜を楽しむ頃、夕月を浴びて逍遙する。とある油の小板橋にかゝると、ほのかに見ゆる小板橋の下には水の流りに沿うて水雞が啼いてゐる。

門ごとにたゞく水雞はたのまれずうはのそらなる夕月のかげ。

たゞく様に啼いてゐる水雞の鳴音に、待つ人の來るかと心を匂はしながら戸を開いてみる。夕月がそしらぬ顔に空に冴えてゐる。何のことだか抓れたやうにあつけにとられる。夕月がくすぐつたく笑つてゐやう。

○まつ人はなほつれなくて柴の戸をたゞくひなに夢も結ばず。

待つ人はたふたうやつて來はせぬ。それに柴の戸をたゞくやうに啼く水雞の音に、恨めしくも夢さへ結べない。へい辛氣な水雞よ。せめてわが心を摘めよ。

夕空には蝙蝠が礫のやうに右に左に又た斜めに飛び交うてゐる。

軒近き柳になびくかはほりのかげなつかしき薄月夜かな。

軒の柳になびきながら飛ぶ蝙蝠の影が折からの薄月に懐しく影繪のやうに眺められる。夏

蓮
の宵の暫の悦樂よ。

— 月 尼 —

心なしの梅雨がそれとなく迫つて来る。あの悵鬱な一ヶ月はたまらなく嫌な週期ではあるが、其れには又其れのみがもつゆかしさが其處に漂ふてゐる。

つりのいと少女がまゆとみし春もながれてはやき五月雨のころ。

釣の糸に少女の眉のやさしい葉をつけた枝垂柳のよさに見とれてゐた春は、もうとつくに流れ去つて鬱陶しい五月雨の頃が近づいた。

衣川あらはぬ水やにこるらん日もかさねふる五月雨のころ。

何と云ふ久しい雨であらうか。この久しき雨に濁水がいかにかに川を埋めてゐるやうか。

かきくらしはれまもみえずかさなりて雲の林にふれる五月雨

毎日／＼大空は墨を含んだやうに暗く、厚く重つた雲が氣味わるく地上に迫つて来る。しと／＼と時をおかず降りつゞく雨はやむ時がない。大空を仰げば雲の林に降り埋む雨の凄いと雲と雨の亂舞がいつ果てやうとも思へない。雨氣を含んだ雲の往き來、其の雲に直角に降る

雨雲と雨との暴君の天下となつた。

五

五月雨の受難が終ると夏の日が一入其の強い光を投げかける。山には青葉の光、野には草のいきれ、夜は爽涼の夏の月。

あへぎつゝひるまのうさも忘れみづ野中の月のかげの涼しさ。

庵の屋根も燂きつくされるやうな熱射、あへぎ／＼の晝はやつと夕ぐれと共に救はれてゆく。しめりを帯びた野草を踏んで野路をさすらへば、とみる野中の忘れ水に涼しい月の影がちらめく、野を互る涼風の伴奏をうけて。

端居してあはとみるまもなつかりの蘆の篠屋のみじかよの月。

夏の夜の端居ほど心ゆくものはない。人は來す唯一人でもいゝ。新樹の影をもれて來る瑞々しい大空に浮かぶ夢のやうに涼しい月。しかし月の觀賞もほんの暫の短かさが佗びしい明けやすい夏の夜の恨み。

— 四時の露に滯るる —

夏の夜のそゞろあるきの折々には、いろ／＼なるものが眼を捉えて呉れる、

うをすくふあみよりもれて早川にながるゝ月の影のすゞしさ。

涼みがてらに山川に手網をもて魚をすくふ人もある。魚をすくはず月をすくふやうに手網に水が光る。碎けた月が網を逃れたやうにもとの形をとりもどす。冷たい水に銀を流す夏夜の月の涼味が身にしみて来る。

水むすぶそでのしづくに月もりてこのまの風はすゞしかりけり。

水をすくふ手を洩れて落ちる濡に月が光つて、木の間もる月の冷めたさを含む樹林の風が涼しく袖を動かす。涼みの頃の夏の夜の悦び。

夏の夜のよさは蚊のために其の半ばを奪はれる。けれども蚊遣火の棚曳く宵の風情には其の半をつぐなふことが出来もしやうか。

かやり火のよそめ涼しきうすけぶり月にさはらぬ河づらの里。

川沿の里に月をめながら蚊遣火をたく。涼しさうな薄煙が霧のやうに立罩めてゐる。け

れど月の光を碍へることがない。なよやかな煙の行くへを眺めながら川風と月とを受容れる川沿の里の夏の夜は贅澤であつた。

たきすてし蚊遣のけぶりほの／＼となごりの月に影もたなびく。

夜は更けた人々は蚊帳の寝床に急いでいつた。焚き残された蚊遣火の残んの煙がいぶつてゐる。月の前を覆ふやうに棚曳いてゐる。夜は次第に更けてゆく。

かくれがの山のこかげも蚊遣火にありかしられてけぶりたつなり。

人を離れ世を棄てたこの山の庵にも、薄紫の蚊遣火の立昇ることから在所が人に知られもしやう。かゝる山の木蔭にも庵する人もあるかなと煙に驚かされもしやう。

夏の夜の景物は、月と水と蚊遣火と更に螢を忘れてはならない。夜をこめて賑やかにすい／＼と飛び交ふこの不思議なる存在をないがしろにしては夏の夜は成り立たない。月なき夜は、月に代つて夏の克明な幽暗な光をもつて夏の夜を慰め飾つて呉れる。

軒ちかくほたるとびきてうたゝねのいめもすゞしき川づらのやど。

音もなく熱もなく火と云へど涼しさを添ふ螢。川沿の夜にはうたゝねをそよるやうに飛び交うて来る。飛び交へど心を亂すことはない。幻の子、龍宮のつかはしめ、と云ひたい螢の光。夢も涼しく結べやう。

○みちのくの浅香の沼にとぶほたるふかき思ひをつゝむなりけり。

物云はぬ螢。思ふことえ云はずして心を焦す螢。身を焼く螢。深き思ひを打ちあけず悲しく飛ぶ螢。物云はぬが故にいぢらし。

よるなみのかすのほたるの玉くしげはこねのうみはあけまくもをし。

網籠に螢を入れて、其の美しい火の明滅に見入る時、夢の國幻の園が其の明滅する無数のほの蒼い火によつて示される。夢幻境の幽玄なる光景は、この愛すべき悲しき物を放ちやる愛さへ忘れさせて来る。

螢と共に夕べに風情を添へるものに夕顔がある。夕暗にぼうつと白くじむ花の幻に似る風情は白きが故の涼しさと夏の夜に相應しい夢幻を愛する心をそよつて来る。弓張の月ほのぼのとみえし夜に光りことなる夕顔のはな。

夕暗に咲く風情は夢より咲ける花かとまがひ、夕月夜に照らさるゝ趣は幻の華が咲くかと紛ふ。

夏に咲く花のいろく。

うつゝなきよをかりそめに咲花のねむりて人をおどろかすらん。

淡紅色の美しい花をつけて、涼しい細かい葉を持つて、夏をいそしむこのねむの花。けれども物觸ればすぐ葉を閉ぢ花はうなだれてゆく。人の世のかりの世を悲しむごとく。榮ゆるものやがて空しと教へるごとくねむりゆくこのねむの花。

○おく露の玉もいろある光かな夕くれなゐのなでしこの花。

おく露の玉にも其の紅の色が映つて夕映にも均しい美しい撫子の花。夏を讃へる其の紅の色、牡丹刷毛の軸の上から八方に開く裂花の姿。

蓮の花こそ尼には思出の深いものであつた。

つゆならで月のやどりもなかりけり蓮にうづむ庭の池水。

池一杯にすくよかに生育した蓮の茂り。丸い琅玕の葉の廣がり池は見えなくなつてゐる。葉の上におつ露ならでは月の光を受けることを拒みがちである蓮の茂み。其の中からすくくと筆の穂先の大まかな花蕾がやがて莖を抜くであらう。

ふるとしも見えぬ小雨をうけためてをり／＼こぼすいけの蓮葉。

ふるとしもない小雨が、やがてあの廣葉の上に次第に玉を大きくしてゆく。左右にゆれては葉をゆすぶる。たまりかねた葉はつゝに大きく揺れて折々葉の一方から白玉の露をゆり滲してゐる。

いかにわがむねの蓮もかくばかり開けそめなばうれしからまし。

すつくと葉を抜く白蓮が、清淨たる花を開いてえならぬ異香をあたりに漂はす。花瓣に見

る清淨の氣と薫する香と共に、これはこの世のものではない。天上のものであり淨土のものでなくてはならぬ。尼の心にはかゝる清淨なる覺が願はしい。

夕立が夏の退窟を寛げるやうに時々襲つて来る。墨を流したやうな空の一角。徐々に動く黒雲の勢揃ひ。やがて陰風を魁として一陣の冷風が過ぎてゆく。遠く物凄しい雷のうなりが地響する。ぴかりと瞬きのやうに白く一閃する電。やがて大粒の雨がポツリと来る。物凄しい疾風と共に聚雨の襲來。萬雷の轟き。天地暗黒。

雲ながらみやはすぎで鳴神のおとは山しなきほふゆふだち。

雲はやうやうに雷と共に都の空を去つて行つた。山科あたりに雷鳴が吼えて居る。しかし夕立は其の響と競ふやうに一仕切降り募つて居る。やがてはあか／＼と冴えた青空に夕映がするであらふ。ポタリ／＼と落ちる樹の濡に蟬も鳴くであらうか。

おのが羽におく露のまを命ともしらでや蟬の聲きほふらん。

羽の上にとまつてゐる露。その露の命ほど短かい命が蟬の一夏の命である。短かい命をも

忘れて聲を競ふ蟬のあはれさよ。人もまたかくのごとくではなからうか。短かい束の命を知らず、あはれむべし生の營みのみに忙しきことよ。せめて生命を忘れて鳴くことに没入する蟬の生の充溢じゆういつがありたい。

なつ山の若葉にほふくれなひはしぐるゝせみの聲やそむらん。

青葉若葉の中に紅一點にさき誇る花は、蟬しぐれの音が染出せるものか。あの鳴盛なきさかる生命の誠が燃え出でた花でもあらう。

○ 明ぬるかこすゑの蟬のこゑはしてまだ夜をのこす木がくれの庵。

まだあけやらぬ木深き山下庵には、夜の暗さが残つてゐるのに、もう明けたのであらうか蟬が梢に朝を歌つてゐる。其の聲に熱あつさを感じるけれど、朝の音はさすが涼しい。

○ 鳴せみのこゑのしぐれにゆめさめてひるね涼しきもりの下かけ。

森の下かけには夏の炎威もとどかない。木を亘る涼風が熟睡じゆまゐをそよつて来る。心地よき晝寝が蟬の音に覺さめたけれど、日は傾き涼風は領あきをとく。森の下蔭の心地よき寝覺めの悦び。

庵の生活をするものにとつては山かげの涼しさに夏を忘れることが出来る。都の苦熱は洗去られて塵外の境の味はことに深い。

世の中になつはながれて出でつらむひとりすゞしき山の下水。

手にすくふ山下水の冷たさを持ち得ることは世外の人の特權であつた。其の冷透れいたうな水によつて夏は何處へか去つて行つたやうな涼しさを感じる。

岩つたふしみづすゞしき山かげの葉がくれいほに住人やたれ。

岩を傳 清水、涼しく流れゆく山かげの森の下庵は、夏は殊に住む人の羨しさを感じる。

けれども一步野に出づれば、

たちよらんかげもなつ野の草むらに露をもとめて飛こてふ哉。

じり／＼照りつける陽の熱射ねつしゃにむつとする草いきれ。草は萎えしぼれてあえいでゐる。やう／＼に其の生をつゞけてゐるかに見える蝶、夏にさへまだ残つてゐる蝶は、其の上を水を求めて奔命する。

さとの子がはたおる音もとだえして晝ねの音のあつき旅かな。

蝶のみではない。土ぼこりが立つやうな里の道を歩めば、布織る里の乙女も晝寝して、晝のしどまを照りつける光の汗を絞るやうな暑さよ。目が眩みさうである。

夏は森の木蔭の庵もいゝ。又川沿ひの家もいゝ。

○ 蘆の葉のそよぐこゑして手枕のゆめもすどしき川添のやど。

其處には夏も忘れがちである。ことに夜の納涼は都の中も更に趣が深い。

涼しさに心もすみて加茂川ののちせをさへに思ふよはかな。

涼しさに川の流れの末までも思ひ浮べられる。

この殿もすどみやすらんかどり火のほかげのみゆる庭の夕暮。

町人の贅澤な家にも夕べが來れば篝火の火影が庭に映えてゐる。涼みをするでもあらう。

やがて夏も過ぎがてになつた。六月秋が涼しさを汲む最後のものとなつて秋が待受けてゐる。

人の世も上中下とかはのせに心心のみそぎすらしも。

こひせじの夫にはあらで涼しきは神のうけ引かもの川風。

四時の露に濡るる — 秋 — (三)

一

○ ほにいでぬしのを薄しのぶれど下ばさよめく秋のはつ風

秋の初ぶれは先づ微かながら冷えを帯びた風からはじまる。何となくとげ／＼しい風が夏の軟かみを去つて吹いて来る。穗に出でたすゝきは隠さうとするけれど下葉のさゝやきにはもう秋の初風が訪れてゐるではないか。

○ 朝風に川ぞひ柳散そめて水のしらべぞ秋に成ゆく。

そればかりではない。今迄頬をなでるさへ爽やかであつた朝風に、川端柳の葉が散出して耳傾けば川の流れにさへ秋の調べが聞えて来る。

○ くれ竹の末葉そよぎてふしみ山みやこにちかく秋はきにけり。

竹の葉を吹く風の音にも早や秋は見え初めて都近くの伏見山にさへ秋はせまつて来た。

遠く天上を仰げば、空の冴えにも秋がほの見えて、すつきりとした大空に銀河が白く流れてゐる。七夕の夜も近づいた。

○ 天の川雲の波こそさわぐなれたなばたつめや今わたるらん。

空ゆく雲も今宵は秋の思ひにかき亂れてゐる。多分今頃は棚織姫が河を渡りはじめたのであらう。天上の騒ぎが其の雲によつて思浮べられる。

○ ことの音のうれしきすぢに聞ゆなり七夕つめにあえやくつらん。

今宵は琴の音さへ冴えて響いて来る。天上の七夕つめの嬉しき心にあやかつてゐるのであらうか。しかし。

○ としを經しこけの衣はくち果て星にかすべき片袖もなし。

七夕の艶な思ひ出は遠くの過去となつた。墨染の衣の汚ちはてた自分には戀を思ふことさへ餘りに遠く距つてしまつた。

○ 野べには秋の野草が我世をほこりに咲初めて来る。

○ 雲間にはまだ有明の月くさに咲まじりたる朝がほのはな。

夏を忘れかねた朝顔が小さく咲いてゐる。月草の花が咲きそめたのに、其れに交つてこの運命の子が淋しく衰へを見せながら咲いてゐる。世に出るものと世を去るものと零落しゆく朝顔に限りなき悲哀を感じる。

秋の寵兒萩が咲きそめた。

ゆくまゝに見れどあかぬはさをじかのなくなる野べに咲る秋萩

いくら見ても飽くことを知らぬ萩の花である。小さくやさしくつゝましやかにしかも冴えたあの淡紅の花色。

ゆふ露はたまとみだれて秋萩のにしきにかこむ野べのかりいほ。

乙女心になにかなしに涙ぐむやうに露を帯びた秋萩が、我が野べのかり庵を圍むやうになつた。秋を味ふためにこのかりの庵こそ尼の無憂園であつた。

かぜそよぐ小萩が露のたまたまにちりてまたおく月のかげかな。

風吹けば萩の露は散りみだれる。そして又何時とは知らず露が宿つてゐる。月に玉散る其の露の光りもしばし、又靜かに月を宿す露のきらめく。

尾花も其の白い穂を秋風に揺がせて、夜目にもしるく咲いてゐる。

いにしへの秋にかへれとまねくらん荒れたるやどのしののをすゝき。

薄がまねく。風のまに／＼揺れながら招いてゐる。このまばらな庵の生活をすてゝもとの自分にかへれと云ふやうに、しかし俺は過ぎし過去には何の未練もなくなつた。今の生活を俺の最上の生活であつた。

野べの景色は次第に秋を開眼してゆく。日の照るかぎり、眼路のゆくかぎり。

百草の花のさかりのからにしきひとりしめのをわけぬ日ぞなき。

尼の庵の生活はこの秋の花野の故に侘しくなつた。照つても曇つても尼は野路をわけて野べをさすらはぬ日はなくなつた。錦を展べたやうな花野を百草の香にひたりながら魅物のやうに歩むのであつた。

しくもをしまくもをしきを秋草の花のむしろは野べながら見ん。

花の薙である。布くことも巻くことも惜しい。唯だ身を運んで花に圍れながら花に酔ひ野べに眠ることが何よりのすべであつた。

霧が立つ霞が練絹であるならば霧は絶である。霞を紗とすることが出来るなら霧は絹と云ふことも出来やうか。

立そめて外山になびく薄ぎりやまだ入たぬ秋しのよさと。

秋立つて間もない頃の薄霧は、山を微かに染めてなびくばかりであるが、

さし登る朝日の山もふもとは猶夜をのこす宇治の河霧。

河霧は殊に濃く山の麓を染める。乙女の裾模様のぼかしのやうに、くつきりと山は朝日に輝くに、其の裾は猶ほ夜をのこすやうに霧がぼかしてゐる。

法の師の山わけ衣をぼぬれてきりにこゑある峰の松風

次第に濃くなりゆく霧は天地を乳白の一角につんでしまふ。山伏の袖をしとぬらし、松風の音を霧の音に欺くことさへある。霧がくれの山の下道が思出される。露もいよ。

いる月を惜むたもとに残りけり影をやどし露のしら玉。

月の影を宿した露。月を惜しむ我袖にしとぬれかゝる、秋の夜の露の面白さよ。

ぬれてふす吉野の露の朝ぼらけてふの夢をおどろかさばや。

朝野の露を踏みしだいて朝寝の蝶の夢を驚かす。早朝の野べの露の足ざわりの爽やかさ。

虫の音が冴えて来る。鈴虫にきりぎりす。

○みをよする尾花が末の秋風にゆられてなくかすむしの聲。

尾花の揺れに身をゆられて揺るやうになく鈴虫の音が響いて来る。

松風は秋をしらべて野宮のしめのうちなるすむしのこゑ。

嵯峨の野の宮の淋しい玉垣の内に澄むやうに鳴く清い鈴虫のこゑ。

○月しろきすゝきの穗屋に虫鳴てたび寝うからぬ片敷の袖。

たゞ一人の旅である。月にしろく浮出たすゝきの穗に虫の音が頻りにする。淋しかるべき秋のしかも月夜の一人の旅にさへ、この虫故に秋の寂寥は忘れられてゆく。

○山ざとのかべのやれ間のきりぎりす月もこゝよりさせよとぞ鳴。

尼の山里の粗末な庵。壁の隙間にしきりに鳴くこほろぎ。秋寒く冬近きにつゞれさせとは云はず、月の光りよこの隙を洩れよと月を呼ぶ。風流なるこほろぎ我が意を得たりな。

月が冴える秋の月がますみの鏡のやうに。

古池にそらとぶ雁のかけみえて柳かつ散る秋の夕ぐれ。

雁もかへり来る柳のちりゆく秋の淋しい夕ぐれが、やがて匂やかな月に賑ひをとりもどすさしながらひるはくらし、柴の戸をあけてわがまつ月の影哉。

晝の間は柴の折戸を閉しがちであつた尼の庵は秋の夕ぐれが待遠しく、月を迎へるために夕べ却つて戸を開けて待つ。尼の心は月のことで一杯であつた。

とちこめしむぐらの下に月のみはさし入ばかりかき拂ひてん。

八重葎に埋れた庵にも月の秋が近づいた。せめて月入るためのよすがとも、葎を少し拂つてみやう。月を迎へる準備はやつと出来上つた。今はたゞ月を待つばかりとなつた。

吹はらふ風に光はますかゞみちりもくもらぬ秋のよの月。

空吹く風がみんな雲を拂つた。大空には一點の塵も浮ばぬ。其の風はやがて月をも吹いて、月面の塵をぬぐひつくしたであらう。冴えに冴えた月が凄^{すこ}い位の光を投げて来る。

宵のまの松吹風もしづまりて月にふけゆく秋の山里。

風は静まつた。物音一つ聞えない。一天には唯月一つ静まりかへつてゐる。この静寂のうち^{しんま}に山里は次第に更けてゆく。

ひさごもて汲もえつべきかけながらあはれはふかし山の井の月。

早春には氷を破つて水を汲んだ山の井には、今は月が其の底に浮んで居る。杓によつて汲むことが出来やうけれど、汲むにはおしい山の井の月の風情である。

みひとつの外にくまなすものもなし月のさし入る浅茅生の宿。

月は思ふ存分射しこんで来る。自分一人の隈以外には何の光を障へるものもない。しづかにこの浅茅生の月の宿が楽しまれてゆく。けれども其處に侘しい心もあつた。をかざきの月見に來ませ都人かどの畑いもにてまつらなん。

一人の淋しさに友を戀ふ心が、月に一入深くなつてゆく。畑の芋も出來秋のこの岡崎の庵に尋ねきませよ。月を賞しながら芋を煮て差上げやうものを、しかし何地の友も訪れはしな

い。月見んとちぎりしものをとほつ人雁はくれどもことづてもなし。

月見にはと深く契つた友の訪れもない。雁はすでに來たのに言傳さへも寄せては呉れない。

山ざとにひとりも月を見つる哉よよしと待ん人もなければ。

○いにしへを月にとはるゝ心地してふしめがちにもなる今宵かな。

唯一人ぼつねんと月に向へば、冴え切つた月光に自分の過去のすべてが見透されるやうな氣がして過去の淺間しさが恥かしい。頭をまるめ墨染の衣はつけてゐるけれど。けれどもやはり月は尼のいゝ伴侶であつた。月なくて秋は暮らせない尼であつた。

よなよなの月にのもりとなりはてゝなるゝ尾花がそで枕かな。

月ある秋の夜はよなくゝ月の野守となつて、馴れた尾花を袖枕に幾夜か野に假庵を移したことであらうか。

そでの露かゝらざりせば大そらのものとのみみん秋のよの月。

夜の更けるにしたがつて袖は濡れて來る。月の恵みの露がこの袖に通ふのである。月は唯天上のもののみではない。自分と深い契りにあることが肯づかれる。

野に山にうかれうかれてかへるさをねやまでおくる秋のよの月。

野べに又山に月を訪ねることに忙しい自分。うかれうかれる自分を、このしれものを、閨の中まで送りとゞけて呉れる月よ。親切な月よ。

ねがはくは月のかけにて秋しなんさらばやみにもまよはざらまし。

西行は花の下にて春死なんと云つたが、尼は月の下にて秋死なんと云ふ。明き月光をあびて、死出の暗き闇も照らされやうものを。けれど月に執するもやはり出家の心に叛く。

ながむればこれしもやがてほだしなりみじや浮世の秋のよの月。

浮世の絆を棄てた自分には、月もやはり浮世の絆でなくてはならん。この絆を斷切つて心の月を愛せねばならん。

月の前を羽うち交しながら久方振りに雁がかへつて来る。

聲なくばかれも雲かといとはまし月にくまなすあまつかりがね。

月の前に雲がかつたか、この隈なき秋の月に。しかし其れは雲ではなかつた、雲から落ちるあの聲は確かに歸へる雁がねである。雲の愁ひは必要でなくなつた。嬉しき雁の歸來るのであつた。

山のはの夕べの雲のかけはしをつぎてもわたる秋のかりがね。

横に棚曳く西雲の二つの雲のかけはしを、つなぐが如く歸へる雁がね。天使のやうに風のやうに過ぎ去つて行く。

かぜ渡るまのゝすゝきにまねかれて入江におつる天つかりがね。

入江のほとりのなびく尾花に招ねかれて、落つるが如くさつと地に入る雁がね。久かたの雨まもおかす来るかりをいかでか萩のしりてちるらん。

久しい雨の間もおかす歸へり来るかりを、どうしてしつてか萩の花が散るのであらうか。

雁來るころの自己の命終を知りがほに散つてゆく。

秋はきてはるはわかるゝかりの世にこゝろとむなとおどろかすらん。

雁は秋に來て春は去りゆく。會者定離のかりの世のことわりを知らせかほなる雁がねよ。

その姿に永遠の都が戀しくなる。

古里のたよりもがなとおもひねの旅のまくらに雁鳴きわたる。

けれど旅に出で、故郷が戀しい時にお前の聲を聞く時は、故郷への便もがなと思はずにはゐられない。人の世の浮世のほだしはまだ解ける時はない。

山里に住む身には秋は又た鹿の音の戀しい季節である。

吹おろす峰のあらしははげしくてそれかあらぬかさをしかの聲。

嵐のはげしい日山道行けば心なしか鹿の音が響くやうだ。

あふことはかたわれ月のかげ更てひとりやしかの鳴あかすらん。

別れた妻の戀しさに、峯の高見たかみに立つて淋しい更けた片割月を仰いで妻をよぶ聲か、この夜ふけに鹿の音が聞えて来る。

砧きぬたの音が聞こえ出す。秋も次第に深かまつた。

から衣うつおと聞ば袖のつゆくだけでものゝおもはるゝかな。

秋は悲しい。この悲しみが砧きぬたうつ音によつて更に悲しくされて来る。何故か其故は知らない。秋の心が悲しいのである。

川波のよるよるごとにもうつおとばのさとの秋ぞさびしき。

音羽の里には夜に砧きぬたの音が聞こえぬ日とてはない。その音ごとに秋の悲しさは深みゆくばかり。

○ きぬたうつ音はからころからころもふけゆく遠の山ざと。

砧きぬたのあのからころとする音、この音ごとに秋は更けてゆく。この山里の淋しき秋。

よな／＼にうちこそまさされ唐衣ころもふけ行秋篠あきしののさと。

秋篠あきしの、この里の名のひゞきの淋しいこと。夜にうつ砧きぬたに秋の更けゆくころ、秋篠の里の名はことに淋しい。しかし悲しく淋しいけれど、砧は其れ自身悲しいのではない。うつ人の人が佗しい時が多からう。

こぬ人をしたまつさとや宵過て月もよよしと衣うつらん。

來ぬ人を頻りにまつために月も夜もよしと衣をうつでもあらう。佗しさは心より砧きぬたに傳はつてゆくのであらうか。

唐衣うつ夜うたぬ夜へだつるやせこがなき間のすさびなるらん。

砧きぬたをうつうたぬは別として、夫の留守を守る淋しさを慰むための手すさびが砧きぬたであらう。

四

菊の花が咲く。其の高貴けだかき花が地上に匂ふやうになる。

咲そめし千代のむかしもゆく末の秋のかぎりもしら菊の花。

この白菊の花をし見れば、遠き過去も久しき未來もすべて忘れることが出来る清淨なる色

にけだかき匂に何をか思はん。

露をのみかをみにしめて秋はたゞうきよのことはしら菊の花。

菊の露。それはかつては山人の不老不死の薬であつた。永遠の生命をとゞめる其の露にあやかり、菊の精として匂ひ出でたる其香をみにつけて、俺はもうこの世の人ではない。浮世のことはすべて忘れる天上の人となつたのだ。たゞこの白菊に自分の全生命をうちこめて一切を忘れうる幸福よ。

しら菊のまくらに近くかをるよは夢もいく世の秋かへぬらん。

夜の床にさへ菊の香が漂うて来る。この香をかぎ其の姿を夢みて眠る今宵、夢も永遠の國を辿るであらう。

ふけゆく秋にしたがつて紅葉が燃え出る頃になつた。

山のゐのあかくなりゆくかけみればおほふ梢はもみぢしてけり。

山の井の汲みなれた水。夏は青葉を映し秋は月影を宿す。いままた水の朱に染まつてゐる

のは梢がすでに紅葉してゐたのだ。紅葉の時が来た、其のあでやかな色、花よりも派手な姿。

しぐれゆく日ぐらし山の初もみぢあけなばいかにいろにいづらん。

冷たい時雨が降る。この夕ぐれの冷えた時雨に、山の紅葉は明日いかに染まるであらうか
色もなき時雨があの朱に木々を染める不思議さよ。しかし天工は人の見る目をさへる。

一枝もたをらばうけんとかの尾の落ばしゆるせ秋の山もり。

梅の尾の紅葉の山守よ、一枝を賜ふことは物憂くござるが、この美しき落葉は家苞に賜へや。

もみぢばのにしきの上にかけてけりとほ山姫のきりの薄ぎぬ。

霧がかゝる遠山の紅葉の上に。あの薄いベールを透して見る紅葉の薄紅の暈をもつまだら
の幕の美しさよ。

山びめは霧のとばりにいぐれて紅葉のそでやほのめかすらん。

この霧のとばりを引きめぐらして龍田姫の濃艶な姿がほの見える。陽に映ゆる美しさより

もこの麗はしさが更に風情を添へる。けれどけれど、風の憂き手がすぐこの美しきものを奪ひ去つてゆく。

大空にたが手向つるぬさならんかぜも紅葉のいろになるまで。

木枯が吹いて来るはらくと地を吹き山を吹く。大空には空を紅に染むばかり紅葉が散つてゐる。

白雲のあは田の山のしたもみぢかつちりそめて秋ぞかなしき。

栗田の山の紅葉も散りそめて来た。散行くことは淋しい。それに秋である。一年のあと幾月かもなくなつた。過ぎ行くことの侘しさ。事後の悲しさ、紅葉散りし後は何が残されてゐるか。唯淋しい悲しみのみ。

とどむべき人もあらしに紅葉はなかばちりゆく白川の里

散りゆくものを止めて呉れる人もない。あの激しい嵐に美しかつた紅葉は半ば散つていつた。白川の里に秋が闊けてゆく。

五

紅葉散つたのちの秋は唯だ蕭條として寂びしい。山の木の葉は落ち田の稲は刈り盡され野への草は枯れてゆく。天地は俄かに廣さを増したやうに思はれる。ありしものが去つた後のさびしさと、落ちつかぬ廣さが残されてゐる。上べを飾つたものゝ剝落が古寺に見るやうな悲哀を感じしめる。

わが庭のはゝその紅葉ほろく一葉づゝちる秋の夕暮。

楓葉のみが散るのでない 柞の紅葉も一葉一葉が落葉してゆく。赤い秋の夕日がそれに映えてゐる。

荊果し山田の秋のわかれ路にのこるそほづの影ぞさびしき。

刈り盡した山田の土が黒々として展がつてゐる。土の色の澁い寂しさ。田の畔の細路ははつきりとくねつてゐる。其の別れ路にぼつねんと秋の名残のそほづが立つてゐる。侘しく辻の古碑のやうに。

露わけて小田のくろみち朝ゆけばこゝらとびかふいなごまるかな。

田の畔ほとりの路を朝露に濡ぬれながら歩めば、夥おほいしい蝗いなごが飛び散つてゆく。老ひさらばひた色褪あせた其の姿に、次第に水の絶たえゆく轍わだちの跡の溜たまりに住む魚を思はせる。やがては枯草に交つて其の醜みにくい骸むくろを横たへるであらう。あはれいなごまるよ。

○ 軒ちかき萩が花妻したひ来てをじか鳴なり秋の山ざと。

山を住家すまかとして峯より峯、谷より谷へとわたりゆく掉鹿さしかも次第に麓の里に近づいて来る。山にも冷たい晩秋が来て麓の野への賑はひを戀ふのであらう。庵の軒近く淋しく鳴くやうになつた。

○ たゞならず聞なされけり尾花ちる秋の野でらの入相のかね。

秋の野の枯野を亘つて来る野寺の入相の鐘も、散る尾花の暮れゆく秋には、一入の淋しさをこめて胸にしみ入るやうに響いて来る。諸行無常しよぎやうむじやうの響、是生滅法ぜしやうめつぽうの音。

○ 空は雁かりくさには虫のなくこゑになみだの露のむすぼほれつゝ。

空には雁かりが啼く草には虫が鳴く。次第に其の聲が悲しみを増してゆく。つい抓つかされてとめ

どなく涙が流れて来る。晩秋の佗しさ。

○ けれども其の涙の中にも晩秋の悦びもある。

○ ばらばらとおつる木のはにまじりきて栗のみひとり土に聲あり。

落葉のはら／＼と静かに散りゆくのに交つてばら／＼と強い音をたて、土に落ちくる栗。一切のものが寂然じやくぜんとしてひそみかへつてゐる時に、物を驚かすやうに落ちて来る落栗おちくりの音。

○ 唯そのみが地上に飮こぼして、四邊あたりの静謐せいひつを破つて呉れる。この音を聞けば、

○ 紅葉ばのなかにまじりて山ぐりのゑみてこぼるゝ秋は來にけり。

山栗がぼつかりとあの愛嬌のある口を開いて、こぼれ落ちる秋がどんなにまたれてゐたか日がな一日山に入つて栗拾ふ楽しい時が尼に與へられたのである。拾ふことの嬉しさ、手籠てかごに盛ることの嬉しさ。其の味の嬉しさ。

○ 栗ひろふうなゐはなりにことづけてさけかはせまし秋の山里。

栗拾に友達となつた山村の子等に、ことづけて酒を求めやう。山里の庵の生活は秋こそ豊かである。

栗の音もたえるやうになれば秋も終期に近づいてゆく。

六

村雨が降つて来る時雨がする。

夕づく日入江の松にかげろひてなごりさびしき秋のむらさめ。

村雨が降つて来た。松の膚もしとどに濡れてゐる。其の濡れそぼつた黒い膚に赤い入日が映つてまぶしい。名残を惜しむやうに光を投げてやがてとつぷりと西山に春いてゆくであらう夕日。

雨そゞぐ秋の山田の夕ぐれは案山子の外に立人もなし。

しぶきながら霧をたてこめて冷たい雨が降つてゐる。日は暮れ暮れになつてゐる。夕暗は視界を狭めてゐる。人の子一人も通らない。見渡せば唯だ案山子のみ野の守の勇士のやうに立つてゐる。

秋風は次第に冷えてゆく。

つゆに吹真くすが原の秋のかぜうらがなくもおもほゆる哉。

露の上をさらつて吹いて来る秋の風。其の音を聞いてさへ悲しさを添へる。

身にしみて秋のわかれのをしほ山もみぢかつ散こがらしの風。

木枯と云ふ名さへ凄^{まじ}い秋の末吹く風が、秋との別れを惜しむ心を更に淋しくする。

吹わたるあらしのすゑの早瀬川ながるゝみをのよどむ瀬もなし。

川の流れの上を吹く嵐の早きこと。船路に當る深みさへ淀む瀬もなく押流されてゆく。一陣又一陣波を蹴立てゝゆくのが見えてゐる。淋い恹しい秋の川風。

はら／＼と岸べよりちる柳葉にながれあらそふ水の落あゆ。

はら／＼と岸より散りゆく柳の葉に先を争ふやうに落ちてゆく落あゆの疾い姿が、水をすかして見えてゐる。葉も落ちる鮎も落ちてゆく。うらめしき秋を吹き落す木枯の風よ。

すきかげに見し人もなしふるすだれあみめはづれて秋風ぞふく。

簾の命も近づいた。其の透影より人を見たこともないのに、簾の編目が外れて冷たい秋風

が容赦もなく吹込んで来る。

○山里の軒の一本の初しほに秋の日かずぞかぞへられける。

軒の木の一本にははや白い霜がおき出した。秋はいよ／＼断末魔に近づいた。冬が今一息と待つてもゐやう。

なにごとを思ふともなきみにもなほあやしく袖のぬるゝ秋哉。

故知らぬ涙、故知らぬ悲しみの涙が、頬を傳うて来る。秋は悲しい、故知らず佗しい。

○月清みかきねにすだく虫の名のすゞる寒くも夜や更ぬらん。

月も凍てるやうに物凄く冴えてゐる。鈴虫の音もめつきり寒くなつた。夜が更けたのであらう秋も更けたのだ。

四時の露に濡るる 一冬一 (四)

一

冬が来る。其處には陰鬱な豫感が冷たい冬の感じと共に襲つて来る。外に張つた心は次第に内に向つてゆく。

○山ざとのかけひの水にながれきてきのふの秋を見するもみぢば。

秋は去つていつた。笕の水は次第に冷たさを加へてゆく。其の水に流れて来る紅葉には秋の名残は止まつてゐやうけれど、紅葉の流れるごとく秋は流れてゐたのだ。

みついつゝおち残りたる山がきのこすゑに秋のいろを見るかな。

葉の落ちた山柿のまばらな枝には落ち残つた少しの柿が艶を失つて残つてゐる。秋はそこに萎びて残つてゐるが、其のまばらな裸の枝には冬の便が讀まれるではないか。

こがらしにふけゆくものは冬のくるあしたの原のこのはなりけり。

木枯が蕭々と吹いて、木の葉は容赦なく散つて行く。冬の來たことは其の落ちる木の葉の音にも響いてゐる。

おきていにし秋の形見のつゆもけさ霜になりゆく淺茅生の宿。

秋を象徴する露よ。其の露さへけさは霜となりかはつてゐる。秋の形見もも早や一つ一つ無くなつてゆくのが淋しい。

冬のくるあしたの原のあさぢふにむすぶ寒けき宿の初花。

草原の初霜の寒い白い色。冬の先觸の霜が朝ごとに枯残つた草を染めてゆく。

冬の景物の時雨が時に降つて來る。秋の末に紅葉を染めるために降つて來る初時雨は楽しいものであつた。

そめあへぬもみぢのかけに待つてけふはうれしき初時雨かな。

紅葉の色づくを待つ頃の時雨には悦ばしき眸を其の雨に瞞めて、紅葉の木蔭に待ちつけたこともあつた。又た

うらがるゝ淺茅の末にひろばかり日かけ残りてふる時雨かな。

俄かに曇つて時雨れて來る雨に、冬枯の原は一時に濡れて色が變つてゆく。其の濡色の草原に雲を洩れた日射が一ひらばかり残つてゐる。時雨の面白さが具に其處にもあつた。けれど冬が來て冷たい時雨が降出すやうになるとしみんと時雨の侘しさを感ぜさせて來る。

紅のあくとしもなくめづるまに風のしぐれとちる木の葉哉。

柿葉、柞の葉、紅葉などの紅葉をあくこと知らず眺めてゐたのに、風を伴ふた時雨と共に無残にも散つてゆく。

はらくと一葉づゝちる桐のはのこりすくなくふる時雨かな。

枯々になつた桐の葉が一葉又一葉日々に落ちてゆく。残り少なくなつた桐の木に時雨が冷たく降つてゐる。

入相のかねの音羽の山おろしはげしくふきてふる時雨かな。

山嵐の風がはげしく枝を鳴らして吹いてゐる。其の風に時雨が狂つてゐる。山寺の鐘の音もとだえがちに濡れて聞えて來る。

うづみ火のきゆるをときとねざめせしあかつき寒くふる時雨かな。

埋火うづみかが消えていつた。まだ曉あかつきの早き寢覺めに聞けば、外から寒い時雨の音が聞こえて来る。

むら時雨まなくしふればわがかどにぬれてそぼづが名にぞ立ける。

庵の前のそぼづに時雨が引切りなしにふりつゞいてゐる。ぐつしよりと上邊うへを濡らしたそぼづ。そぼづの名に相應あははしくづぶぬれたまゝ立つてゐる。

落葉。落葉も亦た冬の風情ふせいになくはならぬ。

山風やまかぜにこの葉みだれて古寺のかきねに薄き夕づく日かな。

夕の薄い日暮の光が黄ろく弱く照らしてゐる。古寺の垣根には嵐に誘はれた落葉が散亂さんらんとしてゐる。淋しい夕暮の一時。

もみぢばを川のこなたに吹よせて山は嵐の音のみぞする。

嵐の音が山をどよもす。この嵐に吹よせられな水面の落葉は此方の岸に片寄つてゐる。風は引切りなしに漣さざなみを立てゝゐる。冬の日の山のある時。

散積さんせきるこのはの山を隔へだてていとどうき世にとほざかりゆく。

散積つた木の葉の山。木の葉はまことに我心の塵であつた。心の塵を掃淨めて、それをこの世の隔へだてとして、塵なき彼方の世界に次第に遠ざかつてゆく、我が庵の心の生活はたのもし。

そめくし紅葉も今はちりはてゝくまなき枝にかゝる月影。

我心を捉へた浮世の塵の紅葉もすつかり散つていつた。くまなき枝にまんまるい冴えた月がかゝつてゐる。其の月の如く我が心も澄んでゆく。いつまでもかくあれかし。

しもがれてくるみし果ぞ哀なるいづらねよげに見えし若草。

木々は落葉していつた。落葉せぬ野への草原はすべて黒く冬枯れてしまつた。夏には美しい寝よげな若草であつたのに。野べも老おきなてゆく我れも老いてゆく。

おく霜の匂ひもそひてあさぢふに一本ばかりのこるしらぎく。

庭の草原に一本の白菊が霜を被かぶつて淋しげに残つてゐる。其の菊もやがては枯れてゆくであらう。

○冬ばたの大根おほねのくきに霜さえて朝戸出さむし岡崎の里。

冬ばたけの大根のくきに霜が白く置いてゐる。岡崎の里の朝戸出の寒いこと。朝毎置く霜はいよ／＼冬の冴さえてゆくことを示してゐる。朝の霜と共に冴えゆくものは夜の寒月である。あの白いましらの齒を思はせる白い月。

霜かとしてはらへど白きさむしろは窓もる月の影にざりける。

窓洩る月か霜かと紛れて白い。白い冴えた月が其の白い影を落してゐるのである。この冬の月は河端に眺められる時更に寒さを加へる。

よもすがら吹さらしたる河風にしらけて寒き有明の月。

夜をこめて吹きすさんだ木枯の冷たい河風にさらされて有明の月の殊に白いことよ。

かも河の霜よの月はよるもなほ布さらすかと見渡されけり。

賀茂川の霜よの月は夜もなほ布を晒さらすかと思えるまで磧かきを白く照らしてゐる。ぞつとする

寒さである。

かぜ寒きしはすの月のかつら川かげさへむせぶせの岩波。

臘月ろうげつにもなつた。風は身に泌しみみて寒い。皎々と冴える月は氷の如く桂川かつらかはの河床を照らしてゐる。瀬々の白波しらなみはいかにも寒さにむせんで居るやうである。身顛みざるひする寒さを感じる。

霜が雪の溫和おとなしい娘であるならば、雪の亂暴な悴は霰つよである。勇敢に小氣味よく礫つよを投げて來る。

○こがらしの吹かたまけし柴の戸をさしもひまなくうつ霰あられかな。

木枯によつて吹き歪ゆがめられた柴の戸に忙しく霰が打ちつけてゐる。何を小癩かなと云はんばかりに。

○山ざとのあやしあやしのまどの紙さうじ風のつぶてとうつ霰あられかな。

山里の庵の貧しい紙障子に、風の礫つよのやうに霰が打ちつけて來る。今にも破れさうである。外の空の怒が紙を透して窺うかがはれる。

霜がれのまくすがうへにはらくときほふ霰の音の寒けさ。

霜枯れた眞葛の堅い葉の上をばらくと音を競ひ降つける霰の音の寒さ。月の冴えた音の響が冬の冴えを思はせる。

たび人のかづく一重の檜笠うちぬくばかり降あられかな。

檜笠の上に降りかゝる霰。薄い笠を貫くやうに強くたく音、四方に散る白い小玉。けれど弱いものには強く響くけれども強いものには弱い霰である。

舟ばたにかぜの礫とうちつけて水にはかなき玉あられかな。

弾丸のやうに飛んで来て舟ばたに當つてゐる。厚い舟舷につきつけて拍子のぬけた霰は軽く水に解けてゆく。泡のやうに。

雪が降つて来る。冬に與へられた天上の贈物六つの花が訪れて来る。

はきよせし紅葉がうへにふりながらうづみもはてぬ今朝の雪哉。

初雪だ、ほんの少しの雪が、雪の先觸として地上に見舞ふたのだ。掃きよせた葉の上に其

れさへ覆ひもはてず、色を淡くするやうに氣色ばかりの雪が降りたまつた。

はつ雪のよろしきほどにふりやみて秋にもにたる花芒かな。

一しきり降つた雪はすぐやんだ。降ることに未だ馴れないやうに。處女のやうなはにかみをもつて、少し積つた。芒の上には秋のやうに白い花が咲いてゐる。

川風に散るかと思ればかつ消てめにもたまらぬ水の泡雪。

川風に散るまもあらず水に入る眼にもとまらぬ淡い水の上の雪。消なば消ぬがの雪の面白さ。しかし處女のはにかみはやがて消えてゆく。

かれ残るはたのわた木に積雪のきえずばとりて糸にひかまし。

枯れ残つた畑の綿木に綿がふいたやうに美しく雪が降り積んだ。綿ならましかば紡ぎもしやうに。

しら雪のまきのこすゑにつもるなりねたる夜のまにふりやしつらん。

朝に開けて驚く雪景色。槇の梢には枝もたわゝに雪が積つてゐる。音なく降りゆく雪がこの夜の中に人目はどかつて降つたのでもあらうか。

よもすがらきほふ嵐の音羽山うちしづまりてつもる白雪。

終夜山を吹いた嵐は曉方に次第に静まつていつた。静まりかへつたかと思へば、白雪が嵐に代つてしん／＼と降積んでゆく、空は暗く雪は白く。

よもすがら啼きし狐のあとならでくまこそなけれ雪の山里。

餌を獵つて里近く啼く狐の聲、夜をこめて淋しく聞こえて来る。朝になるにしたがつて其の聲は遠ざかつてゆく。戶外は物音一つせない。雪が降つてゐたのである。終夜降つた雪は山も野も家も村も白銀の一色に塗りつぶしてゐて、唯だ狐の足跡のみが點々と残されてゐる。雪の山里の朝の景色。

○山がらす白き鳥かともがふまではぶきもあへすつもる雪哉。

雪は次第に深くなつた。山がらすの羽をも染めて白く積つてゆく。雪もかくなれば苦しみの一つとなる。

三

陰鬱なる冬の最中になつた。晴れやらぬどんよりとした空の下の底冷えの苦痛。晴れた日の寒風の叫聲。家居に於てのみ冬を賸める悒鬱な日がやつて來た。

かげ薄き冬の日かげの干菜寺さやぐも寒し野邊の夕風。

薄い寒い夕日。黄ろい夕日が貧しい干菜寺を照らしてゐる。夕風が寒く其の干菜にさゝやいてゐる。貧しい寒い冷たい冬の夕暮れ時。

○かばかりの浮世なりけりこがらしに落栗ひろひけふもくらしつ。

尼の冬の味氣ない生活。木枯が落してくれた栗をひろつて其日のたつきとする。浮世の生活のなさけなさ。生あれば生きねばならぬ人の世の悲しみが滲んでくる。

北まどの風にやれたる古すだれめもあはぬまで寒き夜半かな。

北まどにかけた古い簾は風に破れてはためいてゐる。富に見放された貧しい自分には夜の目も合はぬ寒い今宵である。

○ほしがきの軒にやせゆく山里のよあらし寒くなりけるかな。

軒につるした乾柿も次第に瘠せてゆくにしたがつて、冬は次第に其の寒冷の最中になつて

来た。この山里の夜嵐が身に沁みて寒くなつた。

毛衣のぬるゝにたへぬ子狐やみぞれ降夜を鳴明すらん。

外は霰が降つてゐるのに母親を慕ふ子狐の聲がする。この寒夜の霰まじりの雨。子狐のこげが濡れたら死にもしやうに、あの聲は母まつ淋しさと冷えにおびへながら悲しさに泣く聲である。

身をよせし尾花はかれて廣き野の霜夜の月に狐鳴なり。

尾花の家は枯果てた。家を逐はれた狐はこの霜夜の冷たい月にさすらひながら悲しく家を求めて鳴いてゆく。冬の寒夜の凄い一情景である。けれども、

うづみ火にむかへば冬をわすれ草はるのねざしぞのどけかりける。

いかに寒くとも埋火に向へば冬は忘れられてゆく。何となく春の氣分をさへ味ふことが出来る。

うづみ火に寒さわすれて寝たる夜はすみれつむ野ぞ夢に見えける。

それのみではない。暖かい埋火に寒さを忘れて寝たる夜の夢は、花さき匂ふ春の野にすみ

れつむ春の日の行樂が繪巻物のやうにくり展げられてゆく。幸福なる冬の夢よ。

五月まつ花のころよりしめおきしあへたちはなはうまくなりけり。

早くから室に圍ふておいた蜜柑は冬が来て一入甘味くなつた。夜の寢覺めに埋火の側で一人たべる時の味のよさ。夢よりも現實の幸福をつくゝ感じる。

かしのみのひとりしぬれば吹風の音づれさへぞうれしかりける。

櫛の實のやうに唯一人寝る自分にとつては冷たい冬の風でもいゝ。其の風の訪れさへ時には嬉しく思へる。淋しきものにはかゝるものさへ悦ばしい。

夕ぐれはねにこむ鳥もまたれけりこがらしさむき山かげのいほ。

夕ぐれには時にかへりくる鳥さへ待ち侘びる。友なしのこの山里の木枯の日。眞實林の鳥は尼のいゝ伴侶であつた。

年は暮れてゆく。一年は夢の間の束の間に暮れてゆく。年は暮れ終らぬに氣の早い梅は春を傳へる。

春ちかきけしきばかりは匂ふなりまだ冬こもるまどの梅がえ。

冬木ながら蕾も膨んで居る。何となき春の香が漂うてゐるこの窓の梅の一本に暮れゆく年の悲しさと来る春の日の悦びとが交される。

けふふりしゆきにきほひてわが宿のふゆ木の梅ははなさきにけり。

雪がふるのに雪と競ふて咲く梅よ。年忘れのこの梅が枝に冬と春との結び目が偲ばれる。

一とせは夢ののをささ霜をへて一よ二よとなりけるかな。

愈々年の瀬がおし迫つてきた。

きぬぎぬのそでのわかれのそれならでをしむをいそぐとしのくれ哉。

後朝の艶なわかれではないが惜しむのに急ぐ年の暮れの侘しさ。

をしめども今年のけふもくれ竹のひとよの中にあらたまらん。

惜しむともこの今宵一夜のうちに年が更まつて来る年の春が待つであらう。

うちはやす豆こそなけれまめやかに心のうちのおにやらひせん。

年越の豆もないこの庵住の貧生活。豆なけれどまめやかに心のうちの鬼やらひをしやう。

その鬼やらひこそ、我がために相應しいものであらう。

清 貧 安 住

四時の露に濡るゝ蓮月尼。かうした生活が如何にして彼女に求められたであらうか。一切の人間的な社會の法則から脱れて四時の自然の中に自己を見出し得た生活。自然の心を我が心として自然を自己に映し、自己を自然の中に没入する生活。かゝる生活がいかにして彼女に選ばれたか。

この生活が彼女に選ばれるまでには人として耐え得られない忍苦の生活が彼女によつてなされて来たことは既に述べつくした。親しきものと次々に離れゆく人生の慘苦を嘗めつくして、唯の女性であるならば當然死をさへ求めるであらう忍従の生活を敢てして、やつとこゝまで漕ぎつけてきたのであつた。親しきものとの別れの上にやゝもすれば頭路に迷はねばならぬ貧しき者のみがつ生活苦の洗禮をも受けて、彼女は何處に行かうと其の道に迷つたに違ひ

なり。

けれども彼女をこの迷路から救ひ得たものは彼女がもつ明らかな理性と、冴えきつた感情と、強き意志とであつたことは云ふまでもない。如何なる惨苦に遭遇しても少しも其の理性を失はなかつたこと、一難來るごとに寧ろ逆に深められてゆく感情の純化と、女性には珍らしい何物にも動かされない意志の健かさ、かゝるものが彼女をして其の道を誤らしめなかつたのみか、この句はしき自然人としての生活を彼女に持來らしめたのであつた。

世の敗残者達はやゝもすると恵まれない地位を嘆き與へられない物質を悲しんでこの世を逃避しやうとする。そして人遠き世の幸福を求めがちであつて、自然に交はることによつて世を遁れ得たと心得へる。しかしかゝる逃避行は決して正しいものではなく、自然と眞實に交り得たのではない。世を避け人を離るゝことによつて及びなき身の恥を隠し花鳥風月の蔭に眩しき人の世の光を避けてゐるに過ぎない。ともすれば白眼をもつて世を僻みがちである。

蓮月尼はいかにも一人の世の敗残者であつた。けれども彼女は、自ら求めて身の恥を隠すために山林には入らなかつた。彼女に與へられなかつた幸福彼女に與へられなかつた物質は

勿論彼女を不幸のどん底におしやつたけれども、其れは人に與へられた運命と云ふものであつた。自分を早くから覺つてゐた。自分が世にある一人の女性として、其の正しき道を少しも外さなかつたにもかゝらず、彼女には當然享けなければならぬ運命としてかゝる不幸が、彼女を苛むのであることを彼女の明敏なる理性は其れを見ぬいてゐた。だから彼女には少しも世を羨むこともなければ、世を僻む必要もなかつた。故に其のために世を遁れ風雲に交はると云ふことも考へられはしなかつたのである。

然るに彼女が其の生涯をつくして風雲を友とし花鳥と起居を共にする自然兒となり得たのは何故であらうか。其れは彼女が當然執らねばならぬ唯一つの道であつたからである。親しきものが次々に去つてゆく。兄も去り、母も去り、子も去り、父も去つた。しかも彼女はもとより生れながらにして天涯の孤客であつた。親しきものに飢えた彼女の心は、親しきものゝ愛に戀ひ焦れてゐるのである。親しきものを求める熾烈なる愛は、次第に擴げられていつた。人と人の世に對する愛より更に自然の愛に迄深められていつたと云ふことが出来る。雨につけ風につけ雲につけ花につけ、其等がもつ至純なる心を、自己の至純な心と結びつけて

其處に彼女の至純なる感情が熱愛を感じたに違ひはなかつた。

物質に恵まれないものは物質に飢えてゐるものである。蓮月尼も、求めても求めても與へられない物質の乏しさに泣いて來た一人の女性であつた。恵まれない物質に苛まれて物質の苛酷なる責苦に、彼女はいかに喘いだであらうか。しかしこのためにも彼女の理性は眩むことはなかつた。彼女の胸には眞實の富が考へられた、物質を多く所有するものが富者であり物質を少しく所有するものが貧者であると云ふ人の世の法則は彼女の心を眩ますことはなかつた。眞實に於てはかゝる法則は間違つてゐた。眞實の富はかゝるものでもなく眞實の貧もかゝるものではなかつた。彼女に於ては物質は少くとも其れに満足するものが富者であり、いかに物質に富めりとも其れに充足し能はぬものは貧者であつた。故に彼女が欲した富が物質の貧しき故に却つて裕かに得られることの幸福をしみ／＼と味ふことが出来るやうになつた。

彼女の清貧安住の精神はかうして彼女の不斷の精進によつて、貧しき中に富み、人の世を去つて自然の故郷に遊行せしむるやうになつたのである。其處には親しきものとの別離は忘

れられ、貧しき乏しき生活は心の富によつて賑はつていつた。小さな庵は心のまゝに占められ、衣食の恥は遠く彼方に去つた。心安き日々が、この世を我世とぞ思ふ道長の心よりも饒かに暮されていつた。山林に交はりもし、野べに安住し、京の中の生活を厭ふこともなかつた。心は浮雲の如く自在に身は流水の如く自由であつた。唯この生活を亂す俗物の出入を厭ふてゐたに過ぎなかつた。

二

庵住の生活は次第に彼女に落着いて來た。破れた庵の有様が彼女の乏しい衣食と共にいかにも蓮月尼の生活に相應しいものとなつて來た。彼女の心もそれに均しく澄んで來た。埴をひねつて衣食をする氣樂な生活はいやが上にも彼女を一人の自然兒として育てゆくのであつた。

西行や芭蕉の心は求めずとも其處に培はれてゆくのであつた。

浮雲のこゝにかしこにたゞよふも消せぬほどのすさびなりけり

洵に浮雲の安き自由な心を以つて心のまゝに其の庵を移してゆくのである。衣食に心を縛らるゝことがなかつたやうに家に身を引かるゝこともなかつた。住む處として安住の家居ならぬはなかつた。行雲流水の出家の生活がいとも自在に行はれていつたのであつた。唯命のあらんかぎり浮草の如く行く雲の如く自由の一路をさすらひゆく漂泊の詩人であつた。

つゆのみをたゞかりそめにおかんとて草ひきむすぶ山のしたかけ。

つゆのみをたゞかりそめておかんと云ふ。消なば消ぬがの露の命である。命に塵ほどの執著さへ持つのではない。消なば消ぬがに一切をまかしてゐるのである。唯山かげの日蔭の草葉の上にかすかに止まる一つの露として、其の透徹なる淨き一生を送ればいゝのである。名聞を求め利養を獵るのではない。白い丸い明玉の命を草葉の緑に染めながら、折からの日射しに七寶に輝く唯一つの露であればいゝ。

かたちこそまがりてみゆれ山賤が心とがまはとぎすましてん。

姿こそ人目を恥づる乞食にも均しいものではあつても一人の自然兒として心を磨ぐことは少しも忘れるものではない。尼は一人の山人である。山林を友とし野草を褥とする。土に塗

れ露に濡れた衣物は見るかげもないみすぼらしいものではあるが、雲を宿し花に染めた心は自然の啓示に饒かに磨かれてゆくことは云ふまでもない。彼女の魂に響く自然の聲は天の啓示の如く地上に淨らかに傳へられてゆく。

なにごとをなすとはなしにたはむれにかきながしたる水莖のあと。

尼のこの生活から流れ出づる歌は作爲の歌でないことは勿論である。自己の心魂を自然の心に滲透して、其處から生れた自然の聲の再現に他ならなかつた。なにごとをなすとはなしにである。唯湧いて來るのである。たはむれにである。この自然の心に遊戯するのである。其の遊戯が筆に傳はりかきながされて歌と云ふ水莖のあとを世に残してゆくのであつた。自然の詩人蓮月尼の姿が其處にくつきりと示されて來る。

とはれては何とこたへむはねつるべなはなきものときみてこそしれ

詩人として名を求めることは勿論其の名の傳はることさへ彼女の厭ふところであつた。唯だかりの名に捉はるゝことなく其の實を汲まれよといふ。汲めども汲めども盡きることのない詩魂より湧き出づる詩情は、唯だ其れを汲むことによつて自然の聲を聞け、無聲の魂を汲

めよと云ふ。

むぐらだに八重はたのます世の中をひとへにかりの宿とおもへば。

八重葎さへ八重に誇つてゐる。しかし自分は八重の多きを願ふのではない。唯ひとへに人の世の常なきを思ひつゝこの草深き庵にさへ何の愛着をも止めるものではない。人としてのいとなみは露の如く唯かりそめに命をつなぐに過ぎない。

露にふくかぜまつほどをいのちにてむすびもとめぬ草のいほかな。

洵に露にふく風まつほどを命にてである。風來りなば人の世の絆は忽ち解けてゆくであらう。解けば解くがにまかす身は何の物思ふことはない。唯かりそめのこの庵が、人としての尼を雨露の下にかばつて呉れる。ほんに住居は雨露を凌げばいゝのであつた。

さそふ水ありとはなしに浮草のながれてわたる身こそやすけれ。

尼には何の作爲もない。せつせと稼ぐのではない。唯身のいとなみは埴をひねることのみであつた。それも唯口すぎのはしになればいゝのであつた。其れによつて生活をたてゝゆくと云ふ強い意志はなかつた。さそふ水はいづくにもなかつた。生活をさへるに充分なてだ

てはなかつたけれども、いつとはなしに流れゆく浮草のやうに身すぎがなされてゆく洵に浮草の身の心やすさよ。

三

かばかりの草のいほりも結ばじをあはれ雨つゆいとほざりせば。

自然を生命とする尼には庵さへも一つの邪魔物であつた。けれども姿のある上はやはり雨露をしのがねばならなかつた。人としての悲しみがそこにある。自然の胸に生き自然の胸を披くものは野べに交はり山林に姿をかくすのであつたが、やはり其處に僅かに雨露をしのぐ庵が必要であつた。庵は住の最少限度のものであつた。柴を結べば一つの庵となり、柴を解けばもとの野原となる。かゝる庵こそ尼の生活を支持する上にはどうしても必要であつた。けれども尼は其の庵の生活に次第に落着くやうになつた。

山水もすめば住るゝものならし垣ねの大根のきのいけ栗。

京の家に一人の主婦として、又父と二人の僧庵生活をして居た身が、ふつと山里に入るこ

とは何かにつけて不便であり、淋しくもあつた。しかし山里に落付いて見ると其處には何とも云へぬ心安さがあつた。食は貧しいけれども大根があり、栗があつた。かゝる粗野なるものもつ淡泊な味には風雲を愛するものには無くてはならぬ味のよさがあつた。山里には四時の食に飢えることはなかつた。土筆も蕨も根芹もタラの芽も栗も椎も茸も豊かであつた。四時折々に次々現はれて来るこれ等のものによつて四時の露に濡るゝ彼女が愛する四時の香を嗅ぐことが出来たし、四時の味を味ふことが出来るのであつた。

山ざとは松のこゑのみ聞なれて風ふかぬ日はさびしかりけり。

淋しい山の松風の音も今は其の音を聞かぬ日は淋しくなつて来た。春は鳥の音を聞き夏は夕立の音をきく。秋の蕭條たる時にも、又冬の暗黙には、この松風が平常の友でなくてはならなくなつた。風の来るごとに波の音を立てゝ廣い大海に向つてゐる心地がする。或は細い谷川のせゝらぎの音を傳へることもある。友なき身には何よりの伴侶であつた。

瀧の音みねのあらしも聞なれて朝いするまで成にけるかな

瀧の音や峰の嵐が、ともすれば安いぬむりを亂しがちであつた初心の頃は過ぎ去つた。今

ではこの伴奏によつて子守歌につれて眠りゆく嬰兒のやうに心地よき朝寝がせられるやうになつた。自然の安住の魂が自然と溶け合ふことによつて深められていつたのである。

しづかなるねざめのとこに音づれて心のちりをはらふやま風。

氣持よき山風の伴奏によつて朝寝するのみではない、其の嵐の音によつて次第に心のちりの拂はれゆくをさへ感ずるやうになつた。人の世のいさこさは或は又浮世の善悪は、かゝる自然の聲によつて洗はれなければ其の垢のおちる時はないであらう。

吹わたる松のあらしに春秋をきゝわくばかりなるゝ山里。

四時に吹く松のあらしの聲音によつて春秋のけぢめさへ聞わけるやうになつた。春の風の音、夏の微風のわたり、秋の野方、冬の木枯は、各々春秋を傳へるものであるが又同時に春秋の匂ひを乗せて来る。松の琴線に觸るゝ時。それがいかに四時を奏でるであらうか。其の微妙な音色に尼は聞きとれるのであつた。風雲に心を澄ます生活はかくて四時の交替の微妙な動きにさへ心をつくすものであつた。

けれども唯一つ尼の心に残るものは、やはり一人の人としての人の戀しさであつた。彼女

の戀は人への戀であつた。

山里に浮世いとはん友もがなむなしくすぎし昔かたらん。

この山里のかくれ家に、志を同じうする友が欲しかつた。人遠き所に、森の木蔭の深き所に、鳥の音をきき、風の聲をいつくしみながら過ぎさつた過去の思出を語ることが彼女にいかん心ゆくことであつたか。やはり彼女も一人の淋しい女性であつた。

こぬ人を待よのむねのあつぶすまひきかづけどもねられざりけり。

來いと約束したわけではない。約束もなしに來るであらう友の心待ちに褥ねに顔を埋めても眼はしん／＼と冴えゆくばかりであつた。微かな物の音にさへ聞入る冬の夜の淋しさが浮んで來る。

こぬ人をまつの梢に月は入てこひをせめぐる風の音かな

夜は更けた松の枝にかゝつてゐた月も暮れていつた。けれども友はたうとうやつて來る様子もない。風の音が人戀しさの戀心をいらだてる。悪らしい松風の音よ。

こぬ人をまつ吹風のみにしみてすゞろに物のおもはるゝかな

待てど暮せど友は來ず、松風のみが身にしみて深い物思ひに落膽の胸をくしけづる。しがなき人を待つ夜のじれつたさ。

こぬ人をまつ板屋にふる霰おもひくだけていとぞねられね。

霰がばら／＼と板屋の屋根を迸しる。靜かな心をそよるやうにまつ人は未だ訪れもなし來るか來るかと思ひ亂れて眠りも安からず。

こぬ人をまつはつら／＼の長き夜をむすぼほれつゝあかしつるかな。

つら／＼する寒き夜冬の夜長の寢覺めがちな時。來ぬ人はついに來らず。友待つ思ひに結ぼほれつゝ、長の一夜をあかしてしまつた。長かりし夜の長き思ひより友待つ思ひのいかに長かりしか。

こぬ人をまぢかね山のよぶこどりなく／＼春もくれんとすらん。

いかに呼べども友は來ぬ。まぢかねて／＼心焦るゝ思をいかにすべきであるか。弱きものよ女性よ唯だ泣くより他にすべは無いであらう。待侘びつゝ春も暮れてゆく、人生の春秋もかくして暮れて行くであらう。

寂しき尼の心を慰むものは時折り訪ねて来る友であつたことは云ふ迄もない。心の親しき觸れを悦ぶ友の來訪は時たまではあつたが尼の心を慰めることは少くなかつた。しかし尼の心の慰めはそれよりも先づ旅であつたと云ふことが出来るであらう。淋しくて淋しくて仕方がない時、又は心の浮立つ時には家をすて、心のまゝに旅ゆくのであつた。花につけ紅葉につけ洛中洛外の旅は云ふに及ばず京近郊のさすらひは尼の茶飯事であつた。旅装を整へることもせず匆々として家を立出で、歩みゆくのであつた。

けれどもかゝる心安き旅のみではない。遠く各地の歌枕を求め志士の舊跡にさへ足跡をとめてゐるのであつた。嵐山嵯峨野の旅は勿論山城の所々には其の足跡はいづくにも停められてゐた。

うめづ川うきて流るゝ瀬をみれば末くむ里ぞうらやまれぬる
梅津あたりの梅林にさすらつた折であらう

身にしみて秋のわかれのをしほ山もみぢかつ散こがらしの風
ゆく春にたちおくれじとこゝろとくちるかをしほの山ざくら花
なれきつる春やをしほの山ざくら青葉がくれにうぐひすの鳴

小鹽山への紅葉と櫻狩の折が偲ばれる。

一枝もたをらばうけんとかの尾の落ばはゆるせ秋の山もり

三尾の中梅尾の紅葉を詠んでゐる。

このめつむ野べにおちくる一聲はよをうぢ山のほとゝぎす哉
さし登る朝日の山もふもとは猶夜をのこす宇治の河霧
かをりよきうぢの新茶にめで初し人の昔ぞ汲てしらるゝ
汲揚て世にこそめづれ山吹の花の香ふかきうぢの川水
ここを瀬ときそひわたりし武士の名にながれたるうぢの川水
かゞり火のかげのくだくる心地してう川の末にとぶほたるかな
宇治川にひとむら雪のながるゝとみしは柴つむ船にぞありける

城南ちやうなんの一景勝、宇治の四季が詠まれてゐる。夏のほととぎす、新茶、螢、秋の霧、冬の柴船ふねの雪、ともに宇治の景物ならぬはない。新茶を汲んでほととぎすを聞く風流。鶺鴒川に螢の夏の夜の美しさ。雪をつみつゝ下りゆく名物柴船の早き姿。とりどりに麗はしい。

とりわたる水にそひてはるのよの月もなぐるゝ井堤いづみの玉川

たびまぐらいめもくだけはらゝとちるかあられの玉川の里

井手いづでの玉川が詠まれてゐる山吹と蛙の名所として頻繁ひんぱんな大和路やまとぢへの旅には是非とも通らねばならん名所である。

日はくれぬやどかせ山のほととぎす明日は都へつれて出まし
鹿脊山かせやまの詠。

いちじるき神のみいづの雄徳山おとどくやましらべも高きみねの松かぜ

川ぞひの垣ねつゞきにうの花のなみかけわたすはしもとの里

男山おとこやまの石清水いししみづ八幡宮やうの神風かみかぜを聞きながら山を仰ぎつゝ西すればすぐ橋本の里である。淀川べりの一勝地で大阪への舟旅の道すがら白い軒並のきなみの卯花うづはなに興が湧いたであらう。

五

近江おみへは近い故か常に旅をつゞけてゐた。

人しれず行あふ坂はゆるされて立名ばかりの關守もがな

あふさかの小關をゆけば長等山ながらやま三井寺みやうわたりなくほととぎす

逢阪の關を越ゆれば志賀しがの古都が偲しのばれる。

志賀山やむかしの花の面影も朧おぼろにかぶはるのよの月

うかれこしはるのひかりの長等山ながらやま花にかすめるかねの音かな。

志賀山や花のしら雪ははらと古き都のはるぞくれゆく。

たづねこしさくらは雪とふる郷の志賀山でらのはるの夕ぐれ。

朝風にうばらかをりて時鳥なくや卯月の志賀の山越。

花ぞの昔のあとをたづねれば秋風さむし志賀のふるさと。

はらゝと散る櫻に過ぎし古き都の面影おもかげが偲しのばれて来る。三井寺みやうでらの鐘が、古都ちやうしやうの弔鐘しやうしやうのや

うに花をわけて響いて来る。鐘の響の消えゆく彼方には碧い琵琶湖が廣く展開してゐる。近江の野が其の向ふに目路の彼方に消えて居る。

あふみのうみやそのみなとに入舟やちどのよはひをつみてきつらん。

夕ぐれのにほのうみづらみわたせば矢ばせにかゝる弓張の月。

このにほの湖の岸へには八景が數へられる。

夜もすがらあはづが原にもゆる火はきその檜原のなごりなるらん。

しほならでやくか蜺のからき世をわたる思ひのけぶりならまし。

瀬多の名物蜺汁が偲ばれる。粟津の原の鬼火を偲ぶことの物凄さ。

からさきの松のかたへに立つ雲とみゆるはしがの山ざくらかも。

あまの子がかげみしみぎは氷ゐて松風さむし志賀のからさき。

唐崎の松の春と冬とが詠まれてゐる。豪華な花の雲と、浮御堂の影さびた氷が對照せられて

すゞみぶねよするかたゝの浦風に月もゆるるゝ波のうへかな。

かぜわたるかたゝのうらの捨小舟ながれもあへず氷ゐにけり。

堅田の夏と冬である。

もののふの矢ばせわたりの時鳥弓はり月のかげに鳴なり。

矢走の歸帆が暮れて靜かにかゝる上絃の月にほとゝぎすが筋違に飛んでゆく。湖上の風が

涼しく頬をなでる。

夜あらしのつらさの果は雪と成ておきて楳たくしがらきの里。

山又山の奥、湖南の一勝區信樂の古都を詠んでゐる。

一しきり嵐の音のたかしまやあど川千鳥なみになくなり。

さどなみに月はしらみてきぬゝのあさづまあたり千鳥鳴なり。

はれまなくふる五月雨に斧の柄のくちきのそまやむなでなるらん。

湖西の勝地が數へられる高島のあど川の千鳥、浅妻船に喧しい浅妻、朽木の柚の名が歌枕

として歌人の心をくすぐる。

近江を越へて東路への旅にも上つてゐる。はるくと武藏野の奥に心をやつて旅立つたで

あらう。途中の歌が幾つも数へられる。

影高き光をいまもみかち山そのみとらしの弓張の月。

美濃のおかち山の秋月を詠んでゐる。

かどり火の影もしらみて長良川うぶねのさきの短かよの空。

美濃長良川の鵜飼を詠んでゐる。

松ともしこゑ行かたやたび人のおびたる太刀のさやの中山。

小夜の中山。

みやこにもかくや衣をうつ山心にかゝるつたのほそ道。

宇津の山邊を過行けば富士が聳えて来る。

白雲のなかばになびく富士の嶺をうづむや春の霞なるらん。

久かたの天のかはみづながれきて富士のたかねの雪となりけん。

富士のねを底にうつして田子のうらのなみくならぬ影やみるらん。

やがて箱根にかゝる。

函根山明なばふじのかげ見んとおもひし海は氷ゐにけり。

武藏野にかゝる。

むさしの尾花が末にかゝれるはたがひきすてし弓張の月。

武藏野のはては風だにゆきかねて草のはすゑにかゝる白雲。

廣々とした武藏野の野原が天際に展げられてゆく。

夏木立しげき思ひの筑波山わけまよふみの果をしらばや。

筑波山もその眼界に入つたであらう。この戀の歌がしげきに通ふてゐるけれども。

六

大和路への旅は屢々行はれてゐた。古都の風物を愛することゝ、春秋の姿を見るために、

香にめづる人にやどりをかすがのや野守がかどの梅のはつはな。

かすが野のそのはらからのこむらさき昔すみれのなごりなるらん。

早春の春日野と中春の堇の頃が麗しく浮んで来る。

そめそめし外山とやまのこ末かつちりてけふにとぢむる秋篠あきしのの里。

よなくうちにこそまさされ唐衣ころもふけ行秋篠のさと。

奈良西郊の秋篠のあたり外山の附近の秋冬の頃が浮んで来る。

石いその上かみとしをふる野はゆかりさへうす紫にさくすみれかな。

石上布留野は奈良の南郊、堇の名所としても喧しい。更に南行して大和平野の南を指せば、

いまはとてはるもはつせの山風にのこりかねたる花の白雲。

咲そめしころよりやがてこもりくや花のはつせをいのちにはして。

初瀬の晩春の景色である。

うちとけていつかは人をみわの山しるしの杉も秋風ぞ吹く。

大三輪の里。

香久山やみねの榊になびくなり風のかけたるくもの白ゆふ。

春たつとたれにききてか耳なしのやまも霞のころもきつらん。

てもふれじ若葉もわれを岡の名のさたすぎ人とあざみもぞする。

香久山、耳成山、岡の飛鳥とびのほとりの名所を詠む。更に山を越へて櫻の故郷吉野に出る。

山の端もおくもさかりのよしの山けふこそ花のもなかなりけれ。

たゝかひし太刀たちのちしほに秋ふかきもみぢに見ゆるみよしの山。

ねおろしのはらへばやがて古里のよしのは雪の花ざかりかな。

吉野川ながるゝ花のおもかげをときはにみするせぜの岩波。

吉野へは幾度も花を訪うことは出来なかつたでもあらうが、尼の心は花の春ごとに吉野に

あつたことは云ふ迄もない。

伊勢へも時に旅立つてゐる。

沖つなみ立居につれて幾たびかあこぎが浦にふるしぐれかな。

阿漕あこぎの浦に其の昔の物語を偲ぶこともあつた。

難波なにばに下つて西の國の歌枕のたびにも一人のさすらひ人のやうに幾度も旅立つてゐる。

つなでひく淀のかはぶねさむきよに雪さへつみてよを渡るらん。
淀川を下つてゆく。

川ふねのさす手ひく手を見流して月にかち行ひらかたのさと。
枚方ひらかたのつゝみを淀川ぞひに月を浴びながら舟を慰みに歩んでゆく。

かはちなるさだもはるかにすぎぬればしでの山ざきちかくなるらん。
これはかへり路の歌である。河内の蹉跎の附近。

なにはえや霞も波のそこはかとわかで更ゆくおぼろよの月。
難波なにばの春の夜の朧月の海も霞も一つになつて更けてゆく。

もしほぐさ敷つの浦の朝しもに跡をのこして立千鳥かな。
敷津しきつの浦の冬の朝。

春ごとみにみどりそひつゝ幾千代か世に住のえの松ぞ久しき。

住の江の忘れ草濱松の春げしき。

更るよの月すみのえのうらちかく初ほとゝぎす渡る一聲。

住吉すみやの浦の初夏の頃

海士あまの屋にたきほたれたる芥火わんたひのかたはらぶしぞ旅はわびしき。

天保山の淋しかりし日の旅が偲べる。

沖の風やゝしづまりて夜はふかくなる尾の松につもるしら雪。

冬の鳴尾なるを。

風そよぐ芦屋の浦にたちいでゝしばしぬまの月をみる哉。

芦屋あしやの秋。

はるばると見るめも遠きうなばらになびく帆かげや八重の汐風。

敏馬あまめあたりの海

ふるまゝに海人うらまのとまやもうづもれて須磨のうらわの雪のしろたへ。

須磨の雪。

すみなれて須磨のうらびと朝夕のみるめにもはおもはざるらん。
須磨の漁夫を思ふ。

ことのはの玉ひろはゞや秋のよの月にあかしのうらづたひして。
秋の月夜の明石にての歌、はるかに海を隔て、淡路島が眼に入る。

立かへり難波菅笠きても見ん雪おもしろき淡路島山。
淡路島の雪景色。

誰がふでのすさびにもれし影ならんゑしまの松にかすむ夜の月。
淡路繪島の春の月夜の風光。

はりまがたひがさのうらにさしつれて鯛つる小舟朝びらきせり。
播磨湯の一情景。

しかま人が手染をあながちにこゑふりたて、うらんとすらん。
飾磨の市のからん染が思ひ出される。

海を渡つて四國にも旅して、讃岐の八島にまで足がのびてゐる。

もののふの八島の浦の夕波にながれもあへぬ弓張の月。

旅から旅へと旅心安住の生活をしながら其の足跡を近畿の至る所に残した蓮月尼も、老ひ
ゆくにしたがつて旅よりも閑居の風味にひたつてゐたやうである。其の閑居の生活に於てい
かに旅の所々が懐しく回想せられたであらうか。確かにこのことが彼女の老後のよい慰安で
あつたらうし、又閑居の生活がそのまゝ旅の生活であることもしみじくと味はつたに違ひは
なからう。

世を思ふ

一

風雲の中に身を置き旅の空に身をやつす蓮月尼はいかにも一人の世捨人であつた。けれども尼は決して單なる出家ではなかつた。日本の一人の女性としての心は一日も忘れるものではなかつた。現世の名聞利養からは出家したけれども、又眼しひたる人の世を思ひもなげに捨て去つたけれども、この美しき國土に生れた一人の女性として國を愛する心は少しも捨てることはなかつた。この美しき風雲、この安き旅、この恵まれた日々の生法は、現神の昭々乎として照らし給ふもとに於てはじめてなされるのであつた。太陽の恵ましき光に照らされてこそ、自然の美しさも風雪の匂ひもはじめて其の美しき光を増すのであつた。

敷島のやまとは、神の國であつた。神によつて建てられ神によつて育てられ護られてゐる神の國であつた。この美しき風物も神の御意の現はれであり神の御心の造らせ給ふたものであつた。自然の魂はやがて神の御意の匂ひであると云つていゝ。尼に於ては自然の魂にひたすることは神の御言に副ふことであつたに違ひはなかつた。敷島の大和心は咲く花の朝日に匂ふと云はれる。花の心はやがて大和心であつた。明を愛し淨を思ひ直を行ふ心は大和心であるが自然は正に明であり淨であり直であつた。

蓮月尼はこの明るい淨い直ぐな心をもつて自然を見ると同時に國を思ひ國を熱愛するのであつた。この神國にこの心を直ぐに行ふことを國民の義務であると心得、現神に對する誠を國家の理性と考へてゐた。こゝに一人の國士として、一人の尊王愛國者としての尼の姿が示されて来る。

○ 萬代のはるのはじめとうたふなりこは敷島のやまと人かも。

○ 青柳のなびくを見れば末長き御代のはじめのはるの神風。

○ 日にそへてめでたきふしやかぞふらん千代をこめたる宿の若竹。

○ 小山田のひたのかけ繩打はへてけぶりにぎはふ御代の秋かな。

○ ひなづるの行末とほきこる聞は御代を千とせとうたふなりけり。

むれかめのひとつひとつの萬代よろづよをとりつどへつゝ君をかぞへん。
ちよ萬かけよ／＼とうたふなり明ゆくとりのはるの初聲。

みしめなはなびくをみれば末長き御代のはじめの春の神風。

咲そめし千代のむかしもゆく末の秋のかぎりもしら菊の花。

はふり子がたちまふ袖にちる雪をぬさと手向て世をいはふらん。

ま心の清きをかみのやどりにてあまくだります御代ぞめでたき。

あめつちにすきてとほりて明らかき御代のためしのが玉ぞこれ。

これぞこの君と臣との道しるべふみたがへてはゆかれざりけり。

弓矢とり太刀たちさげはきてこん世には君につかふる身とうまれこん。

若竹のねざしひろぐる國原やなほくふしある御代のなかみち。

君が代はいさめのつゞみ苔のむすむかしの風もおよばざりけり。

君がよのたぐひなりけりその名さへくもゐにたかきふじの芝山。

日の本のめぐみをよもに敷島の道のひかりぞいやあきらけき。

此等の歌がいかに尼の熱愛が國家に瀧がれてゐたかを示すに充分である。尊王の心が我國民の理性であり信仰であるかも、この歌によつてよく示されてゐる。尼は汗あせの如く其の心よりこの歌を熱愛する國土に滲み出したのであつた。恰度幕末ちやうどまくらつに近き頃に世に生れ、世の交替と其の動亂を備つよさに眼に見た尼が、殊にこの心を深くしたことは云ふ迄もない。時勢じせいを憂うれひ宸禁しんきんを惱まし奉ることを心から悲しんで居る。

よあらしのおと高山に入てまし世の道ならぬゆめも覺さむやと。

一かたになびきもあへず糸薄みだれゆく世の秋ぞかなしき、

いとすゝきひきていにしときくからに東風こちの強つよさを思ひこそやれ。

さりともものたのみもきれて糸薄みだれゆく世の秋ぞかなしき。

いつとなく月日のかげはてらせども世のうきぐもやたちへだつらん。

よそにきく音もはげしき時津風花のみやこをちらさずもがな。

うつ人もうたる人もころせよおなじ御國の御民ならずや。

あたまかたかつもまくるも哀なりおなじ御國の人とおもへば。

〇きゆとみしこぞのみゆきは富士のねのそらにひかりて猶いましけり。

此等の歌には高き國家的見地に立つて風雲の亂れを悲しむ心に濡れてゐる。

二

蓮月尼にいかにしてこの崇高な國士的教養がなされたであらうか。不幸につゞくに不運が
このかよはき女性を悲惨な境界に其の殘虐を縦になしつゝあつたのに、この高貴なる精神が
何處より顯れ來つたであらうか。禁裏の下の京都に育てられたことと、時代的趨勢と、そし
てどこまでも芽えてゐた彼女の心性とが、この崇高なる愛國的熱情を培つたと云つていいで
あらう。殊に時代的趨勢が最も與かつて力あつたことは云ふ迄もない。

古學復興の運動が賀茂真淵によつて提唱せられてから鬱然として國學が興り復古思想は都
鄙に漲るやうになつた。下河邊長流、僧契沖、本居宣長を中樞とするこの運動はやがて多く
の古學の大家を出して居り、それはやがて又た直接に尊王思想を澎湃たらしめるやうになつ
てゆく。水戸家の大日本史の編纂が、それらの運動の最後の結晶のやうに金字塔として光世に

を投げかけてゐるのであつた。これは又この時代の指導精神として國民を動かし引いては實
際運動となつて幕末の擾亂となり、明治維新を大成するに至るのであつた。

これ等の運動の先驅者や其の早き後繼者達は尼の出生の前後には大方世を去つてゐた。林
子平や、高山正之や、本居宣長やは尼の幼少の時には既に世を去つて居り、幕末維新當時の
志士が次第にこの世に生を受けつゝあつた。世は漸く多事を加へ、幕府の威令は日々に衰へ
てゆく。外船が浦賀に來た文政五年は尼の三十二歳の時であり、攘夷令が發せられた文政八
年は尼の三十五歳の時であつた。伊井直弼が大老に任ぜられた天保六年には尼は四十五歳を
數へて居り、渡邊華山、高野長英が下獄した天保十年は四十九歳。吉田松陰、佐久間象山の
投獄の安政元年は六十四歳。梅田雲濱、橋本左内、頼三樹、吉田松陰の斬られた安政六年は
六十九歳。櫻田の變の萬延元年は七十歳であつた。

かく考へて來ると尼の生涯は幕末維新の波瀾に直面し、洵に數奇を極めた時代的背景が尼
のバックとして展開してゐたことを思はしめる。この波瀾重疊の時代相を背景として、走馬
燈の如きバックを背負つて、其處に靜かに靜思する一女性を想像することが出来るであらう。

彼女も亦た一人の男性であつたなら、この多くの時代創造の若き志士に交つて光輝ある歴史を創る運動に参加したらうことは想像に難くはない。唯女性なるが故に身を虔しくして静かに世の成行を静思してゐたに過ぎなかつた。

けれども其の静思は彼女を一人の哲人とし詩人としたのみではない。熱烈なる一人の國士として此等の志士の陰にあつて大いなる寄與を惜しまなかつた。此等の若き志士達との交遊、志士に對する激勵はもとより、其の心魂には尊き憂國の血潮が國學の素養と共に確乎として刻みつけられてあつた。然らばこの一人の女性が、いかにして國學の素養を得、一人の國士としての精神を培つたであらうか。

尊王の思想が都鄙に遍くなるに従つて王城の地京都は此等の國士の搖籃として勤王の氣圍氣が次第に昂まつていつて、多くの志士が集りつゝあつた。公卿も町人も漢學者も和學者も國學の研究にいそしみつゝあつた。恰度此の時代に上方を代表する文學者には上田秋成があり、歌人に小澤蘆庵があつた。秋成はもと大阪の生れであつたが加藤宇萬伎の門に學び、一人の國學者でありこの時代の代表的文學者でもあつた。老後京都に住し南禪寺々中に居り、

風流韻事を事とし清節にして一生を終つてゐる。其の歿年は文化六年七十八歳であつた。この秋成が死んだのは尼の十九歳の頃であり家庭の人となつて間もなき時期であつた。尼の國學がこの一老學者より授けられたと云ふのであるが、或は左様もあつたらうか。彼女の國文學の素養が深かつた事が源氏物語や枕草紙を愛讀してゐたことによつて想像し得らるゝが、其等の素養も、この翁によつてなされたかも知れない。

然し國學の素養はたとひ秋成より得たとしても、其の素養の一部であつて、其れが大成せらるゝまでには其後多くの人々との交渉があつたことを忘るゝわけにはゆかない。

三

秋成よりも寧ろこゝに問題となるのは小澤蘆庵である。蘆庵は尾張の人で冷泉爲村に國學を學んだと云はれてゐる。ついに其道に一家をなし又此の時代の代表的歌人でもあつた。やはり京都に移り岡崎に住して廉直の一生を送り、勤王の志が厚く清貧の生涯を終つたと云ふ。この蘆庵が死んだのは享和三年で尼の十三歳の時であつて、尼自らは蘆庵に師事したことは

無いけれども深く彼れを敬してゐたことは云ふ達もない。一人の歌人として立派に不朽の名を残し得た尼が其の典型を彼れに求めて居り、其の感化の最も深かつた點より見ても其れ充は分であつた。蘆庵の後を繼ぐ香川景樹の歌の影響もあると云はるゝけれども、尼自ら深く其の憧憬の的であつたものは蘆庵であつた。

彼女がいかに小澤蘆庵に憧憬してゐたかは同志の友であつた村上忠順に送つた幾つもの書簡の中によく窺ふことが出来る。

「……ことしも夏比よりすゞしきかたにとて、大佛のうちらにうつろひものし侍りてなん。こゝに小澤ろあんぬしものし玉ひし文ども、宮の御藏にこめ玉ひしをいかでみてしがなと年比思ひわたりしを、こたびこの御寺のりしの君に、とかくたばかりものして、いとみそかにかくれてみ侍ることになん侍る。さればこんとしのさ月比までは、猶こゝに侍らばやと思ふにも、あすしらぬみにてあやしうすきたる心は猶やまさりけり。……」

「……ともすればまたも氷のむすばれ、雪の花さへちりぬれば、老はいとど埋火をのみいのちとたのみくらし侍りて、かの小澤ぬしの書なども、かにかくおこたりて、何事も思

ふのみにてはかな月日をおくりつゝ、いとくちをしきわざになん、大佛の庵もこぞしはす比には寒さのたへがたく侍りて、夏こそよけれとて、知恩院にかへりすみさもらひぬ。花の比過しなば、又大佛のかたや、北しら川の庵にかうつろひ侍らんと心し、心にひとり思ひ侍りてなん。……」

「……小澤ぬしの書は、れいの六帖詠草五十卷、半紙とち五十枚ばかり、ひしと書つめ、その比の伴ぬし、ちよう月大人、秋成、ゆれん、ちかけ、春海、かたぐの歌くわいも侍り。外にざいうの記二十卷、これはことに虫ぼみ候て、うらうちもつゞき侍らでくちをし。歌のまき五十卷は、うらうちもできさもらひて、ことよろしうなりぬ。ま事は極内にて、こゝまでかりもてまゐりて、此比もみ侍るになん。かのうしの心のまゝに、うち思ふまゝをよみいで玉ひしかば、近き人の、おもしろきなど申すやうには侍らず。大佛のみうちに、故宮のみ世に玉はりたるとて、からのかみ半切にして、つくぐしのかたに、さをじかのあしあとをみついつゝかきて、その中にもみぢのきなるが二つばかりあるが秋の急にて、

この秋もゆきてかへらぬ跡みればわれもねにこそなきぬべかなれ。

これは世に侍る六帖詠草に侍るところにてしろしめしつらんと思ふ。……」

この書簡によつて小澤蘆庵がいかに尼に慕はしいものであつたか、略想像し得られやう。尼が屢々住んだと考へる大佛の閑居は、妙法院の宮に蘆庵の書の多く珍藏せられてゐるのを拜見するためであつたことも略見當がつくやうである。わざ／＼居を移してまで屢々其の拜覽に浮見をやつす尼には蘆庵の歌が「……めづらしうあはれにて、昔の人々にまじはるやうにて……」と、蘆庵について千蔭や春海の歌がつゞいてゐるのを賞してやまないものであつた。

めづらしうあはれにてと云ふ言葉の中には、いくら繰返しても滋味の深きをたゞへる心がある。「……かのうしの心のまゝに、うち思ふまゝをよみいで玉ひしかば、近き人の、おもしろさなど申すやうには侍らず。……」歌の面白さを和歌の生命とせず、生命の藝術として和歌を詠み出でた蘆庵を飽迄思慕してやまない尼には、蘆庵の生涯、並びに其の尊王の精神が深く彼女の心に移されてゐたことが領かれるであらう。親交の厚かつた道休和尚へも蘆庵の歌を書簡にして送つてゐる。勿論尼が歌なるものに精進するやうになつたのは父の光古が

其の道に興味をもつて居たと云はれ、又尼自身もつ天賦にもよるけれども、其の長い生涯を蘆庵に私淑したことによつて更に磨かれたことは云ふ迄もない。

こゝでは和歌は問題ではない。彼女の國學の精神はまづ歌を通じて小澤蘆庵より受容れたことは明らかな事實と云つていい。北白川の心性寺に止住したことも、其處に蘆庵の墳墓があり、思慕のあまり其の墓畔に居を占めたと見るならば、更に其の深さを推察し得やう。

四

蘆庵について尼の國學的素養に深い關係をもつものは六人部是香である。是香は平田篤胤の門下として國學の正統をつぐものであつて、しかも其身は山城向日町の向日神社の神官であつた。其の職務と云ひ其の素養といひ、ともに勤王の士としては當然しかあるべき人であり、京都にあつて塾を開き多くの門下を養ひ、以つて當代の國學の有力なる指導的學者として重んぜられてゐた。

尼は嘉永二年に是香の門に入り、其の教養を受けたと云ふ。二年は恰度尼の五十九歳の時